心せなければ自殺の途しかないのであらう、回心も自殺も自己否定であり自己放棄である。併し回心は永久の生命の獲得であるが自殺は滅亡である。一方は生存の勝利者であるが、他方は落伍者である。

回心と自殺とは又死後に希望を有し歡樂を望んでゐる點に於て一致してゐる。自殺者の「あの世で夫婦にならう」「七度生れて賊を平らげやう」などいふ所は回心者が「罪の世を脱して聖い生活をなす」といふのと殆んど同樣である。

尙自殺と回心とは心理的に多くの一致點や關係のある所があるのであるが餘り長くなるから此れ丈けにして置く。

八、回心の價値

回心が催眠現象の一つとして現はされた場合吾人は回心としての價値を見出す事は出來ぬ。それには何等知力の作用なく、行動の合理的根底といふものが失はれてゐる。「罪の感」の上に回心が成り立つてもそれは罪の自覺にまで發達したものではない。そは主觀の良心に於て極めて感じ易い點に於て成り立つたものだけで十分罪の實在を思考した譯でない。夫れ故斯かる回

心者の罪の感の中には嚴密に見るなら宗教的性質も道德的性質も社會的性質もないのである。若しそうであれば罪が罪の意義をなして居らぬ譯である。それ故人爲的な回心者を得ん爲めにせられる方法の下に作り出された回心者は宗教生活に於ける深さもなければ、又彼等には實在感の十分なるものがない故に宗教生活の高さも感得せられてないのである。夫れ故たとひ彼等が僞善的宗教信者でないとしても、彼等は形式的な又浮薄なるものといふ事が出來やう。或る通俗說教家がスコットラントの北部に行つて熱心に說教して廻つたが遂に彼は其勞の效なきをつぶやいた、彼は急激な回心者を卽席に求めやうとしたのであつた。所が或る一人の婦人が彼に向つていふに「私の母は、私が回心する前五年間山の中で祈つて居りました、何を五分間位の時間で回心するものですか」と。吾人は五分間位で回心者を得んとしてもそれは無益である。眞の回心者たらしめる爲には其前、氣長く教育せなければならぬ。

併し以上述ぶるが如き回心者を得んとする回心術者は動もすれば宗教々育事業に對し其效果の微弱なる事をいふのである。併しながら何等かの教育によりて幼時より次第に宗教心が耕やされありし所へ回心術者が施術をなして得た回心者が回心術者が得る回心者全體より見て恐らく大部分を占めてゐるに相違ない。人々の良心の一部分に宗教的の言語行動に對し若し感じ易

い部分がありとせば、そは廣義に於ける教育によりて其部分が保存されてゐたとせなければならぬ。特に意識的に宗教々育を施されてゐたのが回心術者の施術によりて回心する事の容易さは、恰かも子供が咲きかけてゐる花を手に取つて息氣を吹き込みて開かせると同樣である。併し無理に人爲的に然ふせなくても時到つて開花するものを時を縮めて早く咲かせる事は花そのものゝ爲めに果して害なきか。更らにいはん、未だ蕾の頃、花瓣が全く蓼によつて堅く包まれてゐる頃無理に蓼を破りて花瓣を引き出すが如きことあるを見ては既に言語同談である。彼等は魂を救濟するのでなく、殺害するものといはずして何ぞ。

若し吾人が回心術者のなす所に何等かの價値を認めるとせば惡習最早其血液を冒し既に教育によるも又他の如何なる方法を施すも、眞性の人間に改造する事の出來ぬ、いはゞ病膏盲に達したものを蘇へす爲めには回心術者の取る方法の效果は決して尠しとする事は出來ぬ。

一般の回心は回心術者によりて實現せられるべきものではなく、教育によりて實現すべきものである。而して教育による靈魂の救濟を認めるのである。回心は最初述べし如く宗教心理學研究の中心問題となつてゐたのであるが、此れが一種病的な、或は催眠的現象と見られる傾向と共に又宗教心理學の範圍の擴大せらるゝと共に、回心は宗教心理學書に於て僅かに一小部

分を保つてゐるに過ぎぬ樣になつた。併し回心そのものは決して病的のものゝみでなく靈的發達の極めて正常的のものを含むものである故予は回心を以て宗教心理學の中心題目と認めるのである。

第八章　宗教の民族的發達

一、序　說

宗教に進化ある事は既に疑ふべからざる事實である。故に予は本章に於て「宗教の發達」と題し專ら民族に於ける宗教が如何なる發達をなしたかを心理學的に考究し、其過程又は進路を明かに見たいと思ふのである。

所で本章に於て述べんとする事は主としてヴントの「民族心理學原論」によりて記述した事は前以て讀者の諒を得て置きたいのである。ヴントの「民族心理學原論」は英譯で五二三頁の大部のもので、民族の宗教意識を明瞭に叙述してゐる點に於て蓋し本書の如きは又他に求める事は出來ぬ。それ故此の種の記述を本章になさんとするに當りて大部分は其書によることゝした。尙本書を邦語にて解說したものには桑田芳藏氏の「ヴントの民族心理學」がある。本書はヴントの「民族心理原論」を簡明にしたものらしく、全體の思想を極めて簡略に記載してゐる故、こゝに本書をも參照する事とした。

ヴントは民族の發達を次ぎの四階段に分つてゐる。

1. 原始時代
2. トーテミズム的時代
3. 英雄及び神の時代
4. 人間態への時代

これである。然らばこれより直ちにこの四階段を追ふて宗教の發達を見る事とする。併し宗教はそれ自身單獨の發達をなすに非ず外部的生活の發達と密接なる關係を有してゐる。それ故章は長くなるが、それはかなはずに外部生活の發達狀態をも出來る丈け見たいと思ふ。

二、原始時代

原始人　原始人は如何なる生活を營んでゐたか、又如何なる宗教を有してゐたかを述べる前に原始人は如何なるものをいふかを定めて置かねばならぬ。原始人といへば時間上最初の人といふ意味ではない。時間上の原始人に就いては今日吾人が直接研究すべき材料を有してゐないのであるから、それに就いては吾等は何ら知る由もないのである。聖書によればアダムとエバを以つて最初の人としてあるが、そは單に傳說であつて科學的には何の意味をもなさぬ。ル

ッブスの如き哲學者は原始人を恐ろしい者、相互に狼の如きものであるとし、ルーソウの如きは、原始人は何等の束縛なく、極めて自由平和幸福なものであるとした。然し此等は皆假說であつて何等據り處があつてではない。原始人に就いて科學的に研究をなすのは人類學者である。人類學では土中より發掘したる遺物よりして、原始人を組みたてるのである。遺物といへば遺骨と技術品とであるが、其れらに對する解釋は、今日に於ては固より曖昧たるを免かれぬ。夫れ故此れらの方面に於ては尙人類學研究の進歩に俟つ事とし、現下に於ては果して何を以つて原始人とするやといふ事に就いて、吾人は止むを得ず、時間上の最初の人よりも現存の未開人に向はねばならぬのである。ヴントがいへる如く「地下に原始人を求めるよりも地上に求めねばならぬ。」然らば次ぎには如何なる種族を以つて原始人となすやの問題であるが、ヴントは世界の所々に散在せる小人々類を以て原始人と見てゐる。「小人の發見は獨の旅行家にし探究家なるシュヴインフルトがなしたのが最初で、彼は一八七〇年、アフリカのナイル河をさかのぼつた。其さかのぼる間、ヌビア人の舟人から小人々種の話を聞き大なる興味を喚び起した。而して彼は昔ホーメルやヘロドタスやアリストートル等の書に、小人に關する譚の載つてゐた事や、殊にアリストートルは小人は眞實中央アフリカに棲んでゐるといふてゐるのを想ひ

起した。やがて彼はモンバッタス地方に着し、小人々種を發見したといふ事である。シュヴインフルトが、此の小人を發見して以來、地球上所々に同人種が發見された。フイリッピンのニーグリト種族、セイロン島のヴエッダ種族、マレー半島の内地に住するセマング及びセノイ種族、南アフリカのブッシユマン族、其他セレベス、スマトラ、サンダ等の諸島の土人も皆之れに屬してゐる。又アンダマン島の土人の一部も此の種に數へられる。此等の種族は其の身體矮小で、或るものは全身が初生兒の如く軟かな細毛を以つて掩はれ、又あるものは動物の如く臭氣を放ちてゐる。尤も斯る身體的特徴は原始人を定める標準とはならぬが、ヴントは其精神的文化の極めて低級で、彼等の精神現象が極めて單純である事、而して其精神現象を説明するに以前の狀態に遡る必要の少ないことなどを見て、こは確かに原始的であるといふてゐる。デユルケームも宗教的組織が最も原始的であるといふには次ぎの二條件が必要であるとした。(「宗教生活の初代形式」一頁)。

一、社會組織の最も單純なる社會に見出される宗教である事、

二、其宗教を説明するに當りて以前の宗教の要素をかる必要のなきもの、

兎に角、吾人は原始人の生活狀態を知らんとせば右述べし如き現存の最未開人に就いて知る

の外到底充分なる材料を得る事は出來ないであらう。

原始人の生活　生活といへば先づ衣食住の三方面の事を見なければならぬが、先づ衣服の事から述べやう。原始人は固より吾々のいふ衣服の如きものを有してゐない。原始人の生活は何にせよ凡て物の起原を告ぐるもので、衣服なども腰の周圍に木皮に木の枝を結び付けたものをつけてゐるに過ぎぬ。食物は肉類、植物、果實などであるが、其中何れが原始人の主食であるかといふに、そは境遇の如何によりて同一種族でも時と處とにより變化するのであるから、原始人といへば直ちに肉食をしてゐると一概にいふてしまふ事は出來ぬ。火食は何時頃から始まつたか如何にして、それをなす事を考へ出したか吾人は知る事は出來ぬ。或は發火法の發明の後か、又は同時であつたか知る由がない。發火法の發見に就いてヴントのいふ所によれば、原始人が器物を作る爲めに竹の鋸を以つて竹の筒を切る時、若し天氣のよい時であると摩擦の爲めに鋸屑に火が附く、是に於て一種の發火法が發見せられて後錐（堅い木のとがつた棒）を以つて、木に鋸り法といふてゐる。此の鋸り法が發見せられたのである。此の發火法をヴントは穴をあける必要が生じ、木に穴をあけてゐると、その時錐屑の摩擦の結果火がつく、此れはさきの鋸り法よりも一層エフエクチーブの方法で、此れをヴントは錐り揉み法と名附けてゐる。

大きに住居に就いて見るに原始人は主として洞穴に住居してゐる。時として樹上や樹下に居住してゐる。又時として木の枝葉を組み建てゝ、風避の類を作つてゐる。原始人の風避は圓形につくられてゐるが、それは自然の森の葉蔭に擬したものであるといふ。

原始人の使用せし器具　使用せる器具は人間の文化を示すものである。人間が動物から次第に進化したものとすると、器具の使用は恐らく人間になつて初めつた事であらう。人間が何時の頃から道具を用ゐたかは殆んど知る事は出來ぬが、人類學者の說によれば今より三十萬年乃至十萬年前既に或る器具を使用してゐたとの事である。オスボンといふ人の書いた「舊石器時代の人間」（一九一六年）を見るに五十萬年前の「猿の人」（一八九一年オランダの軍醫デユブアといふ人が、中央ジャバで發見した遺骨から想像したもの）と「曙の人」（一九一一年英國のドウソン氏がサセックス州のピルトダウン附近で發見した遺骨から想像したもの）の話がある。此の「曙の人」は十萬年乃至三十萬年前の人間であるといはれてゐる。此の骨が出た同じ土層に燧石（フリント）が發見された。前の「猿の人」の時代に器具があつたか否かは不明であるが「曙の人」の時代には既にフリントの如き器具があつたといふのである。併し此等の事は尙研究を要する事で吾人はかゝる說に未だ充分の信を置く事は出來ぬ。兎に角使用せる器具が人

間の文化を說明する事は明かな事である。始め極めて簡單な器具であつたものが、今日は複雜極まる機械となつて現はれ、又凡てのものが機械仕掛でゝき、今日は此れが過度にまで走りて人間自身までが機械となり、人が主か機械が主か判じ兼ねる程になつた。

ヴントによれば原始人の器具としては女子が木根、球根などの食料を掘り出すに使ふる、先端の尖つた堀棒、男子が武器として用ふる弓及び矢がある。そこでヴントは石器時代の前に木器時代のあつた事を假定してゐる。そは兎も角とし、弓矢が武器として用ゐられたのは後の事で始めは戰爭の爲めではなかつた。何となれば始めは全體と全體との戰爭はなく、全體と全體とは極めて平和であつた。始めは只時々個人と個人とが相爭そつたのみであつた。それで弓矢は主として獸獵の具とせられてあつたものである。此の弓矢の發明に就いて考へて見るに、原始人が弓矢を特別に工案したものではなく、多分最初使用してゐた器具、掘棒とか、棒又は槌の如きものから考へ及んだものと思はれる。改良は發見よりも容易であるからである。

原始的社會　原始人が山の中に生活してゐる時、雨に降られて洞穴の中に逃げ込む。大きな洞穴でもあると、それには數家族が這入る。かくして彼等は親密になる。此の時社會の原形が

出來るのである。而して此れが次第に自然擴張せられるのであるが、此の時結合せしむるは血屬的（エスノロヂカリー）でなく地理的（ヂオグラフィカリー）の關係である。即ち彼等原始人は食物を得るに都合よき結合をなしたのである。人間は社會的の動物であるとはアリストートルのいふた處であるが、人間は元來社會本能を有するが故に、此れを滿すべき機會さへあれば、その機會を捕へて社會を形づくるのである。併し始めは組織立つた社會があつたのではなく、所謂人群（ホルド）に過ぎなかつた。ホルドとは無組織を意味する言葉である。それには別に確定した指揮者とか、又は會長の如きものがない。只臨時に時々狩獵などの指揮者に老人がなる事があつても、仕事の終了と共にそれはなくなるのである。

人群と畜群（ヘルデ）との相異する所は人群には個人との間に關係（リレーション）があるが畜群には之れがないといふ點にある。人群に於ける此の個人間の關係は言語によりて築かれるのである。斯くの如く人群には言語があつて個人間の聯絡をなしてゐるが、畜群にはそれがない。人間の社會本能は言語を作る事に於てオペラチーブであつた。併し人間が社會生活をせなかつたなら、又個人と個人との間に精神相互作用がなかつたなら、言語が生ずる事はなかつたであらう。それと反對に言語は社會生活を強める。而して動物的生活から益々向上せしめる。斯くの如くヘルデより

ホルドを區別せしめたものは即ち言語であつたのである。

原始人の知的性質　一體原始人の知識は文明人のそれよりも低級であるとは一般にいふ所である。併し果してそれが如何であるかといふ事は、容易に決する事は出來ぬ。今白人種の頭腦の大さと野蠻人のそれとを比較して見るに、白人種の頭腦の普通の大さを一四五〇乃至一六五〇立方糎とすれば、歐羅巴人の五十五％、アフリカ黑人の五十八％、メラネシア土人の五十八％が此れに屬し、一五五〇立方糎より大なるものは白人種中に五十％黑人中に二十七％、メラネシア土人中に三十七％ある。此れを見ると頭腦の大なるものは白人種中に多くある事はあるが、全體から見て、此れを以つて直ちに野蠻人の知識程度を定める事は出來ぬ。（ボアス「原始人（プリミチーブ・マン）の心（マインド）」（一九一一年）二九四頁）

固より原始人の知識は文明人のそれの如く博くはなかつた。極めて狹隘なるものであつた事は明かである。併しそは知識の性質といふよりか寧ろ知識の範圍である。範圍に於ては吾人の知識と相異してゐるが、性質に於ては異ならぬといふのがヴント等の主張である。然らば彼等の文明が停滯してゐるのは何故であるかといふに、或る者は、そは必要がないからであるといふのである。即ち必要さへあつたなら彼等の知識もドシ〳〵進歩する筈であつたが、必要がな

かつたから停滯してゐるのであるといふのである。ヴントは此の何故彼等の文明が停滯してゐるかといふ事に對し、次ぎの二つの條件を附してゐる。

一、原始人が無慾である事、

二、他種族との交渉が無い事、

原始人は無慾であつた爲め高い文明の諸産物を自己に受け入れないで、反つてそれを排斥するのである。それが原因となつて彼等の文明は停滯するのである。我が邦維新前は固より原始狀態ではなかつたが、彼の鎖國主義を今日まで固守して、廣く知識を求むる事をせなかつたなら、全く井の中の蛙で、今日の如き文明はないであらう。併し我國民は原始人とは變りて慾望があつたのである。慾望があつた爲め、自然他種族との交渉があり混交、戰爭、移住などがあつて、國政は益々複雜し、外交は益々困難を極める。それで益々他を凌がんとして知的にも愈々向上せんとした。かく考へると文明が進歩するのも停滯するのも慾望即ち要求のあるなしにより、又他種族との交渉の有無による事と思はれる、原始人にはつまり之れがないのである。

原始人の道德的性質　原始人は道德的であつたか、非道德的であつたか、又は無道德的であつたかといふ事に就いては異說のある事であるが、或るものは道德的であつた事を主張してゐる。併し眞に原始人が果して道德的であつたか或は否らざりしかといふ事は想像によるの外何等の證據はないのである。今日の原始民族の中にもヴェッダやマラッカ半島の土人の如きは正直で無邪氣で窃盜などはしないが、これに反してフィリッピンのニグリートーやブッシュマンの如きは恐怖甚だしく詐欺瞞着の性質を有してゐる。そこでかくの如く原始人に道德的に二種の區別を生ぜしめたものは何であるかといへば、境遇であつた事は明かである。常に他種族から壓迫攻擊をうけてゐるものは自然不道德的になり、然らざるものは道德的になつたのである。俗に「すれつからし」のものが不道德的になり、境遇上「うぶ」なものが道德的なのである。此れは今日不良少年と、然らでない子供との境遇に見ても明かに一致點を見出すのである。

今日一夫多妻といへば社會道德の上より見ても、個人道德の上より見ても、甚だ不都合なものとなつてゐるが、原始人は果して如何なりしかといふに、スイスの法律家バッコヘンといふ人は一八六一年「母の權利」を著して、其中に結婚の最初の形式は一夫一婦である事を論じてゐる。更らにヴントによれば、原始人はブッシュマンを除く外一般に一夫一婦であつたといふ

のである。ではブッシュマンが一夫多妻であるのは何故かといふに、そは周圍のバンツウ、ホッテントットなどから其の風俗を輸入したので、ブッシュマン固有の風俗でないとヴントはいふてゐる。而して一夫一婦は多くの動物、殊に人間に近きゴリラに於て見られる。又チムパンジーに於ても然うであらうといふてゐる。では動物が一夫一婦である所以は何であるかといふに、ヴントは之れに對して個人的好惡から起るとしてゐる(「人間及び動物の心理」第四版一九〇六年四九〇頁)。一夫一婦になる原因は時々は嫉妬である樣に見られてゐるが、ヴントによればそは原因でなく結果であるといふのである。

又男女道德も極めて嚴格なものがある。例へば男子が義母に對する時、他人の面前では自由に談話し、義母が調理した食物を食しもするが、傍に人無き時はすべて此等の事を愼むのみならず、互に相觸るゝことも禁じられてある故、たとひ義母が倒れて傷つく樣なことがあつても之れを扶げ起こすことさへしない。若し又人無き所で行逢ふ場合にも男は途を外づして合はない樣にする。岩屋に歸つても義母の外に誰れも居らぬ時は、內に入らず必ず他人の來るのを待つのである。男子が其子や兄弟の妻女に對する時も、女子が其姉妹の夫に對する場合も亦同樣である。互ひに婚約した男女とても濫りに相會ふ事は許されて居ない。(「神學研究」六ノ二)

此れはセイロン島のヴエダ族に就いての一例であるが、此れを以つて見ても原始人の內に如何に嚴格なる男女間の制裁があつたかを見る事が出來る。

次ぎに親子間の道德に就いても一言しやう。オーストラリア土人の中には婦人は姙娠中は肉食を絕ち、專ら菜食する。それと同時に夫たるものも妻が懷姙したなら初め數ケ月は獵に出かけるが、その時でも大きな獸を殺すことは愼むといふ事である。而して他人が殺したものは食しても自分が殺して食する事はせないといふ。それは姙婦の安產と生兒の健康を希ふ所から然うするのであるが、今日でいへば胎教ともいふべきものであらう。彼等はそうせないで肉食を敢てせば、胎兒が怒つて母體に疾病をひき起し、夫が愼まないと生兒は折角生れても直ちに天に歸つてしまふと考へたのである。彼等は又小兒は生れた時には未だ靈魂を有してない。此れを有するのは生れて追々に得るのであると考へ、此の小兒が靈魂をうける間は親たるものは充分注意して小兒のため最も善良なる境遇を作つて置かねばならぬと考へてゐたのである。此れは吾々の社會でいへば兒童教育ともいふべきものである。一方にかゝる美はしい所があるかと思へば、他方に於てはオーストラリヤ土人の母は其の子を殺して喰ふといふ話もある。併し此れは殘忍無道の極の樣ではあるが一面から考へると寧ろ同情すべき點も見出されるのである。

何となれば彼等は初兒を喰へば次回からの出産は安易であると信じたからである。又纖弱な子供には其兄弟の强健なるものゝ肉を喰へば、强者の精力が弱者に移る效能があるといふので、止むなく此の犧牲的殺生の擧に出づるのである。此れは親が子供を喰ふ例であるが、スマトラの土人の中には子供が親を喰ふものがあるといふ事である。親が病にかゝるとか、或は老衰して身體の自由がきかなくなれば、其親を殺して喰べるのである。斯ういふと如何にも無道な仕打ちと思はれるが、內心をうかゞへば之れ亦決して無道とばかりいへないのである。或るキリスト敎の宣敎師が此の擧に出づる土人を見て「何故にかゝる殘酷な事をなすか」と問ふたら、土人曰く「貴國にては親が死んだら如何するか」宣敎師曰く「我國では親が死ぬると土中に埋むる」土人曰く「貴い親の身體を土中に埋めて虫に喰はせるよりも自分が喰べた方が餘程よいではないか、親を愛する爲めに自分等の身體を親の墓にするのだ、而して我が腹中に埋むるのだ」といふたとの事である。成る程然う考へると彼等の所爲は一見甚だ酷なもので、全然道義心を缺如してゐるものゝ樣であるが、心中は決して然うではなく、彼等特殊の道德なのである。

次ぎに商業道德に就いて考へて見やう。商業といふても貿易なので、其貿易はヴントによれ

ば無言貿易（ジラクレフト・ハンデル）と稱すべきものである。無言で貿易が行はれるのである。其最も顯著なる例として見るべきものはヴエッダ民族のそれである。ヴエッダは夜中に其近所のシンガレセ族の鍛冶屋に行き、自分が若し矢が欲しいと思へば、矢の雛形を棕櫚の葉で作つて、それに交換せんとする象牙とか、又は狩りで得た獸肉などを添へて置いて歸る。而して次ぎの夜そこへ再び行き、取り換へられてある鐵製の矢を得て歸るのである。かくして何物でも（併し主として鐵類、布類、裝飾類）無言にて他の種類と貿易せられるのである。所がかく間違ひなく無言で貿易がせられるのは勿論、ヴントがいへる如く互に復讐を恐れる所からであるが、或る程度に於て相互の信用といふ事も含まれてゐるとも思はれやう。かゝる原始人の無言貿易が進んだ一つの形とも見るべきものは、フイニキヤ人の無言商賣の如きものであらう。ヘロドタスの書に、フイニキヤ人の無言商賣の事を記してゐる。フイニキヤ人は早くから商賣の發達した民族で商賣の取り引きを全く無言で行つた。故に此れを俗に啞の商賣と名附けてゐた。商人が地中海の沿岸で買ひ集めた品物を自國に持ち歸り海岸に陳列する。而して着荷の知らせに烽火をあげて置いて船に歸つてしまふ。人々は賣手のゐない其市場に集つて來て、てんでに自分の欲する品を評價し、相當の價と考へる丈けの錢をそこに置いて品物を持つて歸る。後程商人が市場に歸つて

來て、若し置かれてある價が相當なものであれば、そのまゝ持つて行くが、然らざれば錢をそのまゝそこに置いて、其れを買つて行つた人に尙反省を促がすといふ風である。此れなとは餘程進んだもので、その中には明かに買ひ手と賣手との間に德義心が認められるのである。そしてそこには何も復讎を恐れるといふ心は働いてゐない樣である。所で原始人の無言貿易には全く德義心のみで行はれるとも思へないが、併し復讎を恐れるといふ事が、それが行はれる唯一の理由とも思へない。

子供と野蠻人とはよく似てゐる事は何人も認めてゐる所であるが、子供が時としたなら無言で貿易をしてゐる事がある。予は幼少な頃田舍に生ひ立ちし故、或る村落の子供等と他の村落の子供等との關係は今から考へると、全く野蠻人のそれと殆んど全く同樣であつた樣に思ふ。嘗て余が兵隊事をして遊んでゐた頃、隣村の子供等に多くありて自分等に少なかつたものがあつた。それで所謂無言貿易をする爲めに、こちらから種々なるものを持ち行き、村はづれの神社に置き、そこへこちらの要求すべきものを紙切れに書いて、それを一所に置く、然うして置くと翌日になつて完全に貿易の意が達しられてあるといふ風であつた。其時を考へて見ると復讎を恐れる事も一つの理由であつたが、只それのみでなく彼を信ずる心もあつたのである。

原始人の道德に就いてはこれ丈けにして、次ぎには原始人の宗敎に就いて述べやう。

原始人の宗敎　原始民族に於ては旣に客觀的に靈的存在を認めてゐる。而して呪及び魔（マジック　デーモン）の信仰態度に彼等の宗敎が認められるのである。ヴントは原始人の呪及び魔の信仰は未だ宗敎と認めて居らぬ。彼は宗敎を狹義に解して、人類の精神發達の或る段階に於て現はれるものとしてゐる。併し吾人は宗敎を極めて廣義に解する故、原始人の呪及び魔の信仰は旣に立派な宗敎の一段であると見、かゝる信仰が將來發達して佛敎や基督敎の如きものとなると思ふのである。丁度天を磨する大木も其始めは小さな種子の中に胚として存してゐる樣に、大宗敎も其始めは一つのヂャームに過ぎなかつたのである。而して魔と呪は初めて現はれた宗敎の二葉とも見るべきであらう。然らば尙魔と呪の信仰に就いて今少しく詳はしく考へて見やう。

一、魔の信仰、魔の信仰の起原は病死に對する人間の想像にある。特に死に對しては今日文明時代に住する我等と雖も一種異樣の神秘的事實を、そこに認めるのであるから、況して原始人に於ては吾人の想像外であつたに相違ない。原始人が他人の死に遭遇した時、彼等に第一起つて來る衝動は死者をそこにほつて置いて、跳げる事であらう。死者は打ちやつて置いて長い間其場所に人は近づかぬ。其近づかぬのはヴントがいへる如く明かに恐怖の情緒が著しく起つて

ゐるからであらう。其恐怖を喚起するものは、死によりて生ずる急の變化である。いつて見れば、活動が中止するとか、蒼白になるとか、氣息がなくなるとか、斯ういふ事が原始人の感覺を刺戟した時、其所に想像が働き、戰慄したに相違ない。所で、かく死者を恐れて跳走し、且つそれに近づかぬ樣な態度に出ると、想像心は一層著しく働く事となる。而して死人の傍に躊躇してゐると、死者が危害を加へるなど考へ出すのである。

原始人は死といふ事を如何に考へてゐるかといふに、彼等はもと人間に生命を持ち來たしたものが急に人間から分離する事だと考へてゐる。併し乍ら、生命の力は尙其死骸に宿ると考へてゐる。而して彼等は生命を生む所の或るものがあつて、それは身體と獨立のものであるといふ觀念を抱いてゐる。かく考へる所から生命に就いて二つの思想が彼等の胸に浮んで來る。即ち一方に於ては死骸の中に或る不思議な方法(マジナー)で宿つてゐるものとし、他の一方に於ては不可視ではあるけれども何か死骸の置かれてゐる近所を徘徊してゐるものと、此の二つの考へである。此の二つの思想がもとゝなりて、魔の信仰が成立する。魔は人の目には全く不可視であつて、人に乘りうつつて來るもの、人に病氣を與へたり、殺したり、種々危害を加へるものであると考へてゐる。かゝる魔に對する思想があると共に、身體魂(コーポラアベソール)といふ思想がある。身體魂といふのは身體が生命の乘り物(ヒヒクル)であり、身體が存在せる限り生命を庇護せるものとの信仰である。而して此の具體魂が身體を離れると、それが魔となり人に乘り移つて來る。此れは最初の靈魂の形であるが、全く不可視のもので未だ靈魂が影像の如きものであるとか、氣息の如きものであるなどの考へはない。若し然ういふ考へが生ずると、それは原始時代からトーテム時代に移る過度期を告ぐるものと思はれる。マラッカのセマングは靈魂を小さな鳥の如く考へ、人が死すれば其鳥が空中に翱翔すると考へてゐる。此れなどは他の原始民族間に、此れと同樣の思想を見出し得ないから、そは恐らくセマングそのものゝ本來の思想でなく、他の民族の感化によるものであらう。

以上述べし如く魔には死人の魔があるが又病氣の魔もある。此の病魔の起原は病氣からの印象である。特に急に人を襲ふて來る病氣などは斯る印象を深く與へるものである。セマング及びセノイの如きは種々なる病魔を信じてゐる。併し病魔を暗示する最初の對象とも見るべきものは死體である。病死したものゝ死體である。其死體から病魔が出て他の者を襲ひ致命的病氣を起すのであると信ずるのである。マレー半島の土人でシンガレセ民族の中では魔を病兇(シヲクネスマヂック)に對する反對能因(カウンターエゼレフ)と見てゐる。而して魔を普通に想像の動物的怪物の形のものとしてゐるが、此

れは原始人の魔の表象ではない。

二、呪の信仰。呪の信仰は原始民族には廣く行き渡つてゐた信仰である。呪の信仰の主なるものは病氣に關するもので、卽ち病氣を起したり、之れを治したり、魔除けの呪などである。こゝに社會の最初の職業が分化する。呪師巫師魔術者などはそれである。北米インデアンが「醫藥の人(メディシンマン)」といひ、北部アジヤの民族がシャーマンと呼び、又は魔術者と云ふてゐるのは皆それである。「醫藥の人」と云ふが如きは、實に今日の醫師及び祭司の前進である。此の種のものゝ職は反對魔術(カウンターマヂック)を用ゐて、人から病魔を追ひやつて健康の回復をせしめるが、又人に病魔を追ひ込む事もある。故に一方では甚だ恐れられてゐると共に、又一方では人助けの人と云はれるのである。

「醫藥の人」は藥草の最初の研究者で、毒を發見したのも此の種の人である。毒の發見があると毒矢が出來た。「醫藥の人」は又解毒の法をも發見した。而して有毒な植物を食物とする事もある。かく考へると「醫藥の人」によりて原始社會に與へられた貢獻は決して少しではなかつたのである。

病氣に關する呪の外に更らに種々なる呪があつた。矢に鳥の羽根を付けたのも卽ち呪の心か

らであつた。或る者は鳥の羽根を矢に付けると其矢が正しく飛ぶからであると云ふかも知れぬが、この正しく飛ぶと云ふのはレザルタント、エフエクトである。彼等は如何にして斯る結果を見出だしたであらうか。思ふに原始人は矢に鳥の羽を附すれば矢が實際に於て、鳥の性質を受けて迅かに飛ぶやうになるといふ呪的動機から矢に羽根をつけたのであらう(「民族心理」二十九頁)。衣服の起原も矢張り呪に存するのである。前にもいひし如く衣服の最も簡單なるものは木皮の帶であるが、これは結婚の際男が女の腰に卷いて遣り。又時としては互にこれを交換したものである。卽ちかくする事によりて相手を己れに結び置くの意に過ぎないのである。つまりこれは今日でも遺存してゐる結び(コードマヂック)の呪であるのである。原始人のかゝる行動は決して象徴的ではなく其結果が現實であると信じてゐるのである。帶は單なるシンボルではなく、他のすべてのシンボルが始めさうであつた樣に、呪の意であつたのである。

兎に角衣服はかゝる極めて簡單なる木皮の帶、腰紐から發達して遂に前垂になる。さうなると呪の意味は漸次衰へて保護の動機が加はつて來る。これと同時に羞恥の情も生じて來るのである。羞恥心の發生と隱す心との關係については、一般には羞恥心にあるといふ事が出來やうが、然し實際は恐

らくそれと反對であらう。羞かしいから隱したのでなく、隱したから羞恥心が發生したのであらう。これはゼームス・ランゲ說に一致するのである。衣服の起つたのも呪的動機からであつたのである。それが後になるに從つて身體保護の動機、羞恥の動機、裝飾の動機などが加つて、本來の呪の動機が失はれたのである。衣服の外頸輪、腕輪、指輪、頭卷の如き、又は耳輪、鼻輪、唇に貫く棒、櫛などは皆結びの呪の變化したものである。「又名の呪もあつた。吾人は名を以つて實の賓であると考へるのであるが、彼等は名そのものを實と考へたのである。名が變れば實も變る。斯ういふ考へから今日でも結婚又は成人の時に名を取り替へる習慣がある。又原始人の踊の如きものも、矢張り其動機は呪に外ならぬのである。例へばヴェッダ民族が矢の廻りで動物の眞似をしつゝ踊るが如きは、獵獸が矢に當ることの呪であるといはれてゐる。

以上の如く原始人には魔の信仰、呪の信仰が既にあつたのである。この信仰を喚起するに刺戟となつたものは日常普通の事柄ではなく、寧ろ稀有の現象であつた。日常普通の事柄は何等の情的興奮をも起さない。ニュートンが、林檎が木から落つるのを見て引力の法則を考へたが如きは、發達した精神に於ての働きであるが、原始人にはかゝる現象は何等の興味をも起さない。併し稀有な現象に對しては多大の興味を喚起し、注意を拂ふのである。魔の信仰、呪の信

仰はかゝる稀有な現象に對して起るのである。所で是に一つの問題がある。それはヴントによると呪及び魔の信仰の起る源泉は自然現象ではなく、人生の現象（其中でも死と病氣）であるとし、自然現象の如きは神話的表象を促すが大體から何等の役目をも奏しない。併し人生現象特に死と病氣とは最初から人心を感動することが甚大であるとしてゐる。果して自然現象は呪や魔の信仰に何等の役目をも奏しなかつたであらうか。吾人は矢張り然りと答へておいて差支へないと思ふのである。宗教の起原を心理的に最も單純なる形式として佛のレヴィーユ、獨のプライデレル等はナチュリズムを主張した。ナチュリズムは人類が客觀的の或る現象をそのまゝ崇拜するの意で、現象と本體とを區別し、又物質と勢力とを區別して抽象的のものを崇拜する事ではない。最も原始時代に於ては未だ自己の身體と靈魂とは區別せられてない。而して人間觀も萬有觀も未だ區別が明かではない。內外兩界は渾一の狀態にある。そは恰かも小兒が自己と外界との區別を感じないと同樣である。而して當時人類が區別し得たものは動と不動との區別である。而して自然界に於ける動くものは、凡て人間と同樣に感じ、從つて雲であらうと日月星辰であらうと、將た水であらうと、草木であらうと、動物であらうと、總べて人間の如きものと思惟したのである。かゝる時代に若し宗教ありとせば即ちナチュリズムに外ならぬ

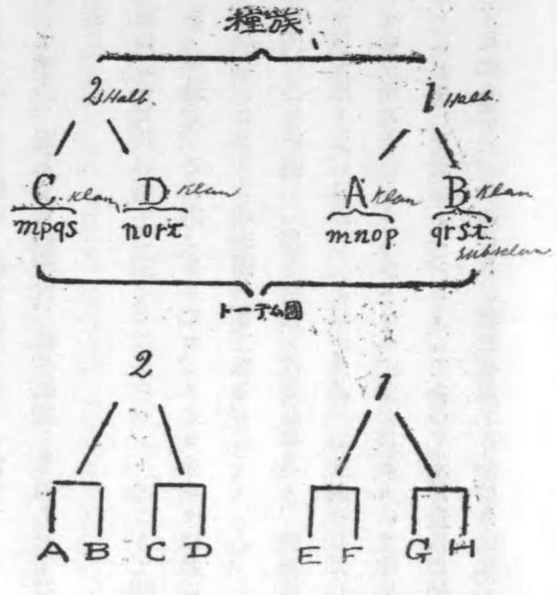
といふのが從來宗教學者のいふ所である。併しこれは何等の證據があるのではなく學者のスペキユレーションの結果一つの假定をなしたに過ぎないのである。學者は宗教の起原として最も單純なるものを見出さんとして、遂にナチユリズムに歸着したのである。併し其名稱には未だ考ふべき餘地があると思ふ。併しこれに就いては玆にいふ事を略す。所でナチユリズムの主張者も現象と本體、物體と勢力との區別をなすは先づ己れに心身の區別を知覺し得て、而して後に始めて之を知り得べきものであるといふ事は認めるのである。然らば精神現象の極めて低級なる原始民族に於ては、未だ自然現象が直接宗教的刺戟となるとはいへぬ。寧ろ人生の現象、特に死とか病氣の如きものが特別なる注意を引く樣になり、身體と靈魂との區別がせられて後、自然物又は自然現象に對する崇拜心なども生ずるものと見るべきであらう。コーは曰く「ゼントに據ると正しき神觀念は二つの先入觀念即ち魔と英雄とが混合して起つたのである。併し自然の諸勢力も亦全體の發達の内に一部分を占めた。豐饒なる地、豐かに結實せしめる雨、四季の進行、太陽及び日、海洋、山々など、斯る要素は皆一般に初代神觀念の中に現はれるといふてゐる(宗教心理學九十七頁)。

三、トーテミズム的時代

トーテミズム的時代の意義及び特徴　トテミズム的時代といふのは、トーテムなる語の範圍を擴げ、一切の社會現象に關連し、トーテムを以つてこの時代(原始時代に繼ぐ時代)の特徴と見る所から、かくは名付けるのである。一體トーテムてふ語は北米インデアンの一つであるチッペワ土人の語から來てゐる。この語は最初一部落を摘指するの名稱であつた。種族の内には數箇の部族がある。一部族には又數箇のトーテムがある。そのトーテム部落は普通動物の名を有してゐる。それで各部族はそれ〳〵動物又は植物の名稱を有してゐる。併し多くは植物ではなく動物の名である。或る部族は鷹、或る部族は狼、或る部族はカンガルーと稱せられてゐる。所がこのトーテムは部落の名稱であるが、其名稱は祖先をも現はしてゐる。鷹部族は其共同祖先の鷹の子孫であるといふ所から、凡ての鷹と血族的の關係を有して居るとせられ、其部族の神話の如きは皆共同祖先の鷹を中心にして出來てゐる。こゝに鷹といふのは單に名稱に止まらず、現存の動物をも意味す。夫れ故凡ての鷹に鷹部族のものは、血族的關係を有するものと信じてゐる。而して鷹部族を決して殺さないのみならず、それに對して畏れの心を抱いてゐ

る。よしそのトーテムが食物とするによいものであつても、何か非常の事か又は部族の儀式的饗宴でもある場合でないと食せない。この場合食するといふ事は、普通にいふ食するのとは事變り、それによりて鷹なら鷹の種族の力とか、勇氣などを、それを食する事によりて自己に吸收する事が出來ると信じ、さらにさうする事によりて、トーテムと交通一致する事が出來ると信じてゐる。それ故その饗宴は一種のサクラメントであるといふてよい。このトーテムに基づく信仰が即ちトーテミズムといふのである。

この時代に於てはトーテムが社會的一致をもたらす故、社會組織が原始時代よりも餘程發達してゐる。種族の編成がある。前に述べし如く原始時代に於ては、社會組織は無秩序なる人群の狀態であつたが、この時代になると、其の人群が規則正しく區分せられ、漸やく種族の形をなすに至る。その規則正しくといふのは即ち二分法で、始め種族が二分し、さらにその兩部が二分し、さらにその各部が二分する。而してその各部族は皆數個のトーテムを有してゐる。而して最初別れたものはこれを半分（ハルフ）といひ、次ぎに別れたものを氏族（クラン）と稱し、その次ぎに別れたものを小氏族（サブクラン）と呼んでゐる。此れを圖に表はせば即ち次ぎの如くである。



「かくの如く種族編成があると共に異族結婚（exogamy）なるものも生じた。而して結婚と關係した死、誕生及び成人式に關する風俗にも種族編成が大に影響を及ぼした。トーテム動物によりて得た魔術的意味の結果として、トーテム崇拜に關する特別なる崇拜團體が發生した。且つ個人のトーテム男女のトーテムも生じた。この外種族組織の結果として酋長制が起る。

この酋長制がやがて政治組織を發展せしめるのである。酋長制となりて種族の組織が鞏固になれば、土地の所有觀念なども發達するにより、種族間の戰爭も生じて來る。種族及び氏族の所領が確定すると、次ぎに個人の所有觀念も生じて來る。商賣も種族の交通の結果其範圍を擴張し、從つて衣服器具等の外部文明も

益々發達する。而して耕作する事も生じ、家畜の飼養も發生する、かく動物を人間が使役する頃となればトーテム崇拜は次第に失はれるのである。

かくの如くトーテミズム的時代になると、原始時代とは文化の程度は全く異なつて來る。而して最も注意すべき點は、社會組織の發達であつて、この社會組織の發達と共に種々なる文明が生じて來る。而してこの時代、社會組織をなさしめるに中心觀念となつてゐるものはトーテムである。

尙茲にこの時代に屬する主なる民族をヴントによりて列擧せんに、オーストラリヤ、マレーポリネシヤ地方（この內メラネシヤ、ミクロネシヤは共にトーテミズムの著しき所）及びアフリカの一部、アメリカの未開人等である。

此の時代の外部文明　原始時代とは大に異なり、種族間の交通が漸やく開けた爲め、種族相互の文明が取りかはされる。それが爲め外部文明は甚だしく混雜になつてゐる。併しオーストラリヤの文明などはどちらかといへば未だ原始人の文明に近い方である。彼等は採集者（ガザラー）にして、又獵者（ハンター）であつて未だ農作の知識を有せず、況して家畜を飼養する事などは知らない。犬の如きは獵に使用するが如きは殆んどない。專ら人の仲間の如く見なさ

れてゐる。彼等の中には、女は掘棒を以つて木根や球根を採りに出る、男は獵に行く。而して彼等は食量を貯蓄する事を知らない。食物は熱い灰の中に入れるか、熱い石の間に入れて調理する。この外に料理をする事はまだ習慣的になつてゐない。火は原始人と同樣に摩擦と錐揉法とで得られてある。併し武器の如きは既に一段の發達を遂げてゐる。これオーストラリヤ文明がトーテミズム時代の始まりを告ぐる所以である。原始時代に於ては武器は弓と矢とであつたが、これらは種族戰には用立たぬ。オーストラリヤの武器は木で作つた投棒と投箭である。投棒は單に木を曲げたのもあり、ブーメロングの形に曲げたのもある。その曲げ方は再び手もとに歸つて來る樣になつてゐる。投箭は手で直接投げるのでなく溝をつけた板があつて、それから投げ出す樣になつてゐる。箭の尖頭はその溝から出てゐる。箭の根の所に穴があつて、それに掛釘が嵌めてある。それは發射の目的を確實にする爲めで、我々の鐵砲に類する所が現はれてゐる。此等投槍投箭の外武器として長い鎗もあり、棍棒及び楯の如きものもあつた。

トーテミズム時代の第二段の文明はマレーポリネシヤ文明に見る事が出來る。こゝで最も低い文明を有するものはバブーア族である。バブーア族の外部文明は原始民族と大差はない。併し注意すべきは掘棒が鍬に發達した事である。鍬の最初の形は尖端が鋭角の形に曲がりて柄が

付いてゐる。それ故種をまく溝をほる事位が出來るのみである。併し掘棒が鍬に變つた事は大なる文明である。この時には溝をつくるのが男で、後から女が種を蒔いて通るのである。パプーア族よりも一層進んだものはミクロネシヤ族である。さらに一歩を進めたものはポリネシヤ文明である。このポリネシヤ文明に於ては天上神話が現はれ、他に比類なき程大に發達をなした。而してこれが地上のものゝ解釋に大なる影響を及ぼした。又これまでの種類の區分は破られた。前の種族組織は植民の爲め破られ、而して酋長が現はれ、政治の新形式が現はれた。この地方には動物少なくして植物多き爲め、動物祖先又はトーテムの表象は消失した。併しトーテムの遺物であるタブーは又非常に發達を遂げた。タブーの最初の形式にはトーテム動物の肉を食ふ事の禁戒があつたが、こゝにはそれがなくなつてゐる。併し其範圍は甚だ廣くなり聖所に對するもの、種々なるもの及び名に對するもの、人及び個人の材産に對するもの、特に酋長とか祭司に對するものなどがある。武器とか裝飾の類も著しく進歩してゐる。特に身體裝飾の如きは最も巧妙なるもので入墨が大に發達した。かゝる身體裝飾の起原は矢張り呪的信仰である。今日我國でも文身を呪的の意味で施してゐるものは多くある。アイヌでは左右の拇指と人差指との間に×の形を、左肩に⊠の形を文身し弓が巧になる呪にしてゐる。日蓮宗の熱心家に

首に珠數を掛け背に南無妙法蓮華經と現はし、その左右に日蓮の紋所を文身してゐるものがあつたさうである。或は神社佛閣の守札呪符を文身したり、窃盗を働く者が蠟燭や蝙蝠を文身したり、又は巡査の提灯を文身したり、桃太郎の如く偉くなりたいといふので桃の文身をしたりするのは皆呪的の信仰である。ポリネシヤの土人は又木に彫刻した偶像や想像的形の假面もつてゐる。彼等は弓及び槍の外に又ナイフや刀を有してゐる。長い楯の外に小さな圓形の楯も有してゐる。

次ぎにこの時代の第三階段にあるアメリカ及びアフリカの文明に就いて見んに、何れの點に於ても文明の程度はこれまでのとは餘程發達を遂げてゐる。武器は益々發達し、身體裝飾は美はしき衣服裝飾に代へられてゐる。耕作も多くは鍬を以つて耕やす方法で原始的のものであるが、已に氏族の共同的勞働の單緒が開かれてゐる。之れより大なる植物豐作の儀式が發生した。而して農業に關する神話儀式が發展し、それが天上神話と結合してゐる。トーテムは已にオーストラリヤ土人の如く祖先と考へず、單に兄弟の如く考へられ、人と動物とは同等の地上にある樣になつた。トーテムの儀式も單に動物を殺すことの謝罪の意味となり、且つ神話にも人間が動物になつたとか、動物が人間に化けたとかいふ樣な事が多く見へてゐる。これと相伴

つて外部文明が餘程進んでゐる。武器の如き又衣服の如きは殆んど完全に近きまでに發達した。又社會組織の如きも鞏固になり、古代文化の範圍を脱して高い發達の域に達してゐる。種族は永久的の會長を撰び、戰時に於て他種族と同盟する等の事もある。かくして種族組織は次第に國家組織に途を開いた。

アフリカの文明は諸種族との混合によりて複雜を極めてゐる。南方では鍬を以つて耕作をし、所謂鍬文明であるが、北方サハラの沙漠以北に於てはセム及びハム民族からの輸入があつた爲め犂を用ゐる農業即ち犂文明が始まつた。牧畜の業も盛んに行はれてゐる。かくして動物は單に乳を採るのみではなく人間で出來得ぬ樣な困難な仕事をなす樣になり、遂には人の食料に供せらるゝ樣になつてゐる。又戰爭及び移住の結果としてアフリカの如く專制政治の中心となつた處は他にない。これに關連して個人的所有の觀念が著しく發達し、從つて奴隷賣買、一夫多妻などが起つてゐる。トーテム崇拜は滅亡したが精靈崇拜（アニミズム）呪物崇拜（フェチミズム）が大に發達してゐる。前者は其の起原に於てトーテム崇拜と直接關連してゐるが後者は退化したトーテミズムの一種である。

トーテムの種類及び發達　トーテムの種類は種族トーテム、個人トーテム、姙娠トーテム及

び性トーテムの四種である。種族トーテムとはオーストラリヤ、及びアメリカに於ける如く、氏族中の團體又は氏族そのものが或る特別なる動物又は植物の名を有して、それによりてトーテム的意義を表はしてゐるのを見て知られる。個人トーテムは一個人のトーテムで個人を保護するものである。個人トーテムの定まるのは夢であつて個人が夢で見たものが其ものゝトーテムとなるのである。次ぎに姙娠トーテムは特に姙娠時に關するものをいふ。即ち祖先の靈、若しくは種子（ヂャーム）が母の胎内に宿るから姙娠が起り、その生れた子は其宿つた祖先をトーテムとす。子種子は父の行爲とは全く獨立的に母胎に送られるもので、父の關係する事は二次的で本質的ではないと考へられてゐる。次ぎに性のトーテムであるが、つまり男のトーテム女のトーテムが別々にあるといふのである。南部オーストラリヤのクルナイ族の中には、種族トーテムは見られぬが、性のトーテムはあるといふ事である。女のトーテムは普通蝙蝠で男のは梟である。

では如何なるものがトーテムになるかといふに、それには動物、植物、及び無生物との三種である。併し多くは動物である。動物トーテムには、蛇、蜥蜴、鼠、鰐、鳥、蝙蝠、カンガルー、袋鼠、狼、熊、水牛、鱶其他魚などもある。無生物トーテムは、太古の祖先が殘して置いた呪的の力を有するもので、特に呪石、呪棒などある。オーストラリヤに於て想像的の祖先を

ムラ〳〵又はアルチエリンガと呼び、其祖先の靈力が石や棒の中に宿つてゐると信ずるのである。

然らばトーテミズムの發達する順序は如何といふに、最初種族トーテムがあつて次ぎに個人トーテムが生じた。姙娠トーテムは個人トーテムと種族トーテムとの中間の形とも見るべきで性のトーテムよりも原始的である。性のトーテムは全然個人トーテムの一種である。之等の發達の順序に就いては異說は多くある事であるが茲には餘り必要を認めないから凡て略す、前に述べし如くトーテムとなつてゐるものには動物植物無生物があるが、この內原始的なものはいふまでもなく動物である。植物トーテムは植物に富んで動物に乏しい地方、例へばメラネシヤ地方に發生したが、それがオーストラリヤの地に至り茲に混合して動物植物何れもトーテムとなつてゐる。無生物トーテムはそれ自身呪力を有するのでなく、呪的の祖先の力が宿つてゐるのである。殊に此際形の著しいものが選ばれるのは、それに對する驚異の情が呪的の力を其對象自身に投げ入れて想像せしめるのである。而してこの無生物トーテムに於て吾人は所謂呪物に移る端緒を見るのである。のみならずトーテムが祖先崇拜に移り變る所も茲に認める事が出來るのである。

トーテムの觀念の起原　トーテム觀念の起原に就いては以前から種々なる說がある。スペンサー及びラボックは渾名說を立てゝゐる。トーテムは最初渾名であつたものが、後に實際の祖先と信じられるに至つたといふのである。ラングも渾名說ではないが矢張り名がさきでトーテムの信仰の意味が加つたとしてゐる。併し原始人に其名を自己の一部と見てゐる所から考へてこの說は信ずる事は出來ぬ。ホヴイット、スペンサー及びギルレン等は狩獵生活の狀態がトーテム信仰に反響してゐるものとし、野外の動物が最初トーテム動物であつた。それ故植物的食物が多く得られる時には植物がトーテムとして加へられたといふのである。併しこれは主としてオーストラリヤ土人がトーテム增殖を謀る目的でなすインティチユマの儀式を根據としたのである。併しこの儀式は濠洲の土產ではなく植物トーテムと共に外からの輸入である。植物トーテムはメラネシヤに主として發生したのである。それ故この儀式を取つて直ちにトーテムの起原を論ずる事は出來ぬ。さらにフレーザーは又異なる一說をなした。彼はトーテミズムの凡ての形を姙娠トーテミズムに歸した。姙娠トーテムは彼によると母が產前に夢に見たものがトーテムとなるので、若し夢の中に動物があるなら、それが子供のトーテムで、卽ち子供の守護動物になるといふのである。併し姙娠トーテムは例外の現象で一般ではない。而して吾人はト

ーテミズムを凡て夢に起原するとは考へられぬ。所でヴントによればトーテムの起原は靈魂動物である。即ち祖先の靈が乘り移つた動物である。トーテムは初め恐らく常に動物であつた。吾人が世界に廣く存在せるアニミスチックの概名を取つて考へても、動物が死後の人靈の容器となり得るものゝ如く見られてゐる事が解る。併し動物は何でもといふわけではなく、其中には自から等差がある。空中をかすめて迅速に飛翻するが如きもの、或は驚異の念を喚び起すものや、何となくうすきみの惡い恐ろしいものなどの形は特にトーテムになる。それでオーストラリヤでは鷹、烏、蜥蜴。アメリカでは鷲、隼、蛇の如きものがトーテムになつてゐる。

かく考へるとトーテム時代は靈魂概念の歴史に於て大切なる一轉時機である。原始人は前にいひし如く身體魂といふが如きものを認めてゐた。即ち死すれば靈魂は死體に留まると信じてゐた故、死骸から逃げたのである。勿論其時でも靈魂は身體の外でも魔の如き形で活動するものと思はれてゐた。併し此等の思想は未だ全く定つてゐなかつたのである。所が種族の移住と種族と種族との間の戰爭との結果として文明は一歩を進めた。彼等は戰場で人が急に倒れるのを見た。この樣を見て彼等は尙靈が死後身體に宿つてゐる事を信じてゐたが、さらに他の二つの誤つた思想を生み出した。即ちその一つは靈は血と共に身體を離れる。而して血は靈の宿る

處であるといふ思想である。こゝから血の呪が生ずる。他の一つは殺された時、身體の內部のものが外に露出したのを見て、それが矢張り靈魂の宿るものと思ふた。靈魂が急に身體を離れるとの思想は、殺された人から一般に死に際せる人に移されて考へられ、最後の氣息と共に靈魂は出るといふ思想を生み出す。それ故靈魂は一種動いてゐるものと考へられ、遂に鳥とか蛇とか蜥蜴の如き動物の如きものとしたのである。かくして靈魂動物なるものが生起し、この靈魂動物から漸次他の有用動物にトーテムの觀念が轉じ、さらに植物の食料が興味を惹くに至り、食用の植物に及び、植物は人間との區別が甚だしいことから動物トーテムに存した觀念が衰へ呪術を以つて增殖する儀式を發達せしめる。さらに植物からトーテム觀念が無生物に移つたのである。

靈魂信仰　靈魂觀念はトーテム崇拜を構成したのである。それで靈魂信仰はトーテム時代の前からあつたのであるが、トーテム時代に於て、そは一般の發達をなしたのである。而してこの靈魂觀念が凡ての宗教及び神話に於ける不滅の要素を構成したのである。

(1)身體魂と遊離魂　原始時代に於ては靈魂は全身に宿るとの觀念と、死後は不可視の魔として其死體の附近に彷徨するものと考へがあつた。所がトーテム時代に於てこの思想は大に發達し

全身に靈魂が宿ると考へるのみならず、身體の諸部分に靈魂が宿るといふ思想が表はれた。前にもいひし如く血液に靈魂が宿るといふ考へも生じた。又腎臓、男根、分泌物、排泄物、毛、爪等にも亦靈魂が宿るといふ考へも生じたのである。かくの如く身體魂の發達と共に又遊離魂も大いに發達した。遊離魂とは身體を離れて自由獨立の存在をなす靈魂の觀念である。而して氣息魂、影像魂などはこの遊離魂の分化である。

(2)血液魂　甲乙二人が兄弟の緣を結ぶ時身體を傷けて血を出して之れを啜り合ふとか、又は傷口に附け合ふ風俗があるが、これは實際に於て精神の交換又は結合を意味す、又敵の勇氣體力を得んが爲め敵を殺して其血を飲むが如き、アメリカのカリッブ族が其長子に父の血を灌ぎかけるが如き、又イスラエル民族が其犧牲の血を祭壇に灌ぐが如きは皆血液魂の觀念から起つてゐるものである。然らばこの觀念の起原は如何といふに、それに就いては前にもいひし如く戰爭の時この觀念を起すべき機會があつたのであらう。

(3)腎臓及び男根の靈魂　未開時代に於ては腎臓を生殖器の內部の器具と考へた。而かもそれを生殖作用の中央器官と考へた。それ故多くの言語に於て Kidneys と testicles は同一の語にて示されてある。聖書に腎臓に心臓と共に靈魂の宿る所と見られてゐる記事がある。(利十五〇二、

九〇十)ヨブは其苦痛の餘り「神は腎臓を二つに切り開き給ふ」(ヨブ十六〇十三)といふてゐるが、これなどにも腎臓魂の思想が含まれてゐる。犧牲に關する律法に腎臓と其附近の脂肪は燔祭とすべきものといふてあるのは矢張りこのわけである。オーストラリヤ土人が乾いた腎臓の一片を帶びてお守りとしてゐるのは又腎臓魂の信仰である。この生殖の內部器關と見た腎臓魂の思想は外部に移つた男根魂の思想を生み出したのである。即ち靈魂が男根に宿るとの信仰である。さらに後になると男根が靈魂の住所であるとの考へが消えて單に咒力を有するものと信ぜらるゝに至つた。咒物としての男根崇拜は我國にも多くある。

(4)分泌物排泄物毛爪等に於ける靈魂、南洋ニユ、ギニに居るバブーアでは兒童が成人した時の式に於て其青年は酋長の尿を飲み、又は之を灌きかけられる。これは卽ち酋長の尿に其靈魂が宿り居るとの信仰から、かくすることによりて酋長の靈魂が青年に移ると信じたに外ならぬ。又唾液にも靈魂が宿り居ると信ぜし故同盟の際に唾液を混合する風俗がアフリカにある。この外爪及び毛などにも靈魂が宿るものと信じられてゐた。

(5)氣息魂及び影像魂　氣息魂といふのは人が死ぎわの最後の氣息に靈魂が宿るといふ信仰で、影像魂といふのは覺醒時又は夢中に影の如き形體にて現はれる靈魂をいふのである。氣息魂の

信仰から又種々なる風俗が現はれる。

例へば死ぬる人の口の上に子供を保ち、又は家族の者が死ぬる人の上に蹲み其最後の氣息を吸ひ込まんとするが如きは卽ち死ぬる人の靈魂を氣息と共に受けんとする企てに外ならぬ、次きに影像魂であるが、未開人は夢幻に見たものと覺醒時に見たものと何れも現實と考へた。それで夢に死人に會ひなどすると死人の靈が來たと考へるのである。未開人は一方に於て極めて非衞生的で餓えた時に暴飲暴食をする其結果彼等の夢は所謂惡夢が多く、恐ろしい者を見たのであらう。所謂幽靈などはこれから發達したものである。

葬式の風俗　以上の如く靈魂に對する觀念が發達すると共に種々なる風俗が現はれる。今玆に一言して置き度と思ふ事は葬式の風俗である。原始人は死體を放置して逃走したがこの時代には埋葬式の如きものが現はれてゐる。オーストラリヤ等では地上に土の臺を設け其上に死體を置く風がある。これより又二つの靈魂觀念が見出される。其一つは死體をかくして置けば終には死體から蛆虫が出る。其虫を靈魂の乘り移つてゐるものと考へる事、今一つは死體から出る液が矢張り靈魂を宿してゐると信じ其液を飲んで其者の靈魂を得んとする風俗である。死體を地下に埋める風俗も今いひし如き地上埋葬に次いで起つた、地下に埋めるのは衞生思想が然

らしめたといふものがあるが、サントは死者の魔に對して恐れたからである。即ち地下に葬むりて死者の靈の危害を免かれんとしたに外ならぬといふのである。其證據として死者の手足を縛りて葬むるとか葬つた上に石を置くなど又は葬つた上を踏み堅める等は皆それである。今日でも多くあるが蹲踞した姿勢で葬むるは手足を始め縛つてゐたのが、恐怖の動機が失はれると共にその風俗だけ存したのである。今日は二十四時間の後でなくば葬られぬ事となつてゐるが、未開人はなるべく早く葬らねばならぬと考へた。これも矢張り恐怖からである。又死者と共に器具食料婦女等を副葬したのも亦同樣の動機からである。かゝる死體に對する恐怖が消失すると共に又種々なる風俗が起る。アメリカンインヂヤンが墓上に小穴を穿つてゐるのは靈の出入途に當てられたわけである。火葬は土葬に繼いで起つた風俗であるがこの時代には未だ起つて居らぬ。

アニミズム・フエチシズム及び祖先崇拜　トーテミズムの根柢にはアニミズムとフエチシズムと祖先崇拜の三つがある。アニミズムは靈魂崇拜の諸形式の總稱である。トーテム崇拜は靈魂信仰と直接關係を有してゐる。卽ちいひ換へるならアニミズムと直接關係を有してゐるのである、アニミズムとはシュタールといふ人が始めて用ゐた言葉で其後タイローがこれを用ふる

に至りて遂に人口に膾炙する樣になつたのである。タイロー、スペンサー、及びリッベルトの如きはこれを以つて凡ての神話及び宗教のよつて起原する所としたのである。併しヴントは、それに全然反對はせぬが偏頗であると批難してゐる。而して靈魂崇拜は凡ての宗教及び神話に於て重要なる要素を構成する事だけは認めてゐる。

次ぎにフエチシズム（呪物崇拜）は無生物に於ける魔力の信仰を意味する。一體フエチシズムとはポルトガル語の Fritiço, feitição＝magic より來てゐる。而して英語のフエテイシもポルトガル語のフエチコもラテン語のファクチチウスと同一語原より出でゝ呪符の意である。フエチシズムの原始的のものはオーストラリヤ人の所謂チユリンガス卽ち魔力を有する木石の如きもので、祖先の呪力が其物に移りて居り食物として人を益する動植物を增し、不幸を避け、特に病氣を平癒する力を有するものと信ぜられてあつた。今一歩を進めた呪物崇拜はアフリカのスーダン黑人の中にある。こゝには木製の人工的の呪物がある。人が顏を歪めた樣な形の像があつて、それに呪力がある樣に信じられてゐる。信じ方はオーストラリヤ土人がチユーリンガスに對するものと同じであるが、チユーリンガスは異樣の觀ある自然物であるがアフリカのスーダン黑人のは人工的である。彼等には又個人の呪物があり社會的の呪物がある。個人の呪物

には病氣平癒、事業、成功怨敵退散の功驗ありとして之れに祈る。社會的呪物としては戰爭又は饑饉の時に祈を捧げる。この時色着けた木偶が持ち出されその前で音樂を奏し踊をなし、又會長は司祭の資格にて其木偶に新しき釘を打ち込むなどの儀式をすることがある。

呪物には始め單に奇形の木石があつたが其後種々なるものが呪物とせられる樣になつた。前にもいひし如くオーストラリヤ土人が腎臟の乾いたものをお守りとしてゐるが如きは腎臟に呪力が宿つてゐると考へたからである。髮なども矢張り呪物とせられた。サムソンに就いての聖書物語はその邊の消息を示すものであらう。此等は皆始め靈の宿るものと信ぜられたもので、それが後に呪物となつたのである。呪物とは呪の目的を達する手段に外ならぬ。故に呪物崇拜は靈魂信仰が呪的信仰に移つた事を示すのである。而してこの呪的崇拜には未だ敬虔とか感謝などの表現は認められぬ。アフリカのスーダン黑人の呪的儀式に於て明かにそれを認める事が出來る。

呪物から神像の如きものが現はれる。呪物には未だ人格が現はれてないが神像には既に人格が明かになつてゐる。低級な呪物崇拜は單に魔力が無生物に宿つてゐるとの信仰であつたが、之れが段々進むと神の像を禮拜儀式の對象とする樣になるのである。故に呪物はトーテム時代

に於ては後に生ずる神像の前兆であつたのである。後には神像が神それ自身である如く考へたのであるが始めは單に呪力の宿つてゐるものとの意に過ぎなかつた。そこで一方に呪物が宗教的に進歩する經路も認める事が出來るが又今日から考へて宗教が呪物崇拜に退化する方面のある事も認められるのである。佛教信者が種々なる偶像を呪的に信じてゐるのも、又キリスト教で天主教などの信者が聖母の像、聖徒の像などを呪物として用ゐてゐるが如きはそれである。かく退化した呪物があるがマックスミユラーの如きはこの退化せる呪物より出發して凡ての呪物を說明せんとしたのである。併し呪物は宗教的に進化して來る方面をも認めなければならぬ。而して呪物觀念はトーテム時代に根ざしてゐる事を認めねばならぬ。

次ぎに祖先崇拜であるが、スペンサーやリッペルトの如きは祖先崇拜を以つて宗教の起原と見たが、原始人は死者に對して始め恐怖したが崇拜はしなかつた。況や祖先崇拜などはあらうはづがない。のみならず最初は動物祖先の觀念であつて、それが後に至りて人的祖先の觀念に變化したのである故祖先崇拜を以つて宗教の起原を論ずる事は出來ないのである。

お守り（アミユーレツト）と魔除（グリズマン）　お守りと魔除は呪物的觀念の產物である。而かも呪物とお守り及び魔除は全く同じものではない。呪物は之れに魔が宿り呪的の働きをなす主體で獨立した魔力を有す

るものである。故に其意志によりて或は加護を垂れ或は罰を降すものである故崇拜が之れに伴ふのであるがお守り又は魔除けは單に呪の道具に過ぎないから崇拜は伴はない。所でお守りと魔除とは又相互に相異つたものである。お守りは守護の力を有し魔除けは種々呪物の結果を生ぜしめる力を有してゐる。即ち前者は受動的で、後者は能動物である。夫れ故前者は外部からよく見へるやうに携帶せられ、後者は秘密に帶びられ、又は普通の形をしてゐるから一見呪的の道具であるとは思はれぬ樣にされてある。お伽噺などの中に魔法技の話があるが魔除といふのはそんなものである。古代の傳說の中には多くこの種のものがある。指輪の如きものも一種の魔除に用ゐられる事がある。中世記に「哲學者の石」といふ迷信があつて、これをさへ携へて居れば何でも知る事が出來るといふたが「哲學者の石」とは即ち一つの魔除であつたのである。お守りには頸輪の如きものがあるが、これは原始時代に既に存在してゐた。オーストラリヤ土人が腎臟の乾いたものを腰に吊ら下げてゐるのもお守りである。この外死人の髮、齒、爪などをお守りとする事もある。又古代エジプト人が死體の胸の上に一種の甲蟲を置いたのも、其甲蟲（スクラブ）が心臟に似てゐる所から、これが靈魂の宿つてゐるものと考へ危害を保護するお守りとしたに外ならぬ。

タブー　タブーといふ語は元來ポリネシヤ語で此れは禁戒又禁制など和譯されてゐる。又時には禁厭とも譯されてゐる。即ち一定の事物は避くべく、觸れるべからずといふ意味である。タブーはトーテミズムと共に始まつたもので、タブーの最始のものはトーテム動物であつた。かくタブーはトーテミズムと共に始まつたのであるが、其生命はトーテミズムよりも長いのである。ポリネシヤの如き地に於てはトーテミズムは衰退したがタブーは仲々盛んである。こゝでは貴族祭司酋長などは凡てタブーであるとせられてある。何故にかゝるタブーが起つたかといふに或るものは即ち貴族祭司酋長の所有を保護する爲めだといふ。即ちタブーを以つて其れ等の人の所有を保護する制度であるとするのであるが、併し之は寧ろ結果で原因は勿論そうではなくトーテム動物から起つたのである。夫れ故感情の方からいへば、最初は單純なる恐怖であつて、此の單純な恐怖から畏敬及び忌避の感情も次第に現はれたのである。

タブーには種々あるが、最も注意すべきは姻戚のタブー、食物のタブーである。姻戚のタブーの内でも義理の兩親、殊に母に對するタブーが最も早く且つ最も廣く行はれてゐる。而して義理の母に對しては途で出逢ふことさへ成るべく避けなければならぬ。又此等の間柄ではタブーである以上は勿論結婚は出來ぬ。此れは固より結婚制度として考案されたものではない。異

族結婚では元來血族の兩親殊に母との結婚は禁じられるのであるが、此の禁示の關係が聯合によつて實の父母より姻戚上の父母に移つて、それがタブーとなつたのである。次ぎに食物タブーであるが、食物のタブーの多くは動物である。併し稀には植物である。例へばギリシヤのオルフイアンス教徒及ピタゴラス派のものが豆を食する事を禁じたのは植物タブーの一例である。此の植物タブーは動物タブーに次いで起つたものである。動物タブーは、例へばイスラエル人が一定の動物の肉は食ふべからずとして禁止してゐた所に見る事が出來る。併しイスラエルに於ける、かゝるタブーは其肉が不淨なるが故に食すべからずといふたのであるが、食物としての動物タブーの最初の形は主として靈魂動物及トーテム動物から來てゐる。此等の動物はトーテミズム時代にあつては恐るべきものであつた。オーストラリヤ土人は其トーテム動物の肉を食するといへば畏縮するが、そは其動物が不淨であるといふのではなく、其トーテム動物に宿つてゐる處の魔の復讐を恐れるからである。所がプリースト、コード（祭司法典）に於ては此の神聖なものが全く不淨なものと變つてゐる。併しイスラエルに於ても始めはそれらの動物が不淨のものとせられてゐたのではない。例へば猪（スワイン）山鼠（コニー）兎（ヘヤー）など皆汚れたるものとして其肉は食ふべからず、其死體には觸るべからずとしてあるが、始めは汚れたものとせられず、神聖

なるものとせられてあつたのである。或る人のいふ所によれば猪及兎の如きは生産力が甚だ強いが爲め、遂にそれが崇拜せられ、神聖なるものと見られてゐたが、併しイスラエル人の間より自然崇拜が遠ざかるに至り、此等のものはタブーとして本來の意義を失ひ、汚れたるものと見られるに至つたのである。」といふのである。猪及兎が生産力强きが爲めに、それが神聖視されたかどうか今直ちに斷ずる事は出來ぬが、此等の動物が最初から汚れたものと見られてなかつたといふ事は明らかであらう。「ザントがいへる如く始め畏怖されてゐたものが遂に嫌惡せられる樣になつたといふ事は明かである。

拂淨の觀念　さてかくの如く淨不淨の觀念が生ずると共に拂淨（ピュリフィケーション）の觀念を生じ、又拂淨の儀式も起るのである。併し此拂淨及拂淨の儀式の起原ども見るべきものは淨不淨の觀念の生ぜない前に既に呪としてあつたものである。即ちタブーのものを食し、又それに觸れた時それより來る災難を免かれる爲め、災難除けの呪があつた。此の呪こそ拂淨の原始的のものである。それ故拂淨の式は始めはシンボルではなく、全く現實であつたのである。所が後にはそれが全くシンボリック（象徴的）になつたのである。

拂淨の方法としては火水の使用、及呪的轉移（マヂカルトランスフエレンス）の三つがある。此の内で火は最も原始的で

ある。オーストラリヤでは特に火が不淨拂ひに多く用ゐられてゐる。アメリカでも火は甚だ重要なもので、特にアメリカインデヤンのプエブロ族では火を最重要視してゐる。彼等は大火を燃きて其周圍を踊り廻るのである。オーストラリヤの成年式では、青年は火に接近し、火熱に堪へねばならぬ。又火を飛び越へるのである。併し此れは青年の勇氣を試すといふのでなく、然らする事によりて青年が火によりて淨められるといふ所からである。今日でも歐洲の多くの土地に殘つてゐる風俗であるが聖ヨハネの火といふのがある。南部獨逸では、それをソルスタイス、ファイヤーと呼んでゐる。即ちヨハネ誕生の祝日の前晩に大きな火を燃き、其上を若い男や女が飛び越へ、其時に願つたことは何でも叶ふと信じられてゐる。此れも矢張り拂淨の遺風である。其他かゝる遺風は多くある。

次ぎに水の拂淨であるが。水は早くよりタブーを犯して不淨になつたものを拂淨する力を有するものと信じられてゐた。それ故水浴、洗滌、灌水の如きは何れも不淨拂を意味してゐる。而して拂淨には現在の魔的穢を除かんとするのを、將來のそれを防ぐものと此の兩動機が早くより結合してゐる。キリスト教の洗禮及グリークカソリック教會のヨルダン祭の如きは皆水の不淨拂である。ヨルダン祭にては普通の水が祭司の魔術でヨルダン河の水に變ると信じられ、

その水を灌ぎかけられるなら信者は將來罪を犯さなくなるといふ。然らば此の内には將來に對する不淨の豫防である。洗禮式の如きは今日多くシンボリックに考へられてゐるが、元來はシンボリックでなく實際にそれによりて不淨又は罪が拂はれるものと信じられてゐたのである。

次ぎに第三の不淨拂は呪的轉移であるが、イスラエルの傳說の中には其最も顯著なる例がある。卽ちイスラエルの罪を悉く山羊に負はせて野にやるのである。其時アロンは山羊をとつて其頭に手を按き而して其耳にイスラエルの諸罪をさゝやく、而して其山羊を遠く荒野に逐ひやる。かくして罪を荒野に埋むるのである。(レビ記十六章) 此れに似た物語が馬太傳八章にもある。そこには鬼がイエスに求めて「若しわれ等を逐出さんとならば豚の群に入る事を容せ」といふた。イエスは彼等に往けと曰ふたので鬼は皆豚の群に入りた。爲めに豚は海に溺れて死んだとある。此の二々の傳說は不淨拂の呪的轉移と見られるものであらう。サントは卽ち然ういふてゐる。

トーテミズム時代のカルト　原始時代には病魔を拂ひ狩獵の呪の踊などあつたが、これらは個人的であつた。然るにトーテミズム時代には一般的規範の性質を有する崇拜（カルト）が盛んになつた。此のカルトの對象は一つは人生の重大事件に關するもので他の一つは人間に最も

重要なる自然の現象に關するものである。

人生の重大事件といふのは誕生、死及成年である。此等の内誕生に關しては初め何等の儀式も崇拜もなかつた樣である。初生兒は元來生れてもそれを養育すると、せぬとは兩親の意志にあつた。ポリネシヤの多くの種族にあつては初生兒を殺す事は其兩親に許されてある。只數時間の後まで生きてさへ居ればそこで始めて生兒が生存の權利を得る。それでそれを養育する義務が兩親の上にかゝる事となる。又古代のゼルマン民族、ローマ人ギリシヤ人の中にも初生兒の生命は父が生れた子を取り上げるといふ象徵的行爲によつて初めて認承せられる。斯ういふ風であつたから、誕生には何等の儀式及崇拜は伴なはなかつたのであるが、死と靑年に關しては重大なる崇拜儀式が伴ふてゐる。

原始人は死者に對して恐怖し、又逃走の態度を取つたが、かゝる感情と態度が衰へると、次ぎには此れに對する敬虔の心が益々著しくなり、同時に死者の未來に對しての準備の衝動が生じた。而して種々なる儀式を生じた。氏族の者は嚴肅に屍にともないて葬儀を行ふ。これ葬式の「とも」の風俗の起原である。哀哭も亦儀式の形となり、遂には哭女の階級さへ生じた。此の哀哭の叫び聲の中には、悲しみの情もあるが、尙死者に對する恐怖の情緖が現はれてゐると

ヴントはいふてゐる。更らに埋葬儀式の中で主なるものは、死者への供物（クリフィス）である。此の時普通の用品の外、動物を殺して此れを副葬し、又若し死者が酋長の如きものであれば奴隷妻女が殉せしめらる。アフリカのスーダン及バンツーの人々の中に此れを見る。此等の供物は初めは死者の靈が歸り來る事を恐れての動機からであつたが、後には死者の來世の爲めの準備をなす動機となつた。即ち死者が長く來世にて生存し得る樣にといふ心から供物をなすのである。此れと共に供物をする動機は死者をして來世の生活を營ましめる呪であつた。更らに進んでは生存者に加護を與へんが爲め死者に供物をする樣になつた。

次ぎに成年式（イニシエーションセレモニー）であるが此れは若者が成人の中間入りをなし、此より一人前の者となり、狩獵及戰爭にも加はる式である。此れは未開人に取りては、甚だ重大なる意義を有してゐる。從つて此の時に於て種々なる儀式が行はれるのである。斯る儀式はヴントに依ると、原始時代より既にあつたのであるが、トーテム時代に特に著しき發達を遂げたものであるとするのである。此の種の祭事は、民族の大なる祭事で、時には、親しい他の部族の者も集ることがある。そこには、歌もあり、踊りもある。オーストラリヤに於ては、此の式は、嚴格なる禁慾主義の下に長い準備を以つて行なはれ、青年は食物の嚴重なる忌みを受ける。武器の使用法も此の時

教へられる。儀式は常に夜分行はれ、年長者は顏を繪取つて動物の眞似踊などする。青年は此の式に於て齒を拔かれる。所謂拔齒の式はそれである。拔齒の式といふのはいふまでもなく齒を拔く儀式である。齒を拔く爲めには極めて慘酷な方法を用ふるのであるが、それに對して苦痛を訴へる事は許されぬ。若し苦痛に耐へ得ない樣なものであれば直ちに撲殺されるか、又は種族の者と交をなすに適せぬ者と認められる。而してあらゆる恥辱をうけねばならぬ。それでは如何にして齒を拔かれるかといふに、一口にいへば齒をたゝき出すのである。其手術は一般に醫藥の人「メデシン、マン」や祭司によりて行はれる。祭司は自分の下の齒を以て青年の上の前齒に當てゝ壓しつける、斯くして齒の根を弛ませて置いて石の槌で叩き出すのである。何故拔齒が式の一部となつたかといふ事は明かでないが、ヴントは此れにも呪的の意味を附してゐる。即ち氣息魂がそれから這入るといふのである。それでキッスの原因もこれと同樣で、矢張り呪的の意から起つたのである。又青年は踊場の中央にて燃へてゐる火の側に接近して熱さを辛抱すること、或は其火を飛び越へ、又は滑稽な踊を見ても相格を崩さぬ事などの式がある。かゝる式と共に青年は年長者には從順なる事、凡ての物は友達に分配すること、友達と仲よくする事、娘や人の妻に近づかぬ事、食物のタブーをよく守る事、などの敎訓を受けるのである。

聖書によれば割禮は請めの式(コンセクレーション)であるが、そは寧ろ發達した形であつて原始的の意味ではない。マダガスカルのメラネシヤ族にあつては割禮は子供をして人たらしめる儀式で、此れをうけたものは軍事公役につく事が出來るのである。又毛髮供犧といふ事もある。此れも又慘酷極まるもので、只髮を切つて神に捧げるといふのではなく、之れも拔き取られるのである。文身の如きも矢張り成年式に於て施こされたが此れも隨分慘酷な方法で行はれた。其他斷食の如きも成年に入る準備の爲めにせられ、暫時家庭を離れて隱遁生活をなすなど種々なことが成年式として又成年式への準備としてせられた。(ダニエル新生命論) 今日吾人が此の成年式の行なはれた時期十四五歳を考へて見るに其發育の點より考へて確かに重大なる時期である、此の時期に當りて嚴格なる成年式が未開時代より行なはれた事は注目すべき點である。

以上は人生に關する崇拜儀式であるが、次ぎに自然現象に關する崇拜を見るに、食物を必要とすること、植物の成長すること、動物の增殖することなどゝ關係した自然現象が崇拜せらる。而して植物成長崇拜(ヴェヂテーション カルト)は最も古い形で、トーテム時代の最初から起つてゐる。動物增殖の式は植物のそれの移轉である。植物は水旱の害が意外の時に起り、其豐凶が豫知せられぬ所から、早くからそれに對する希望、又は恐怖の發現たる崇拜儀式が起つたのである。植物成長の崇拜か

ら田野に關する崇拜が起るのであるが、此れは單獨的農耕から共同的作業に移るに及んで現はれるのである。此の崇拜儀式には祭場が種々の彩色を施され、喧しき音樂の刺戟の裡に男女が入り亂れて植物成長を司れる魔の眞似をして踊る。この踊によりて植物の發芽及發育を促がすと信ぜられてゐる。而して男女が入り交りてゐるのは植物の繁殖を人間のそれと同一に信じてゐるからである。尙此の崇拜に依りて注意すべきは、單に地上の魔のみでなく、天上の魔も現はされてある。此の際用ふる假面又は衣服には雲電日月等が示されてゐる。これ植物生成には土地の狀態のみでなく、天上の風雨氣候が大いに影響するからである。それ故此の時雨の呪もある。雨の祭司即ち雨乞をする爲めに斷食したり、祈つたりする一團の祭司が雲の假面を被り裸體で隣村から祭場に練り込んで來る。其祭司が村を通る時、女が家の窓から其男に水を灌ぎかける。此れは卽ち作物に雨が豐になる呪である。此の遺風は今日歐洲の苅入の時の風俗に殘つてゐる。

此の植物崇拜儀式と關係して職業的祭司が出來る。而してそれを中心として崇拜團體が生ずる。此れまでは種族トーテムの如く血族の關係から團體が出來てゐたが、今度は崇拜を中心として團體が結ばれるのである。此れ即ち北米其他の所に多くある秘密團體(シークレットソサイチー)である。其團體は

述してゐる事は到底出來ない。而し此時代は所謂歴史と共に始まつてゐる故人に可成り知られてゐる時代である。されば茲には、只此の時代の特徴とも見るべきものを擧げるに止めやう。

(1)國家の發生及政治的發達　前の時代には種族組織が出來たが、此の時代に至りて國家が起つた。此の國家が起つた所以は、主權者の發生、民族の戰爭及移住に歸因するのである。固より前の時代に於ても戰爭及移住もあり酋長制なども出來てゐたが國家は種族組織から漸次發達したものでなく、全々新らしき動因、新しき條件のもとに起つたものである。それは政治的區分法を見ても略ぼ察知する事が出來る。即ち種族は前にいひし如く二、四、八といふ風に自然の分類法によつたが、政治的區分法に於ては、十二及十の數を用ゐてゐる。此十二の數はバビロニア人の天文の觀測から起つたのである。今日晝夜を各々十二時間とし、一年を十二ヶ月としたのは皆其影響である。傳說に殘つてゐる所では、古代イスラエルの支派、オリムポスの神、キリストの使徒は何れも十二の數になつてゐる。又歴史的傳承としては、アゼンス人は十二の種族に分れ、小亞細亞に於けるイオニヤ人の植民地は、十二の都市より成り。デルフォイの神社を守護する爲め起つた團體は、十二の種族團體より成つてゐたといはれてある。又十の數を以つてせられたのも多くある。アゼンス人、ローマ人、ジアマン民族、更らにアメリカ古代文

多く動物の名を附せられ團員は同年輩の男子よりなり、各々は動物の羽皮などを着けて印としてゐる。

四、英雄及び神の時代

英雄及び神の時代の意義　英雄とは種々の意に解せられるのであるが、こゝにいふ英雄は廣い意味で單にカーライルが「英雄崇拜」に用ゐてゐる樣な英雄的英雄のみでなく、都市の建設者建國の祖及宗教の開祖などを皆含めていふのである。此の意味に於ける英雄は何れも有力なる個人であるから、從つて此の時代の特徴はかゝる個人的人格が著くし現はれてゐる所にある。

次ぎに神の觀念であるが、神は此時代に於て、其人格を明らかに現はし、且つ超人的の性質を現はしてゐる。神の觀念は此時代に於て、英雄の觀念と以前の魔の觀念とが結合して出來てゐる。かく神の觀念が構成せられるとこゝに狹義の所謂宗教が始まるのである。

此の時代は、英雄を中心とした時代で、これによりて神の觀念が生じたが、それのみならず英雄を中心として其他總ての文明が現はれるのである。

英雄時代の外部文明　文明が進むに從つて愈々復雜になる故、茲に詳細なる點に至るまで記

明國たる、インカ王國の如きは十の數を以つて區分せられてあつた。此の十の數は多分人間の指の數であらう。十二にしても十にしても、此數を以つて區分するは全く個人の有意的の制定に外ならぬ。

(2)家族制の發生　原始人は本能的に一夫一婦で家族を有してゐたが、トーテミズム時代に至りて家族的結合は民族的結合の爲めに壓倒せられた。併し此の時代になつて家族組織は復活せられた。民族の内から、密接なる血族が分離して新しき家族制が發生した。爲めに今度は民族制を壓倒するに至つた。吾人はイスラエルの歴史に於てモーセより以前を家長時代(パトリアーカル)といふが、こゝに家族制の著しき例を見る事が出來るであらう。

(3)都市の發生　前にいひし如く、國家が發生して、其國家の中心たる都市が生ずるのは自然である。都市には主權者が居り、此れを中心として其領土が支配せられるのである。而して都市には其守護神を祭る神社がある。それ故此都市は國家の政治的勢力の中心であると同時に崇拜の中心である。

(4)法制の起原　法制は元來風俗から出た一分枝である。而して國家が發生し、政治組織が堅固になるに從つて、愈々發達するのである。所で此法制が發達した所以は單に國家組織の發達に

のみ歸する事は出來ない。法制の發達する原因には、吾人は宗教的方面のある事を忘れてはならぬ。即ち法制には、單に國家の權力があつたのみならず、それには宗教的の神聖なる意味が含められてあつた。それ故法制は國家的要素と宗教的要素の結合したものである。而かも此の兩要素の内宗教的要素が主力を占めてゐる。モーセの十戒、イスラエルの祭司法典の如きは皆神の法とし、又バビロニヤのハムラビの法典の如きも神の代理者として其法令を制定してゐる。

かくの如く政治的成分と宗教的成分とが法制に於て結合した狀態は此時代の特徴である。以前には政治的權力を有する酋長と宗教的權力を有する呪師は相對立の狀態であつたので、二成分は未だ結合してゐないのである。然るに此時代になりて此二成分が結合した爲め法制は大に發達したのである。而して祭政一致の狀態が此の時代に明かに現はれてゐる。此の時代所謂民事の爭を裁決する爲めに裁判官の如き役人も現はれるが、祭司も亦矢張り裁判を掌るのである。特に神の裁判(オーディール)なるものがあつた。此の神の裁判には二つある。其一つは決鬪で他の一つは呪的檢査である。二人の者が決鬪すると神が正しい者を助け、不正なる者を殺すといふ卽ち呪的格鬪(マジックコンバット)である。此れが變つて後には呪的檢査(マジックテスト)になるのであるが、例へば裁判官が果して罪が

あるか否かを見る爲め水及び火によつて調べるのである。即ち被告を水中に投じ、其浮沈によりて罪の有無を見、又熱鐵を握りしめるか、或は素足にて火を渡らしめ、若し危害を受けざれば無罪であるとする類である。此れ卽ち神が水及火によりて無罪被告は此れを淨化し、有罪被告は此れを淨化しない、そこで罪の有無を決定するのである。

(5)犁の耕作及び牧畜　以上の如き國家及社會制度の發達と共に犁の耕作及家畜の業も盛んになつた。家畜には、牛、羊、山羊等の飼養である。家畜の起原は何であつたかといふに或る者はそは狩獵から起つたとしてゐる。併し狩獵の動物は牛乳を與へたり犁を運ぶ事は出來ぬ。それ故狩獵から家畜となつたとはいへない。ヴントも此れを否定してゐる。或る者は此れ宗敎的崇拜と密接なる關係があるといふてゐる。即ち未開人がかゝる動物を宗敎的に崇拜してゐた其間に遂に飼ひ馴らされたのであるといふのである。

犁には此れを運ぶ牛が必要であるが、此の前に他の事が發見せられた。それは卽ち車である。始め太陽崇拜に於て其像が木の圓板にて作られ、其中央に穴を開け、之れに杭を當てゝ廻轉せしめ、摩擦によりて發火せしめ、此れを山上からころがし落す風俗があつた。此の太陽の模形から一輪の運搬車が出來、更らに二輪車が出來た。それから遂に犁が起つたのであるとい

ふ。

(6)去勢　今述べた二輪車は初め神の車であつたが、次ぎには神の寫しである主權者が乘るものとなり、遂には貴族も此れを用ふるに至つた。此の車をひく者は初めは人であつたが、牛となり後には馬となつてゐる。而して此の際去勢せられてゐる。其去勢せられた理由は卽ち靈魂の宿れる部分で最も除去し易い部分である男根を神に供するの意にある。又車の側に侍する者の一團が矢張り去勢してゐるが、此れは一つには去勢した動物から聯合したものであるが此れは多分シリヤ、フエニシヤのアシタロテ神の崇拜に於て見らるゝ如く宗敎的恍惚の爲め遂に去勢するやうになつたのであらう。

(7)私有財產の發生　此の時代は前にもいひし如く個人的の性質が著しくなつてゐる。夫れ故土地及產物に對する私有觀念が發達するのである。かくして階級の別が生ずると分業も發達する。此の分業から通商及植民が盛んになる。

(8)戰鬪及武器　前の時代には、多數と多數とが入り亂れて戰ふのであつたが、此の時代には一騎打が著しくなる。トロイ戰爭の如きはそれである。兩方から選手が出て爭鬪する。全軍は其選手の背後にあつて鏑や石を投げる。而して全軍の勝敗は其選手の勝敗で決せられる。武器は

投鎗弓矢の如き飛ぶものゝ外に斧刺し鎗及小さい圓形の楯の如き接戰の具も發達した。殊に劍は接戰の武器として此の時代の特有のもので刺し鎗から變化したものである。

神の發生　神の觀念は歴史の中途に於て出來たもので最初からあつたものではない。尤も前にもいひし如く以前には魔の信仰はあつた。又靈魂の信仰はあつた。併し魔の信仰靈魂の信仰は未だ神の觀念ではない。神の觀念にはヴントが云へる如く少なくとも三ッの特徴がなければならぬ。其一つは神の住所であつて、一般には天上であるとせられてゐる。第二の特徴は神は完全なる生活を送るものであるといふ事である。併し此れにも例外はある。神にも人間の如く飲食物を要し、若しそれが得られなくなると死を免かれぬ。第三の特徴は神の人格である。神の觀念は、以前の魔の信仰から發達して來たので其觀念内容は極めて人間的である。其人間的である所は此の時代に至り發生した英雄の觀念が加はつたからである。魔の觀念と英雄の觀念が結合して是に神の觀念が發生したのである。それ故神が呪力を有する點に於て明かに魔の成分が認められ、神が人格的である點に於て英雄の成分が認められるのである。神が人間の理想的に見られる樣になると一層英雄的要素が明かになつて來るのである。大體人の宗教意識は自己意識の發達と共に發達するもので、人類が人格的の神を崇拜するに至りたる時期は既に自覺の

大なる時期に達し人類が自己の價値を認めた事を證明するのである。かく自己意識が發達すると、以前の如きトーテム的崇拜では滿足を得ず、人格的の神を崇拜せんとするに至るのである。夫れ故アンスロポモルフイズムは將來宗教進化の理想ともいふ事が出來る。尤もアンスロポモルフイズムにも創世記の始めに見ゆる如き極めて幼稚なものがあるが、人なるキリストを神性なるものと信ずるは矢張りアンスロポモルフイズムの進化した形とする事が出來る。

傳說の種々　(1)英雄傳說。如何にして英雄の觀念が生じたか、英雄は全く此の時代の創造であつたか、或はトーテム時代に何か其前進とも見るべきものがあつたか。此の最後の質問に對しては直ちに然りといふ事が出來る。前時代に於て英雄は全くなかつたものではない。併し此の時代にいふ樣な意味の英雄はなかつた。もし吾人が英雄の名を附するならば小話的英雄といふべきものである。此の小話的英雄は神話物語の最初の形即ち小話的神話（マーチエンヒーロー）の中心記事となつてゐる。今日殘つてゐる童話に現はれてゐる小話的英雄は傳說の英雄と區別せなければならぬ。小話的英雄は普通子供、多くは男の子供である。此の男の子が世界に出て種々なる冒險を為す。此の冒險に於て自己の有する。又他の親しき種々の呪力の助けによりて種々の怪物を退治するのであつて、自己自身の力量によつて成功する事は稀である。如斯小話的英雄には多く

は外部から好運が向つて來るので呪が其の運命を定めるのである。所が傳說の英雄になると既に子供(ボーイ)ではなく成人(マン)殊に活力に富む青年である。此の英雄は矢張り呪の助けを借る事はあるが主として自己の力量に訴へて冒險的事業をなすのである。彼は全く自力的英雄である。彼は呪師ではない。而し彼は超絕的能力を有してゐる。例へば彼は其の雙肩に空を負ふ事が出來るとか、種々の怪物を打ち伏せる事が出來るなどの事がある。如斯して小話的英雄は無くなり、傳說的英雄が現はれる。而して呪の意匠は傳說となつて減退してゐるのである。併し傳說にも呪は用ひられてゐる。例へばアルゴー丸航海の傳說の如きは、小話にも勝つて呪が含んでゐる。のみならず此の傳說の中に組み合せられてゐる種々なる要素は凡て全く小話的動機である。黃金の羊毛、物いふ船、閉づる岩、女呪師の如き呪的小話の意匠があるが、併し其中心には人格の明かな英雄が活躍してゐる。

(2)神話的及び歷史的傳說。かくの如く小話的要素は漸次英雄的要素に其地位を讓るのであるが、此の小話的要素の減退を生ぜしめる要因(ファクター)は歷史的回想の影響にも認める事が出來る。此の方面から見るとギリシヤ、ジーマンの傳說は最もよき例である。併しヘラクレース傳說、アルゴー丸航海の傳說の如きは純神話的傳說で、比較的初期のものである。所がトロイ戰爭の傳說

の如きは、明かに歷史的回想の跡を表示してゐる。其他シーグフリードの傳說及びテードリッヒ傳說の如きは皆此の類である。併し此等の傳說にも尙實際の歷史を去る事遠く、且つ小話的意匠が其影を投じてゐる。トロイ戰爭の木馬の詭計も傳說では一つの早略の如く記されてあるが、ヴントは此れを呪的であるか、又は神が人を守護する爲めに馬に化身したのであると解いてゐる。

(3)宗敎的傳說。宗敎的傳說は此の時代のものでなく、次ぎの時代の產物である。併し序であるから玆に一言して置く、宗敎的傳說は二種ある。一つは佛陀、ペルシヤのミトラ、エジプトのオシリス、キリストの傳の如きもので、此れ等は、贖罪的傳說(レデンプションレゲンド)である。第二は聖者(セーント)の傳說(レゲンド)である。前者は神の運命最後の勝利を描き出し、後者は人類の純宗敎的生活に覺醒する事、誘惑に對して苦しむ事及び最後の勝利などに就いて物語るのである。夫れ故此れを救世主傳說に類似してゐるが、聖者傳說ではたとひ主人公が其勝利の冠を受ける爲めに天にまで昇つたといふ樣な事があつても飽く迄人間である。而して此の聖者傳說は神話的想像が著しく働き、他の同樣の傳說又は小話から奇跡其他不思議の材料を取り來り、純小話に近づくのである。聖者の奇跡はビジオン及び恍惚から來るのである。ビジオンにより光を見、天上を目擊し、恍惚の爲めに

感覺脱失を起し火も劍も彼を害する能はざるに至るのである。

神話　(1)開闢神話、神話とは即ち神の傳說である。併し吾人は前に述べしが如き英雄の傳說といふ樣な意味に於て神の傳說を見出す事は出來ぬ。何となれば神は永久不變で病死に惱まされる事はない故、英雄が有する樣な經驗は神にはない。隨つて其歷史もないのである。故に一般に神の傳說は獨立しないで人事殊に英雄が主となつてゐる傳說の中に投入せられてゐるに過ぎない。例へばトロイ戰爭の時にギリシャの神々が種々英雄の事業に關係し、イスラエルのエホバがアブラハム、ヤコブ其他と交涉してゐるの類である。故に神の傳說は英雄傳說に織り込まれてゐて獨立してはゐない。

併し爰に神自身が實際活動の主題となつてゐるが如き神話がある。即ち開闢神話と神統神話とである。此の中には天地の發生、神々の發生、神々が創造した世界を統治する起原などが記されてある。併し此れ等の中に見ゆる神は實際に於て神ではなく、魔に過ぎない。何となれば其神は未た人格を有してゐないからである。されば未だ神の發生を見ない未開の時代にも、尙開闢神性は存在したのである。ポルネシャの神話に依ると、天と地はもと抱合してゐた强い夫婦神であつた。所が此の神の子供が、此れを離そうと努めた。子等の中の最も强い子が母なる

地上に逆立ちになつて足で父なる天を押し上げた。其時から天と地とは別々になつたと。ギリシャに於ても天神ウラノスと地神グーとが始め抱合して居つた。所が其間にチタンの一族が生れた。而して天と地とが分たれたと。バビロンにも又同樣の神話がある。マルダクが其母チアマットを二つに裂いたが、其一片から海が生じ、他の一片から天の海が生じた。此れ等の神話の中にある神は未だ神ではなく魔である。而して其神話は魔の遺物である。併し爰に現はれてゐる魔は天地宇宙に關係し强大な性質を有してゐる所より見れば神の觀念に近い魔といふべきである。

兎に角此の神話に現はれてゐる神が魔であるのであるから、其神話は前にいひし如き小話的意匠があるのである。此等の神話の神々は魔的の性質を有する外に、尙二つの觀念がある。混沌（カオス）の觀念と神々の戰鬪の觀念である。此混沌はジアマン民族及ギリシャ神話に於ける如く、恐ろしい底なし穴（アビス）として考へられる事もあり、又バビロンの神話に見ゆる如く大洋（ウオールドシー）として考へられる事もある。何れに於ても恐しい强大なる魔がゐる。而して其魔は强大なるのみでなく、其形も亦異樣で、半人半獸、又は多頭多眼、又は百手をもつてゐる。所が是れ等の怪物が神に退治せられて後始めて世界秩序が定まり、安寧が維持せられる事になる。此の點も矢張り小話

的意匠を現はしてゐる。

一體開闢神話は比較的後世のもので、多くは神話的藝術の產物である。然らばさきに述べし如き神話に於て神々が魔的であるは、何の爲めかといふに、そは世界的大變化を取扱ふ爲め神の人格性が失なはれたのであらう。ヴントは開闢神話を三種に分つてゐる。純神話的、哲學的—神話的、及び純宗教的の三種これである。純宗教的開闢神話は創世記のそれである。此れには渾沌の觀念があるが其神は魔的ではない。而して魔との戰鬪の觀念も失はれてゐる。

(2)洪水傳說。此れも開闢神話の一つであつて、世界が大洪水の爲め曾て破滅したといふ傳說である。又洪水の代りに大災によりて世界が破滅したといふ大災傳說もある。此の洪水傳說の動因は降雨で、大災傳說の動因は野や森の火事である。此の傳說は未開人の間では小話的の色彩を有してゐるが、文明民族の傳說は、小話的色彩を有する外に宗教的道德的の部分が加はつてゐる。聖書に見てる洪水傳說の如きはそれである。併し聖書の洪水傳說の如きは既に純粹なる神話でなく、祭司が反省して其結果出來たもので、それには神の裁判觀念が結合してゐる。

來世觀念　原始人は人の死後暫時尙靈魂が存在して人に病氣や死を來すものと信じてゐた。更らに進んでトーテム時代に至りて酋長の死後は、其靈魂が長く殘ると信じた。併し來世觀念

は未だ其等の信仰にはない。只靈魂が其附近に居ると考へてゐるに過ぎない。來世觀念といふには死後靈魂の住む所として一定の場所が現はれなければならぬ。そこで靈魂の住む場所としての最初のものは米北インヂアンの靈魂村（スピリットビレーヂ）の如きもので、此の村に死後の靈魂が皆集つて來て、生前と同樣に狩獵や戰爭などし、其存在を繼續すると信じてゐる。インヂアンの中には靈魂村だけでなく、水牛村（バフアロービレーヂ）といふのもある。其村には、死んだ水牛の靈魂が皆之れに集まる。時として冒險青年が其水牛村に迷ひ込む事があるなどいふのである。超へ難い橋の架つた河、又は深い森があつて、此の村と人の生存せる此の世とが隔てられてあると信じられてゐる。此の外幽谷山洞なども亦靈魂の住む所又其入口、又遠い島も來る世界と信じられてゐる。此の遠い島を來世と信ずるのは、ポリネシヤに於て普通の思想である。ホーメルの中にも遠い島の思想が現はれてゐる。其島にメネラウスがトロイからの歸途救助を得たといふので、此の島は幸福の場所といふ思想がある。

尙進んでは下界の觀念が生ずるのであるが、此れは下界神話に表はれてゐる。而して第三に天上界を死後靈魂が行つて住むべき所と信ずるに至りても、下界の觀念は失はれず、反つて兩界を對立せしめる樣になるのである。而して今度は天上界を以つて祝福された、敬虔なる、又

正しきもの、神の好むものの住まふ所と考へ、下界は罪人、罰せられたものゝ行くべき所と考へるに至る。此所に地獄極樂の觀念を生ずるに至つたのである。

尙ほ天上を極樂、地下を地獄と考へる外に、次ぎには煉獄の觀念をも生じた。此の煉獄は罪人の靈を一時處罰する所で、殊に此を拂淨して天國に移す所である。此の煉獄拂淨の方法は、地上の崇拜儀式に於けると同じく火を用ゐる。此の思想は明かにイラン人に起原してゐる。而して中世記のキリスト敎の宗敎的想像によりて發展した煉獄思想は、ダンテの神曲によく表はされてある。

應報の觀念　以上の如き末世觀念と同時に、他の種々なる思想が發展するのであるが其一つは應報の觀念である。此れは原始的思想ではなく、只英雄時代の發生で、死に對する恐怖と關連する古代の經驗及び氣息魂及影像魂の思想の補充として現はれた思想である。尙注意すべきは最初の應報觀念は、其性質が道德的でなく、純宗敎的である事である。こゝを以てザントは宗敎と道德とが根本的に相違してゐるといふてゐる。此れが宗敎から道德に這入るのは、發達の最後の階段に於てゞある。此の應報觀念の最初は或る英雄が神の恩寵を受けて神々の中に又は其他の幸福の場所に入れられ、又神の怒によりて罰を受けると言ふのであつた。所が此れに

次いて或る特別なる崇拜團體に屬するものゝみが、又は此の團體の中にゐる者は皆來世の苦難をのがれ、幸福を受ける事が出來ると信じられるに至つた。所が次ぎには此團體によりて救濟せられるものゝ範圍を少數に限らんとする傾向が生じ、遂に其崇拜を秘密にするに至つた。隨つて呪の手段が又々復活せられたのである。尤も此の秘密團體は前の時代からあつたのであるが其目的とする所には大いに相異したものがある。卽ち以前の團體の目的は病氣、狩獵、收獲等現世的であつたが、此の時代の密儀の目的は來世の幸福を得んとする所にある。而して來世に於ける幸福を希望する傾向は英雄といふ理想を轉じて人類といふ理想に移らしめる。而して來世の幸福を得る爲めには道德によるのでなく神に對する敬虔であるとする。つまり應報觀念に於ては道德と宗敎とは始め全く別になつてゐた。併し以前に遡ればモーセの十誡、又はハムラビの法典に見ゆる如く宗敎と道德とは全く一致してゐる。卽ち道德的の罪は同時に宗敎的の罪であつたのであるが、此の時になつて其結合が失なはれたのである。併し後になると又此兩者は再び結合する樣になる。

靈魂輪廻の信仰　次ぎに靈魂輪廻の信仰に於いて一言しやう。此れは來世觀念の一分枝であるが前に述べし如く神話的想像の產物でなく、こは哲學的思索の產物である。而して此觀念は

煉獄の觀念とよく似てゐるが、拂淨の觀念はない。其代りに新しき要素が加はつてゐる。それはプラトーの「理想國」に表はされた思想の中に見出されるもので、つまり人間は生涯に現はした性質を死後に於ても保持するものである。夫れ故此の性質を顯はす動物の形を取るのであるといふ事である。こゝに人間と動物との關係の觀念が現はされてある。此の觀念は遠く動物トーテムに起原してゐる。所でトーテミズムに於ては動物は崇拜の對象で、多くは祖先の靈が乘り移つてゐるものとせられてあつたが、英雄時代には英雄が動物を退治する事となり、始めは人間の動物化は寧ろ有利なものと考へられてゐたが、次ぎには寧ろ不都合なものとせられ、罰又は惡意の呪の致す所となつたのである。つまり動物に對する評價が變化したのである。されば輪廻の思想は波羅門の創見ではなく一般の民族信仰の關係して起つたものである。ピタゴラス學派プラトーンなどにも此輪廻思想は深く這入つてゐる。

神話と崇拜　心理學的に考へるなら神話と崇拜は密接に關係してゐる。神話は觀念の一種である。而してそは感覺的現實を背影としてゐる所の超感覺的世界と想像世界の觀念を含むである。超感覺世界は感覺的材料からの想像によりて造られてある。此の事は神話發達の各階段―第一は小話的神話、第二は英雄傳說、第三は神の傳說に―於て認める事が出來る。崇拜に只魔

及び神に對する行動のみを包含してゐる。而して感情及び情緒の方面が此れに現はれてゐる。日の入りに於て焔の英雄が黃昏の魔に呑み込まれるといふ觀念、雲は魔であるとの觀念、及び木に病氣を移す觀念などは皆神話的である。木に繩を卷き附け病氣をそれに移す呪の如きは病魔に對する崇拜である。所で此の神話にしても崇拜にしてもヴントによれば未だ宗教的內容を有してゐないが、或る時期まで此れ等が發達して而して始めて宗教的となるといふのである。蓋しヴントは現今勢力ある宗教的信仰の立脚地から宗教の特徵は「神が第一にそれ自身の本質によつて客觀的に理想的價値を有し、又理想的超越的現實である故、超感覺的性質を有し、第二に人間生活の理想的目的に對し人間の主觀的要求を滿さねばならぬ」といふてゐる（四十五頁）。即ち神の觀念がそこまで達しなければ宗教的とはならぬ。それ以後の呪魔の信仰及び崇拜は未だ宗教的ではなく、宗教以前又は宗教以下の階段であるとする。併しそれらを宗教の漠然たる概念であるといふても少しも差支はないのである。何となれば宗教は或る時期に於て突然に現はれたものでなく、神話及び崇拜を基礎として發展したものであるからである。

さて神話と崇拜との關係について見るに、宗教の發達上より考へて崇拜は、神話よりも一層重要なる要素とせなければならぬ。崇拜は右に述べし如く行爲の方面で、行爲は感情及び情緒

に基づいてゐる。此の行爲は觀念に影響し、此を强め、又此れを變化し、而して又新しき感情及び情緒を喚起し、新しき行爲を生ぜしめるのである。然るに現今キリスト敎の中には、觀念の方面―神學、敎理―に重きを置き行爲卽ち感情的方面に重きを置かない傾向を表はしてゐるものがある。そは、そのものゝ發達の上からいへば嘆ずべきであらう。崇拜は先づ宗敎的情緒を現はし而して神を創造するのであつて、神話はそれに理想的人格を與へるのである。夫れ故崇拜は實に宗敎意識の結果であると同時に共源泉と見る事が出來る。

崇拜の起原　崇拜の起原は早くいつて仕舞へば植物崇拜（ヴェーゲタブル）にあるのである。此の植物崇拜に就いては既に前に述べたのであるから爰には多く述ぶるの要はない。爰には只神崇拜に關する方面から一言するに止めやう。北部及び中央アメリカの民族の中には多く發達した形に於て、植物崇拜が行はれてゐる。それには魔及び祖先の崇拜が天上神話の要素と混合して明かにトーテム時代からの過度期を指示してゐる。祖先の靈魂が雲の背後に居つて、雨の魔を動かしてゐると信じ、又天には神があつて運命を支配する至上權を有してゐると信じてゐる。

此の植物崇拜は他の崇拜と次第に結合してゐる。「ズーニ及びナバヨスの中には、男女の成人式及び成人團體への入會式は最も重要な儀式であるが、それ等は皆植物崇拜と結合してゐる。

ズーニの中には成人式の前に兒童が崇拜團體に入會する式がある。此れは恰かもキリスト敎會の洗禮式に似てゐる。ズーニの兒童が崇拜團體に入會する式は、生れて直ぐでなく四五歲にもなつた時行なはれるのである。がそれに次いで十四、五歲の時に又式がある、此の式に於て青年處女は聖別せられた鞭を以つて鞭打たれるのであるが、此れは忍耐力を試驗するのでなく、呪的の感化を青年處女に與へる爲めである。此の後の式はキリスト敎會の堅信式に相當するものと見られる。此の種の式は、植物崇拜の節に同時に行はれるのである。此の植物崇拜に於て病氣治癒も行はれる。アメリカに於ては、病人は此の式場近くに設けられた汗の家に來りて發汗療法を行ふのである。

汗の家では熱い石に水を灌ぎて蒸氣を起し此れに浴して發汗する樣になつてゐる。此の汗の家の最初の目的は病魔を追ひ出す事になつたが、後病人ならざるものも拂淨せられるの目的で此れに入る樣になつた。吾々でも發汗の後氣分が回復した樣な心地になるが、野蠻人は、汗の家の式を終へて出た時何となく再生の感がしたのであろう。此れは水によつて拂淨する事と聯合し、遂には罪の拂淨と病氣の治癒とも連合する樣になる。キリストが嘗て一人の病人に對して汝の罪赦されたりと云ひ、又汝の床を取りて歩めと云ひしが如き思想は汗の家に對する觀念の發達に於て面白く符合してゐる事を見る。汗の家は、今日我が國では蒸し風呂に相當するものであらう。

又此の際各々が過去の罪を贖ふ事もある。かくの如く植物崇拜と病氣平癒、成人式、贖罪式な

どが結合して來るが、此の結合はいふまでもなく農耕時代に入りて食料である田畑の作物に對する配慮からである。植物崇拜は元來種蒔及び苅入の時節に行はれたのであるが、天上神話の影響から後には冬至及び夏至に行なはれる樣になつた。

密儀　此の植物崇拜は更らに進んで密儀を生ずる。即ち豐作の如き物質的要素が精神的幸福の要求によりて壓倒せられてそれが生ずる。それはギリシャ密儀の歷史に於て明かである。ギリシャのエリウシス密儀に於て野の作物の榮枯と人の生死とが結合せられてゐる。即ち冬枯の自然も春になつて又復活するとの觀念が、人の靈魂も死して後來世に復活するとの觀念と聯合し、かくして生產の崇拜が來世崇拜、靈魂崇拜を生ぜしめてゐる。固より餘程進歩したものゝ觀念の聯合ではあるが彼のポウロが身體の復活を說くに當りても彼は尙ほ植物の種子の死して再び生え出づる樣から類推してゐる。それから或る者は、子供の宗敎々育に植物成長狀態を觀察せしめる事を最も大切であるとする。植物の成長冬枯の狀態は野蠻人の心理には宗敎的に深い印象を與へると同時に今日兒童に於ても全く然りである。

密儀を生ぜしめるには、今いひし如く自然的感化が尠くなかつたのであるが、此れを生ぜしめる爲には、尙ほ他の動機がある。それは恍惚である。アメリカン、インディアンの植物崇拜に

は恍惚的興奮の現象が多い。狂熱的舞踊や、性的興奮や、又は煙草の如き刺戟物、其他呪禱所禱供物などの儀式によつて恍惚の狀態を喚起する事があるが、ギリシャのディオニシウス祭に於ても恍惚的興奮の準備として禮拜的呪禱及び供物や酒—此の酒は血の供物から來たので印度では酒が神格化せられてソーマとなつてゐる—などが用ゐられ、此れによりて人は現世を脫して來世の觀樂に這入つた樣な感を抱くのである。

崇拜行爲の種々相

(1)祈禱。祈禱には四種のものが認められる。其最も原始的のものは呪禱である。呪禱は魔の崇拜から發達して神の崇拜の最初の形式に這入つたもので、呪と祈願との中間の形である。而して此れは祈禱の一層發達の方向を指し示してゐる。第二に呪禱は祈願となる。祈願と呪禱の異なる點は、祈禱は要求の實現を神の意志に任せる點にある。呪禱は强迫的であるが、祈禱に於ては然うではなく、神の意志に任すといふ服從的の色彩が現はれて來る。かく呪禱が祈禱に發達した所以は神が人格的になつたからである。魔に於てはこの點が全く缺如してゐた。所が祈禱に於ても尙呪禱の性質は殘つてゐる。それは祈願の言葉が反覆せられる所に認められるのである。元來反覆は呪的結果を强大にするものと考へられてあつた。多少は變化はしてゐるがア

ペスタや吠陀及聖書の詩篇中にその例を見出す。第三に感謝である。祈願と感謝とは往々結合して現はれる。祈願に於ては神に慾求を現はし、感謝に於ては其欲求の聽かれたのを謝するのである。それ故この二つはしば〳〵結合せられてある。殊に祈禱祭の發達した形式に於ては感謝と祈願とは全く一つに結合してゐる。祈る者は惠みに對して感謝し、又さらに新しき神の助けを求めるのである。この感謝の動機は著しく宗教的成熟の程度を現はしてゐる。併し感謝を祈禱の手段に用ゐる事もある。併し感謝は祈禱よりもヨリ高等な形式である事はそれが神崇拜に於てのみ現はれる點に於ても認められるのである。即ち感謝は祈禱よりも一層人格者に對する感情である。讃美、又は其詩的形式に於ける讃美歌は感謝よりも神崇拜の一層明かなる形式である。併しこれは祈願の動機を全く缺如したものであるから、祈禱の一種と見る事は出來ぬかも知れぬ。これは主我的の部分が失なはれて全く神を讃美するのである。ストロングは祈禱を二つの傾向に區別し。一つは沈思的又は審美的傾向（コンテンプレーチーブ又はエセチックチンデーシー）他は實際的又は道德的傾向（プラクチカル又はエシカルテンデンシー）としてゐる。而して讃美の祈は第一に屬すとし「主よ汝は永遠よりとこしへ迄我が神なり」（詩九〇二）の如きは讃美の形で、此型の祈禱の中には自我は他我の生活の中に全然自身を失ふを目的

とす、この極端なものは佛教の默想の中にある。其目的とする所は有限なる自我を全く忘却する事である。佛教程でなくても宗教的審美的恍惚の凡ての型典にこの形の祈禱を見る事が出來る。そは古の聖詩人がその歎息の後エホバが彼を救ふといふので自ら慰藉を見出せずして、エホバはイスラエルに於ける能ある者といふ事に於て慰藉を見出し、而して子孫に於て望みが遂げられるであらうと思つてゐる。これには自我が甚だしく擴大せられて、而して平和と喜びと安心とが詩人の心にたゝへられてゐるのを見る。それ故この讃美を祈禱といふも決して差支ないのである（「祈禱の心理」二十七頁）第四に祈禱の最も成熟した形は懺悔の祈禱、又は懺悔の詩である。この祈禱に於て個人及び崇拜團體の罪の意識及び外面的不足から神の憐れみを求め、又赦しを乞ふのである。これは確かに祈禱の最高形式である。而してこれは神崇拜の發達した時代にのみ見出されるものである。以上に擧げた祈禱の諸形式よりも、これは一層內面的生活に重きを置いてゐる。卽ち良心の救濟をこれによりて神に求めるのである。併し他に於ては見る事が出來ぬ程、多く神の意志に任せる心がこれに見出されるのである。この任せる心は、人間の運命が神の絕對支配の中にあるといふ所から生ずるので、個人又は崇拜團體のあらゆる經驗は神の罰か、又は神の報酬として解釋せられるに至る。かくの如く懺悔の祈禱は一方に於て

ては神の攝理の觀念、他方に於ては應報の觀念と密接に結合してゐる。この應報の觀念も攝理の觀念も初代の神崇拜にはない。何れも宗教的發達の結果として起るのである。

(2)祭物。崇拜的行爲の第二の大切な形式は供物である。供物に就いての普通の概念はこれまで餘りに狹く取られてある。それ故其起原及び特徴が動もすれば誤解せられるのである。例へばこの供物の意味を餘程發達した崇拜程度に於て神にまでの供物(ギフト)であるとせられてある。夫れ故祭物の目的は品物を神に獻げて、其好意を得んとし、又は犯した罪の赦を得んとする所にあるとするのである。勿論祭物崇拜の發達の過程に於て供物動機(ギフトモーチーブ)が著しくなつた事は明かである。併し供物動機によりて最初から祭物がせられてあつたとはいへぬ。ユダヤの酬恩祭は眞の供物ではなかつた。それは其原語を見ても解る。即ち酬恩祭の原語はシエレム又はトオダ(レビ記七〇二、二十二〇二十九)といふのであるが、これは太古に於ける犧牲的共同食餐思想の遺存せる名稱である。即ち人が動物を奢つて、それを神と共に食するの意である。この共餐思想から第二の動機即ち供物動機が生じたのである。これは又ブリーストコードに現はれてゐる罪祭、又は愆祭の思想に見る事が出來る。

祭物の最古の形は既にトーテム時代にも認める事が出來る。即ち死者に物を獻げる事で、即

ち死者と共に種々なるものを副葬したのはそれである。而して其獻ぜられた動機は、第一は死者が生ける者に近寄らぬ爲めであつて、次ぎには死者が來世の使用の爲めこれを供へたのである。さらに死者の魔の意を迎へ、生けるものに加護を與へしめん爲に供し、遂には死者及遺族の爲め加護を得ん爲め神に供物をするに至つたのである。

かく考へて見ると供物動機は最初からあつたものではないといふ事が明かに解ると思ふ。寧ろ初めは呪が顯著であつたものと見るべきである。即ち死者、魔及び神に對する呪である。この呪的動機が後に至つて供物動機と結合したのである。ギリシャに於て往時、神に自分の髮を供へた事がホーマーの詩にあるが、この髮を獻げた事は取りも直さず一つの呪であつたのである。即ち人は生命の宿つてゐると考へた髮を神に獻げ、自己の願望を神に移さんとするのである。今日我が國に於ても所々に髮の供へてあるのを見るが、その中には既に元來の意味をなくして決心を告白する手段を表したものが多くある。割禮の風俗も靈魂の宿る所と信じられてゐる陽の皮を切り神にさゝげるのである故、これにも尙呪の意味が含まれてある。さらに動物の血を祭壇に灌ぎ、又は犧牲の身體中腎臟と其周圍の脂肪を神に供へるが如きも、亦一方より見れば呪の意味がある。人身供犧の如きも神を呪ふ意味を有してゐる。人身供犧は始め副葬とし

て死者の來世生活に備へたのである。併し後には團體の代人として神に供する事になつた。所でこの形に於ての人身供犧は、動物犧牲に先だつものでなく、寧ろそれに後れて起つたのである。併し後になつて再び人身供犧は動物のそれに代へられる樣になつた。こは聖書のアブラハム及びイサクの傳說によく現はされてゐる。古代メキシコに於て火の神の祭の際、一人の捕虜を選出し、これを日の神の子として崇め、司祭が日の再來の印として祭を行ひ、且つ心臟を切り出し殺して神への供物とし、且つ食するのである。こゝには人の代人であると同時に神の代理である。卽ち人の代人といふのみでなく、その者を神化して之れを神に供へるのである。この時供物といふ意味のみでなく、矢張り身體全體卽ち靈魂全部を以て神を咒ふ意味がある。この人體供犧の最も進んだ形はキリストの十字架上の犧牲によく現はれてゐる。かくして救濟思想がこゝに現はれて來る。而して舊思想はこゝに全く變化してしまふ。咒的の意味はなくなる。祭物をする團體は人類全體、祭物となるものは神自身である。

次ぎに祭物そのもの價値に就いて考へて見るに、或る時は全く價値のない實物の模型、又は圖畫の如きものが供へられてゐる。併し供物の意義が進むに從つて、かゝる價値なきものでなく、實際に價値あるものを供する樣になり、供物の數も增加せられ、又其質も吟味せられる樣

になる。この價値あるものは始め有血供犧卽ち生け贄であるが農耕牧畜の業の發達と共に無血供犧が起る。卽ち農產物、及び牛乳牛酪の如きものが供へられる。さらに進んで金錢及び裝飾品などが供へられるに至る。而して此等のものは神殿を飾る爲め、又祭禮の經費を補ふ爲め、又貧民を救ふ爲めに獻じられる。キリスト敎會で禮拜に於て信施金卽ちアームズを集める。これは單に獻金といふ意味だけではなく、施こしの意味を有してゐる。

實物の模型、又は圖畫の如きものが供へられる中には咒的の意味が含まれてある。彼の繪馬などは全くさうである。尤もこれは宗敎的には退化したもので、始め供物として實際の馬を供へてゐたのであるが、遂にそれが繪の馬となつたのである。而して馬ばかりでなく、種々なる繪が書かれたものが供へられるに至つた。兎に角咒の意味に於ては供物の價値は少しも考へられてない。其價値は主觀的で客觀的には何等價値はない。初物又は初子の供物もあるが、これも矢張り咒から起つてゐるもので、客觀的の價値でなく主觀的の價値があるのみである。併しこれはユダヤ敎及びキリスト敎の中にも大に影響してゐる。キリスト敎徒が日曜日に敎會に集ひ、禮拜をなすのは既にさうである。キリスト敎徒に取りては日曜日は一週間の最初の日で、この最初の日を神に先づ捧げ、自分で聖くこの日を過ごし、而して殘りの六日間を自己の爲め

に使用するのである。

(3)聖化の儀式。崇拜行爲の第三卽ち最高の形式は聖化の儀式である。供物は客觀的に神に作用するのであるが、聖化は其反對に主觀的に崇拜者自身に作用するのである。其初めは兩者共に咒の信念に基いてゐるが、聖化は一層高等な形式である。この聖化はトーテム時代の拂淨の風俗に起原してゐる。キリスト敎の洗禮式は進んだ形式に於ける聖化の儀式である。これはキリスト敎の創始ではなくキリスト敎外でも多く行なはれてゐたのである。聖化には火及び水が共手段の爲めに用ゐられる。併しこれが咒的に用ゐられる時と聖化の爲めに用ゐられる時とは共用ゐる方に相違を生じて來る。卽ち拂淨の時は洗滌するのが最も適當な方法であつたが、聖化の場合は水を灌ぐことで足りる。又拂淨の時は水は後に除去されるが、聖化の時は附着せなければならぬ。拂淨の水は普通の水でよいが、聖化の水は神聖なものでなくてはならぬ。今日洗禮式に水の聖別禱などあるはそれである。燒香の如きは火の拂淨から變じて聖化の式になつたのである。

聖化は又神餐によつて行はれる。神餐に於て神の神聖なる供物を人間が食して矢張り人間が聖化されるのである。特に供物が人身供犧にまで發達し、而して其供物が神の代理である事に

なれば、これを食する者は神そのものを食するのであるから聖化は頂點にまで達するのである。キリスト敎の聖餐式は取りも直さずそれである。

五、人間態への發達時代

人間態及び人間態への發達時代の觀念　ヘルデルが曾て其有名なる歷史哲學に於て人類の歷史は人間態への敎育であるといひ、人類の歷史は人間態(ヒューマニチー)に向つての進步を示してゐるとしたのである。さて人間態とは如何なる意味を有してゐるのであるか、英語のヒューマニチーはラテン語のヒーマニタスから來てゐるが、こは人間性(ヒューマニチーユアー)の意であるが、この言葉は中世紀に於てさらに人類(マンカインド)といふ意味を生じた。それ故この語には現今二つの意味が結合してゐる事になる。卽ち一つは客觀的であつて全人類の意味である。他の一つは主觀的で人間性を意味してゐる。この後の意味に於ては、人間を動物より區別する倫理的性質の完全な發達を指し、卽ち人間の價値の方面を意味するのである。さればこの方面よりヒューマニチーは人格と飜譯してもよいのである。兎に角人間態とは外面的に全人類を意味し內面的には人間性を意味してる。

然らば人間態の起原如何といふに、そは最初から人間の稟性に具つてゐるので、その稟性に

具つてゐるものが環境の刺戟を受けて開發するのである。其開發は漸次であつて、或る時代に於てのみといふ事は出來ぬ。原始時代に於ても、トーテム時代に於ても、又英雄時代に於てもそれ相應にその發達を遂げつゝあつたのである。即ち一般に人を助け人を尊むことは彼等未開人の間にも認められるのである。而して種族がさらに發達して國家を組織し、民族間の交通又は言語風俗宗教の傳播が盛んになると、それを道程として人類は人間態へ益々進むのである。而して人間態への發達時代に這つて來ると、其人間態への發達傾向が前よりも一層明瞭に認められるのである。併し人間態への時代は人間態の完成された時代ではなく、それに向つて進みつゝある一過程に過ぎないのである。カントは彼の時代を名付けて「啓蒙の時代」と稱したが、ヴントはヘルデルと共に、この時代を「人間態への發達（ヴェロプメント・ヴァー、ヒューマニチー）」時代と稱してゐるのである。この人間態への時代は即ち吾人の屬するこの時代であるから、これまでの時代程纏つてゐないのはいふまでもない。人間態への發達時代をヴントはさらに小分して次ぎの四時代にしてゐる。

(1) 世界帝國（ウォールドエンパイヤー）
(2) 世界文明（ウォールドカルチユアー）
(3) 世界宗教（ウォールドレリジオン）

(4) 世界歴史（ウォールドヒストリー）

最初世界國が現はれ、世界統一が出來ると、其結果文化の世界的交渉が起り、そこに世界文明が生ずる。而してこの世界文明は最初物質文明であるが、漸次精神文明に及ぶ。この精神文明の中、主なるものは、ヴントは人類に最も普遍的なる宗教であるとしてゐる。こゝに於て世界宗教なるものが產まれる。この世界宗教に繼いで最後に人類全體を横斷面即ち空間的に見ないで、縱斷面即ち時間的に見た全發達がある。

世界帝國　種族戰爭の結果、遂に國家が起り、國家戰爭の結果、世界帝國が興る。この世界帝國の起つた動機ともいふべきものは即ち權力慾である。個人の發達過程に於ても權力崇拜時代があるが、民族的發達の歴史にもそれがある。而してこの時代に世界帝國が發生する。所で其權力慾は一國家の權力の衝動であつて、其衝動によつて其版圖を擴張するのであるが、只それのみにては未だ世界帝國は現はれない。其の外に神話は世界帝國の發現する大なる原因である。元來神話は地上の國家組織を天上に移したもので神の國家は即ちそれである。其神の國家に於ては一神が他の諸神を征服して獨り天地の支配者となる。この神話が再び地上に取り下された時、こゝに世界帝國なるものが現れるのである。それ故君主は常に神的なものと信じられ

てゐる。ユーフラチス及びチグリス地方のバビロニア以前の國に於ても王は其像を神社に藏めて之を崇拜せしめた。エジプトに於ても彼のスヒンクスは王の面影を宿してゐるといはれてある。アレキサンダー大王は自ら人民に對して己れを崇拜せしめんとしたといふ。又ローマの皇帝デイオクレーチアヌスよりコンスタンテイヌスに至る迄みな崇拜を受けた。

右述べし如く世界帝國が起つて次第に其範圍を擴張する樣になるが、其範圍の擴大すると共に、全體の統一は益々困難になり、世界帝國も亦瓦解を來たすの止むなき狀態に立ち入るのである。バビロニヤ、アッシリア王國、アレキサンダー大王の大帝國、ローマ帝國の分烈の如きエジプトがヒクソス民族の爲めに亡ぼされたるが如きは皆其例である。近世に於てはナポレオンの全世界統一の計畫の如きも歷史上の一エピソードに過ぎない。

世界文明　世界帝國は世界文明の準備をなした。それ故世界帝國が瓦解して世界文明が現はれたのである。世界文明は始め物質文明であつて後に精神文明が現はれる。

エジプト、バビロニヤ、アッシリヤ、ペルシヤ及びローマなどの大規模の道路水道建築などの如きは其時代に於ける物質文明を物語るものであつて、其何れも皆後世のものをして驚嘆止む能はざらしむ。精神文明に於ては例へば言語及び文字が世界的になつた如きで、文字が先づ

世界的になり、次ぎに言語が世界的となつた。始め楔形文字が世界的となり、それに餘程後れてアレキサンダーの歿後ギリシヤ語が世界的となつてゐる。

かく言語が世界的となると共に世界的旅行が企てられた。アレキタンダーの印度への遠征もその一つである。ピタゴラス・ゼノホネス・ヘロドタス・ゼノホン・デモクリタス・プラトー等は皆大旅行を企てた。所謂ヘレニズムの時代になり、この旅行慾が一層著しくなり、或は活動の新舞臺を發見する爲め、或は見聞を擴めんが爲めに、世界的旅行が企てられた。併し其頃旅行の目的地ともせられしは、大低アレキサンドリヤ、ペルガモ、アゼンス及びローマの如き新興にして且つ舊來の都會であつた。

かく言語が世界的になり、又世界的旅行が企てられて、世界文明が促進せられたが、精神文明の特徴とも見るべきものは、(一)國家に對して漸次無頓着になつた事と、(二)個人の人格が尊重せられる事である。一方はコスモポリタンで他方はインヂビヂユアリスチックである。それ故この文化は世界的ではあるが一方に於ては個人主義的である。この文化の特徴はあらゆる方面に現はれて、哲學に於てはストア、エピクロス學派にこの兩方面が認められ、科學に於ても一方に普遍的なる自然法に對する興味と共に最も微細なるものに對する記述的觀察に餘念が

ない。歴史研究に於ても、一方に於て政治的發達の時代を抽象的圖式に區分をなすと同時に個人の傳記の研究もある。其他藝術に於ても劇曲に於ても、一方に世界的であると共に、他方に於ては個性が發揮せられてある。

併しこのヘレニヅムの世界文明は、その内部的瓦解と新しい民族の侵入とによつて分烈した。最初それはローマ帝國の分烈に從つてギリシャとローマとに分烈した。而して最早世界文明の意味を有しなくなつた。この世界文明の分烈は敎會の分烈にも關係を有してゐる。それ故西部敎會は薄弱なるラテン文明の殘骸を宿して居り、東部敎會はギリシャ文明の斷片を保存してゐる。併し敎會自身がかく分解すると、世界文明は全く薄弱なるものとなつてしまつた。何となれば世界文明は、政治的組織よりも永續的に宗敎に宿つてゐたからである。

所で文藝復興は現實世界に對する新文明に向つての努力である。それ故文藝復興は其名の示す如く、單に古代にあつたものが復興(レバース)したといふのでなく、新しき世界的文化を意味するのである。文藝復興は古代文藝の復興であるが、併し現はされた文明は古代とは變形せられて居る。而して世界主義と個人主義とは共に古代よりもさらに進んでゐる。彼のコロンブスの新世界發見、バスコダガマの希望岬より印度への航海、次いでマゼランが南米を宇廻して

南洋に達したのを見ても、又マルコポーロの旅行を見ても、往時ヘレニズム時代に於ける漫遊よりも、其計畫が大である事が明かである。

如斯後の時代の世界文明は特有の性質を有してゐる。其文明の基礎は、世界國ではなく世界敎會である。且つ又國家に對するインデイフエレンスの態度はなくなり、ヘレニズム時代よりも一層國家に對する興味が高まり始めてゐる。國家と敎會とは長く爭ひ、社會的衝動は新しき政治的秩序の方向に於て社會的改造に向つた。又言語に對する關係も全然異つて來た。即ち世界帝國から自然の結果として生じた世界語ではなく、各民族の精神的特性を示す各種の國語があるのである。

世界宗敎　英雄時代の最も著しき特徴は國家的宗敎の存在であつた。隨つて其時代の神は其國民を守護する神であつた。然るに世界文明の結果として國民的宗敎は遂に世界宗敎に其道を譲つたのである。

今世界宗敎にまでの道程を考へて見るに、一般人間の宗敎的動機は古代人が魔や神々を信じた動機と同樣で、病氣と死に對する經驗から起つてゐる。政治的興味が消へて後も尙ほこの二つの經驗は人間の前途を占有してゐる。それ故ヘレニズム時代に於ては醫者は特別に尊敬を受

けてゐた。これと關連して病氣平癒の神アスカラビウスの崇拜が盛んに行はれた。それよりも一層來世の幸福を主とする崇拜が盛んであつた。此等の崇拜は現在に於ける幸福と來世に於ける限り無き幸福を享けやうとする事と關係してゐる。故に此等の崇拜は形式的には、如何に相異してゐても其性質に於ては、ギリシャのデメテール、フルギャのシベレ及びホエニシャのアスタロテ崇拜と同樣である。所で英雄時代の神は超人的で、近づくべからざる神であつたが、この時代になつては人々の興味が現世的になると共に、神も著しく人間的になつてゐる。而して現世の苦難及び缺陷から救濟せられんとする救濟崇拜が當時主なる崇拜であつた。この來世救濟の宗敎は一方に於て超國民的であつて、一般人間的であると共に、他方に於ては神そのものも超人格でなく漸次人格に近くなつてゐる、即ちアンスロポモルフイックの神々が崇拜せられるのである。

佛敎と基督敎　世界宗敎の前程は右述べし如くであるが、眞の意味に於ける世界宗敎は佛敎と基督敎とである。この二大宗敎は何れも其固有の內容を有してゐるが一般的にして人類的なる傾向を有する宗敎であるといふ點に於て一致してゐる。而して兩敎何れも文化宗敎である。それ故其何れの背景にも大なる文化がある。勿論特徵は異つてゐるが、根本要素は一般に人間

的である。そも〳〵かゝる宗敎がこの時代に於て勢力を有するに至りし所以を考へて見るに、此等の宗敎の內容が他に比して勝つてゐるといふ所にのみあるのでもなく、又外部的事情、例へばコンスタンチンが基督敎を國家宗敎としたやうな、外部的事情によつたのでもなく、此等の宗敎が勢力を得たのは疑ひもなくそれに時代に適合する幾多の要素が存在してゐたからである。即ち純粹なる國家心又は人生の外部的事情から獨立した人類的宗敎に對する要求があつて、かゝる要求を此等宗敎が滿し得たからである。尙いひ換へれば、職業や、階級や、血統から、全く離れて個人の人格そのものゝ價値が尊重せられ、且つ現世の苦難より救濟せられんとする人の心に滿足を與へる事が出來るからである。前にいひし如くこの兩敎は內容に於ては、甚だ異つたものを相互に有してゐる。例へばキリスト敎は情意を主としてゐるが、佛敎は知を主としてゐる。かく根本的に相違してゐるにもかゝわらず、時代の要求を滿し得る點に於ては、即ち同樣である。而して兩敎の開祖を見ると一方は太子で、一方は賤しき大工の子即ち平民であるが、共に歷史上の人物である點に於て一致してゐる。而して英雄時代に於て神を發生したと同樣の心理作用の結果、此等歷史的人格は遂に神にまで高められた。それと同時に舊來の魔及び呪の信仰、神話的要素がこれと結合するに至つた。キリストが十字架上に死して又復

活するの物語は、植物崇拜より發生した傳說中の一度死して再び生きる神々の諸傳に於て類似點を見出し得るのである。それ故單に表はされた思想の上よりこれを見る時、基督敎の初代に於て其內に神話的觀念を結合してゐると見る事が出來るのである。キリストは固より眞實の人格であつた。其十字架上の死は、多くの者の證明する所で、其復活は弟子達の詳細報ずる所である。且つこの救世主の崇拜は、以前の密儀に於て見た如く秘密の幕に閉されてない。救の神は少數の者にのみ天を得させんとはしない。キリスト敎の天は萬民に開かれてある。富める者にも貧しき者にも虐げられる者にも平等に開かれてあるのである。それ故人の思想に於て神話的要素と如何に結合したにせよ、この歷史的事實を目前に知つた時人々は如何に感動した事であろう。特にサターナリア祭やサケア祭に於て死して又復活する神の崇拜が遊戲的となつた遺風のみを見てゐたローマ人が、キリストに於て其恐るべき、且の嚴肅なる事實を觀た時、彼等は如何ばかり感動せしめられたであらう。

兎に角キリスト敎の初代に於て吾人は神話的要素との結合を認める事が出來るのであるが、中世記に於ては、以前の異敎の魔及び呪などの信仰を結合した。今日と雖もキリスト敎の中にかゝる異敎的分子を混有してゐる事は何人にも異論はないであらう。

世界宗敎の神觀念　世界宗敎の神の觀念には最も重要なる二つの特質がある。其一つは超人的の神の觀念で、他の一つは人となつた神である。佛敎に於ても基督敎に於ても、其發生する當時は超人格的の神觀念が其頃の哲學的空氣の中に漂ふてゐた。キリスト敎が生れる以前ギリシャ哲學に於てプラトンの善の觀念、アリストテレスのヌース、ストア學派のジウス、エピクロスの神の觀念などは皆古來の人格的神々の觀念が變じて超人格若くは人格以下のものとなつてゐた。キリスト敎そのものにも神は全知全能遍在の神であるとしてゐる。佛敎に於てもこれと全く同樣で古代の神々の人格は失はれ永久不變の性質を有する超人格的の梵に移つてゐた。而して佛敎そのものも人格的の神觀は缺如してゐた。如斯基督敎も佛敎も其神は人格的でなく超人格的となり、同時に又超世界的となつてゐた故、かゝる神はこの時代に到底崇拜の對象たり得なかつた。それ故その代りに佛陀なり基督なりは人間であつて、而かも神にまで高められ、直接崇拜の對象となつたのである。次ぎに第二の特徵は人となつた神の觀念である。即ち超人格的の神が人格的の神によつて代表せられる事である。これはキリスト敎に於て最も明かに認められる。キリストは一方に於て神の代表者であつて即ち神のインカーテートしたものであるが、他の一方に於ては人類の代表者である。彼は神であると同時に人である。彼は神性と

人性とを兼有してゐる。

世界歴史　最後に世界といふ概念は歴史の概念と結合してこゝに世界歴史なるものを生ずるのである。國家時代には歴史的傳承は其國家に限られてゐた。然るに世界國の出現すると共に世界歴史が準備せられ、繼いで世界文明に至つてこれが完成を見た。更らに世界宗教に至りて人類の觀念が擴大せられ、佛教が東亞の諸民族を宗教的の一大團體に統一し、基督教に於ても亦四海同胞を主張した。かくして世界史の觀念が築かれるに至つたのであるが、其觀念は全々宗教的である。而して歴史そのものは神意の發現であると信じられると、歴史は一つの天啓であり攝理の記録であることゝなる。

第九章　崇拜の對象

序說　崇拜の對象を研究する事は宗教研究者に取りて甚だ大切なことである。何故なれば崇拜の對象は常に宗教思想の中心になつてゐるからである。所で宗教學者の間に輓近數十年間論じられてゐる一つの事は神の觀念（即ち崇拜の對象）を缺いでゐる宗教は宗教として果して成立し得るやといふ事である。これは一見奇妙に感じられるのであるが、又其中には大に理も存するのである。デュルケームの如きは「神又は精靈の觀念なき、或は少くとも斯る觀念が第二次的となり、小さき役目をなしてゐる大宗教がある、佛教の如きは即ちそれである」といふてゐる（「宗教生活の原始的形式」三〇頁）。成る程佛教の如きは其根本に於て無神教である。併し實際に於て今日佛教信者は對象なき信仰を有してゐるのではなく、明かなる對象を有してゐる事はいふまでもない事である。元來宗教心は何等かの對象觀念を構成すべき傾向を有してゐるものであるといふ事は、これ亦言を費やすに及ばぬと思ふ。問題は對象觀念が如何なる心理的過程を取つて現はれたかといふ點にある。吾人は心理的立脚地より見て、神が客觀的に人間の精神より獨立して存在してゐるか否かは考へるに及ばぬ。吾人は人間の精神に如何にして神の

如き崇拜の對象觀念が構成されたかを見ればそれでよいのである。神は固より人間が直接經驗して得たものではない。聖書に「未だ神を見しものなし」とあるが如く、神なる對象は經驗によつて得たものではない。即ち神は經驗した對象ではない。これは信賴、信仰、敬虔、畏れなどの心理に適合した對象である。いひ換へるなら神の觀念は信賴、信仰、敬虔、畏れなどが生み出したものである。神を認めて、それからそれらの心が生じたのではない。それらの心があつたから神の觀念が生じたのである。

神は永久に雲の背後にかくれてゐる。併し其經驗不可能のものに接觸せん爲め人は種々なる宗教的行爲をなした。而して斯くする事によりて人は滿足あり救助ある事を感じた。而してそこに人は感覺によりて見出す事の出來ぬ、又知識によりて把捉する事の出來ぬものを經驗したのである。

神の觀念を構成すべき準備的觀念　最初對象は吾人が今日いふが如き神ではなかつた。神の觀念は餘程後になつて構成されたもので、これはヴントによれば民族の發達史上第三期即ち英雄時代に出來たものである。即ち魔の信仰に英雄的要素が加はりて構成されたものであるといふのである。今日吾人が神といへば其中には人格的の要素が含められて居り、而して個人性を

有してゐるものである。併し最初から人格的要素を含んで居り、又個人性を有してゐたものと勿論考へる事は出來ぬ。それで、それは個人性を具へてない極めて非人格的な一種神祕的能力の觀念に過ぎなかつたのである。例へば北米インディアン族の中にあるマニツー、ワコンダ、オレンダ、クキニの如き觀念、又メラネシヤ族のマナの觀念の如きは皆それである。アウストラリヤのインチチユーマの儀式などにも一種の神祕的能力に對する信仰が現はれてゐる。古代ローマ人のヌミナの思想もさうである。ギリシヤ人の宗教には早くより人格的色彩が現はれてゐるといはれてゐるが、ファーネルといふ人のいふ所によると、原始的ギリシヤに於ては山や石や空が皆有情のものと考へられ、それらが人間を助けたり害を加へたりする能力を有してゐると思はれ、其能力が去だ人格的のものとは考へられてなかつたといふ事である。古代セミチックの宗教を見ても種々神聖なるものや神聖なる場所があつたが、それらは神や人格的の靈とは無關係に考へられてゐた（ロバートソン・スミス「セス族の宗教」一五五頁參考）。

斯くの如く或る不可思議なる能力が自然現象の根柢に働いてゐるといふ思想は廣く種々なる人種に信じられてゐたのである。我々がいふ所の神の觀念の如きは人類が最初から所有してゐた觀念ではない。人類は全く神の觀念なしに出發して、歷史の中途遂に神の觀念を得るに至つ

たのである。といふても神の觀念に至る準備觀念は早くから有してゐたのである。それは即ち前に述べしマナの如き、或は魔の如き觀念である。コー教授は曰く「神の觀念はマナ及び諸靈にまで、さかのぼるのであつて、此等の觀念と繼續的である。而して此等の觀念は又もつと初歩的の觀念と繼續的である」と、(「宗教心理」九十六頁)。此等の觀念には未だ人格的色彩が現はれてゐないと同時に又明かなる個性が現はれてゐない。後に現はれた神又は神々の觀念には人間の如く個性があり、又は人間の如き性格がある。而して割合に高められてゐる。人々は其神に祈禱を捧げ又其神々と比較的に永久的なる種々なる社會的協定(例へば誓とか契約等の如きもの)によりて關係をなしてゐる。併し魔とかマナの如き觀念にはそれがない。吾人は神の觀念の發達を考へる時此等の觀念が準備觀念としてあつた事を承認して置かなくてはならぬ。

斯る觀念を産み出す條件　然らば次ぎに考ふべき事は此の觀念の現はれた條件は何であつたのであらうかといふ事である。かゝる觀念の現はれる動機は那邊にあつたか、これ心理學上最も興味ある點である。キング博士は幼兒が不可思議なるもの、驚くべきものに對して現はす最初の態度は生物學的の意味に於ける注視 (take care, watch out) の態度であるといひ、野蠻人も最初其身邊に現はれる驚くべき事物に對して矢張りこの (watch out) の態度を取つたといふてゐ

る。而して彼は子供が人格的の能力を無生物に附して考へる事は世ずれた成人から無意識的に暗示を受けたからであるといふてゐる(「宗教の發達」一五七、八頁)。人間が一つの神祕的なる能力の存在を認めそれにマナとかワコンダなどの名稱を付するに至るは餘程末の事で、何も名稱を附せずして只情緒的態度を現はして居つた時代があつた事は想像するに難くない。固より驚異の感情が單獨に崇拜の對象を生み出すに至つたとは考へる事は出來ぬ。他の多くの者が云へる如く恐怖の感情なども崇拜の對象の觀念を生み出す有力なる要素であつたに相違ない。人間は元來生活感情を有してゐる。故に其生活を不安ならしめんとする事物に對しては恐怖の感を抱き、それより逃走せんとし、更らに自己を救助する爲めに或るものを想像して其れに信頼せんとするのである。

タイタニックが沈没する其瞬間に於て乘客は如何なる考へを持つてゐたかと云ふ事は其當時のアウトルックに報道されてゐるが、其れを見ると彼等の心理は此の不意の一大事の爲めに少しも亂されず、彼等は仰いでビジョンの境涯に心を走せ、自己中心の苦しみは或る神秘の意味に解せられ、暫らくは如何にも殘酷と思はれた宇宙的實在者によりて、彼等は凡て一つの者となつた。彼等は相互に一體となつたのでなく其實在者によりて一體にせられたのであつた。(ア

ウトルック一九一二年四月號）

かゝる事は矢張り吾人が原始人の崇拜の對象觀念を生み出すプロセッスを考究するのに大なる助けとなるものである。即ち自己の生命が危くなるとか、生活上に脅迫を感ぜしむるもの、又不安を與ふるものある場合人間の情緒は甚だしく興奮せられる。而して其時或るビジョンを見るのである。その後は凡ての注意が其ビジョンの方に向けられるのである。而してそこに想像が作用して種々なる心像が描かれる事となる。

マックス・ミューラーは宗教の中に「知るべからざるものを知らんとし。云ふべからざるものを云はんとする努力（ストラッグル）、無限を求望する事」（「宗教學概論」一八頁）があると云ふが宗教の最根底には右に云へる如き無意識的の衝動があつて、其衝動の下に凡ての宗教的觀念が築かれるものである。して見ればミューラーの觀察せるものよりも、もつとバイタルなものがある事を認めざるを得ないのである。宗教の起原を知的基礎たる好奇心に置くなら謬である。

ヴントは神の觀念は英雄の觀念と魔の觀念とが合して成つたもので原始時代に於て未だ神の觀念なく魔の觀念があつたのみであるといふてゐる。更らに彼れは原始人に魔の觀念の現はれた原因を病氣と死に對する恐怖であるとした。即ち彼は原始人の心に魔の觀念を生み出す源泉

は自然現象でなく人生現象、殊に死と病氣とであつたと說いてゐるのである。併し自然現象が神の觀念を構成する上に如何に影響を及ぼしてゐるかは山川、草木、月日、星晨の如き自然的要素が神の觀念の中に豐かに含まれてゐる所を見ても直ちに解る事である。されば人生現象はヴントが云へる如く恐らく魔の觀念の最も原始的の要素となつたのであらうが、自然現象は其觀念を廣くし且つ其觀念の內容を豐かにする上に於て大なる働きをなした事は否定する事は出來ぬ。信賴の感情は宗教意識の內容に於て最も大切なるものと考へられ、又基礎的なるものと目されてゐるが此の感情が此の觀念の內容の一部を占めるには自然現象も少からず影響を及ぼしてゐる事と思はれる。ジョン、フイスクは曰く「有神的觀念の中で最も原始的要素と見るべきものは卽ち我以外の或る者に信賴する念である。我等の世界は我等の生命を支配して我等に服從の外なからしむる勢力を以つて成立してゐる」と。

アニミズム　宗教の起原は從來一般にアニミズムの中にあると思はれてあつた。確かにアニミズムは進化の或る階段に於て一般に存在してゐたに相違ない。而して此れは宗教進化の重要なる部分を示してゐるものと思はれる。所で問題は進化の何れの部分に此のアニミズムがあつたかと云ふ事である。アニミズムは云ふまでもなく神の觀念が形造られる上に大なる貢獻をな

したであらう。併しアニミズムそのものは未だ宗教ではない。のみならずアニミズムは人類の思想の最も原始的の形式ではない。その中には身體と精靈との區別が既に立てられてゐるのであるが、かゝる思想は餘程後世の思想であらねばならぬ。それ故アニミズムが宗教進化の一方面を表はしてゐるにしても所謂アニミズム以前の時代がなけらねばならぬ事を認めざるを得ない。このアニミズム以前の時代（プレアニミスチックエージ）に宗教の起原を求めんとしたのはマレットである。

このアニミズム以前の時代に於ては人は物質と精神との區別を未だ立てず、靈魂と身體との區別を立てる事が出來なかつた。只漠然宇宙も人間も凡て同樣に生きたものと思惟してゐたものと思ふの外はない。それは今日吾人が幼兒の生活に見出す心理現象と同樣に見て置いてよいと思ふ。所で渾純たるこの時代が更らに一歩を進めるなら所謂アニミズムの時代になるのであるが。これが宗教的色彩を帶ぶる爲めにはこの觀念に特殊なる動機が加はらなければならぬ。その特殊の動機といふのは即ち生活感情を中心として現はれる種々なる感情である。驚き、怖れ、信賴、滿足等の如きは凡てそれである。かくして始めて崇拜の對象が想像される事になるのである。

超自然的觀念　一般に凡ての宗教の特質には超自然的觀念があるといふ事であるが原始人の

考への中に超自然的の考へがあつたと思はれぬ。超自然といへば神秘の世界である。知るべからざる又理解し能はざる世界である。從來は哲學上に於ても神學上に於ても所謂アプリオリ論法が凡ての問題を解釋する最も優越なる方法であると見られてゐた。それ故宗教といへば直ちに神秘的超自然的な觀念の上に成立してゐるものと考へたのである。併し吾人はかゝる形而上學的方法を以つて宗教を説明する事は無意味である。吾人はどこまでも具體的實驗的に説明を要求する。而してこの具體的實驗的の説明がなけらねば理性の滿足は到底得られないのである。これは現代人にある著しい傾向である。

超自然といふ思想は今日の我々には理解し得られるが原始人間には、これが諒解し得られしとは思はれない。或るものが超自然的であるといふには事物の自然的法則の存在する事を先づ認めてゐる筈である。即ちいひ換へるなら宇宙の諸現象は法則と呼ぶ所の必然的關係によつて結び合はされてあるといふ考へが出來てゐなくてはならぬ。かゝる思想が出來て始めてこの宇宙の法則に反するものは當然自然の外部にあるもの、自然を超越せるものとの思想が現はれるのである。つまり理性が或る程度まで發達しなければ、かゝる思想は現はれるものではない。それ故かゝる思想は人類初期の思想には到底現はれて來ないのである。それ故今日我々のいふ

が如き奇夢の觀念は現はれなかつた。彼等には時々起る奇跡的な事物は美麗なるもの、稀有なるもの、恐ろしきものなどで、彼等にはそれらは驚愕、奇異の感を惹起するも、それらが神秘界の閃きであるとも、又彼等の理性の徹し能はざるものとも思はれなかつたのである。

吾人は兒童の心理を研究して、そこに所謂神秘の觀念のある事を認めない。これが現はれるのは青年期である。少なくとも十一歳頃から後に漸やく現はれそめるのである。（田中氏五五頁）。

靈魂觀念の發達と崇拜の對象の發達　原始時代に於ては病氣とか、又は死の如き痛ましき人生現象より魔の信仰が現はれ、それと共に靈魂思想の最初の形が現はれた。併しこの靈魂思想の最も原始的なものはヴントの言葉を以ていへば身體魂（コーポリアル、ソール）なるものである。靈魂が身體全體に宿つてゐると考へ死後と雖も靈魂は死體に宿ると信じて死體より逃げ出したのは卽ち身體魂の信仰である。更らに進むと身體全體に靈魂が宿るといふ思想に加へて身體の諸部分にも宿るといふ思想が現はれる。血液、腎臟、生殖器などを皆靈魂の宿る所と考へた。身體魂の外にさらに遊離魂も發達した。遊離魂といふのは靈魂が身體より遊離して存在してゐるとの謂で、氣息魂、影像魂の如きはそれである。ヘブライ人の神話に神が「土の塵を以

て人を造り生氣（いのちのいき）を其鼻に噓入たまへり人卽ち生靈となりぬ」（創造記二〇七）といふのは氣息魂の思想である。原始人は人が死すれば氣息の止まる事から氣息を靈魂と考へたのであらう。原始人は人體に伴へる影像を見、又は水に己れの面の影の映るのを見、又夢に場所を異にしてゐる者を見、夜でも晝でも死人のまぼろしを見る時は、そこに身體を離れて靈魂の存在を信ずる樣になる。此れが卽ち影像魂の思想である。かく靈魂が人體より離れて存在するとの思想が表はれると共に靈魂が一種動いてゐるものと考へ、而して聯想作用によりて靈魂を鳥とか蛇の如き動物と見なす樣になる。而して靈魂動物の觀念が生じた。更らに植物又は無生物（木石の如きもの）をも靈の宿るものと考へる樣になり、こゝに種々なる動物植物又は木石が崇拜の對象と見做される樣になつた。斯くしてトーテム崇拜、祖先崇拜、呪物崇拜などが現はれた。又それと共に種々なる崇拜行爲も表はれる樣になつた。神像を作りて崇拜するが如きはヴントによれば呪物崇拜に起原してゐるといふてゐる。「神なる存在者は諸靈崇拜から起つた、而して疑もなく肉體々離れた靈の概念が出來て、それが凡て發達した所の初觀念の一部となつてゐる」（コー「宗教心理學」九十七頁）

斯くの如く彼等の人生觀の發達は彼等の宇宙觀念と合して玆に宗教發達を捉進せしめた。而

して崇拜の對象も彼等の人生觀の發達と共に益々明確な意識に表はれるに至つたのである。此れまで單に不可思議なる一種の能力と意識されてゐたものは次第に人格的の色彩を帶ぶるに至つたのである。

一神說と多神說　神の觀念に就いて二ッの相異つた說がある。其の一ッは一神敎より出發したと見るのと、他の一ッは多神敎より出發したと見るのとである。一神說は古い神學者の多く取つて居る說であるが、最近にもシュミットの如き人種學者が此の說を取つてゐる。彼は英國の研究家マンといふ人の思想を受けついで、原始人は一神的信仰を有してゐたといふてゐる。マンはアンダマン族を研究して確かに同族が一神的觀念を有してゐると結論してゐる。併しヴントは此の說に反對してゐる。而して此の說を評して、一體嚴密なる意味に於ける一神敎は哲學にのみ存立するものである故、純粹なる一神的信仰は恐らく何處にも存立しなかつた。イスラエルに於ても其國家神ヤーウエは嚴密なる一神敎の意味に於ける唯一の神ではなかつた。モーセの十誡に「汝我面の前に我の外何物をも神とするなかれ」とあるが、此れはヤーウエ以外に他の神々の存在に反對してゐるのではない。却つてヤーウエ以外に他の神々の存在を承認してゐるのであると（「民族心理學原論」三五四頁）。

若し一神敎が出發點でないとすれば然らば多神敎であるかといふに之れにもヴントは反對してゐる。多神說をなすものは餘りに天然現象特に天上現象を神の發生に就いて力說してゐる。ヴントは勿論天然現象が神の發生の一要素となつて來る事は認めてゐる。併し多神說をなす者の如く之れを主なる要素として力說しない。寧ろ天然現象よりも人世現象地上現象を主なる要素とする。而して原始人の中には天上神話の如きものは見出されぬといふてゐる。ギリシヤ神話にあるヘリオス神は其名が既に太陽を意味してゐるが、併し其中には人的要素が其根抵にある。其他ゼウスにしてもアポロにしても皆同樣であるといふてゐる。

神觀念の構成　要するに神の觀念の出發する所は一神敎でもなく多神敎でもない。余はヴントの說を肯定して矢張り魔の觀念が基礎となり、其れが後に至りて發生した英雄の觀念と結合して遂に神の發生を見るに至つたものと考へるのである。崇拜の對象はかくの如くして英雄的人格的要素を類化して神の觀念を形づくるに至つたのであるが、此の時になると英雄そのものが崇拜の對象と見られ、其れを中心にして崇拜行爲が行はれる事も現はれた。我國に於る英雄崇拜などは其の最も著しき例である。兒童心理の上より考へるなら少年少女期は英雄崇拜の最も盛なる時代で此の時期に於て以前の咒的信仰、魔の信仰が英雄の人格によりて著しく類化せ

られるのである。

かくの如く以前の魔の信仰が基礎となりて神の觀念が生じたのであるが、自然現象其もの、及び人生現象其ものゝ多樣なる所から、又人間の要求の多數なる所から多神敎も對象觀念の發達のプロセッスに於て現はれたのである。而して神の國家なるものが形造られたのであるが地上の國家觀念を神の世界に投射して想像した爲め一つの神が他の下級なる神々を統治するといふ思想も表はれた。此れはギリシャ及びバビロンなどの合祭廟（パンテオン）に最も明かに顯はれてゐる。此の合祭廟は將來の唯一神敎的觀念に至る傾向を表はしてゐるものと思はれる。

唯一神敎　唯一神敎が最も完全なる發達をなした例はヘブライ宗敎に認める事が出來る。イスラエル民族は始め神ヤーウエを單にイスラエルの神とのみ考へて居つたが、豫言者時代に至りヤーウエはイスラエルのみの神でなく、外國をも指導し給ふ神と考へる樣になつた。彼等は周圍の諸國と關係し、其間に生ずる諸種の事情はヤーウエを以つて最も有力なる神と考へる事は出來なくなり、ヤーウエを正義の神と考へ、而して此の正義の神ヤーウエは全世界を支配するものと考へたのである。此の觀念は第二イザヤに至りて一段の進歩を遂げた。而して唯一神敎は完全に築かれた。ヤーウエは世界の創造者であり、又凡てのものゝ支配者である。（エレミ

ヤ記十章十二節以下、イザヤ書四十章二十六節四十二章五節）それ故ヤーウエは全地の神と稱へらるべきものである。（イザヤ書五十四〇五）。彼は未來を誤りなく語る事が出來る（四十二〇九、四十八〇三、五）。彼は世の始めより終りまで語る事が出來る（四十六〇十）。彼は人の運命を導きペルシャのサイロスを立てゝ彼自身の目的を果さしめた（四十一〇二、四十五〇一）。彼のみ世界人類の救主である。（四十三〇十一）。彼のみ神であつて他の神は神ではない（四十四〇六四十三〇十、十一四十五〇六、十四、十八）と考へた。かくの如き崇高なる唯一神敎的觀念が愈々國民的限界を脱して神を宇宙の主宰者、萬民の父であると云ひ弘めるに至つたのはイエス及びポウロに至つてからである。新約聖書に包容せられてゐる神觀は實に人類が初めて到達せし完全なる唯一神敎である。

唯一神敎の現はれるのは勿論理性的發達と共に生ずる概括作用によるのであるが、政治的組織の影響が大いにある事も認めなければならぬ。ガロウエーは「多神敎より唯一神敎に進む歴史的過程はモナーキズム（Monarchism）であつた」といふてゐる。（「宗敎哲學の研究」一三七頁）コーは「唯一神敎は大なる政治的意識が生ずる迄現はれるものではない」といふてゐる。（宗敎心理一〇九頁）。ヘブライ人の國民的傲慢は浮囚によりて打ち壞はされた。而して其國民

的神の觀念に或る變化を與へた。或る豫言者等は其政治的概念を甚だしく擴大した。同時にヤーウエの意志の働く範圍を甚だ廣く考へるに至つた。而してヤーウエは單にイスラエル一國民の神であるのみでなく諸國民の神であると考へる樣になつた。かくして前に述べし如く唯一神教の思想がヘブライ人の間に顯著なる發達をなしたのである。

崇拜の對象を構成する諸原因　予は最後に崇拜の對象を構成し又之れを發達せしめる原因に就いて少しく考へて置きたいと思ふ。

(1)人生現象。崇拜の對象を生起せしむる根本的原因となるものはヴントがいへる如く人生現象(病氣死等)である。此の人生現象より人は靈の存在を信ずる樣になつたのである。或る者は人生現象よりも自然現象に主もなる地位を與へて主張してゐるけれども、崇拜の對象を生起する根本的原因とも見るべきものは矢張り人生現象であると思ふ。南アメリカに於ける英領ギアナの土人が或る時出でゝ巨大なる奇岩を見た。其後間もなく、不祥事が彼の身上に起つた。處が彼は其不祥事の起つたのは彼の奇岩に原因してゐると考へた。此れなどは明かに人生現象が元で自然現象は後である。即ち自分の身上に生じた不祥事があつて、聯想的に前日見た奇岩を靈視するに至つたのである。

(2)自然現象。次ぎに自然現象であるが、古來種々なる神の觀念が自然及び自然現象と結び付いてゐる所を以て見ても自然現象が崇拜の對象を構成し又發達せしめる主要なる原因となつてゐる事は否定し能はざる事實である。而して自然及び自然現象は崇拜の對象其ものとさへなつた。太陽や嵐や山や川や、及び岩石植物動物などが崇拜の對象とせられてゐるのは即ちそれである。かくの如く自然現象は崇拜の對象となつたのみでなく、對象の性質をも決定した。インドの神々は恐怖驚異の感情に基いて而して極めて神秘的であるが、ギリシャの神々は其れに反して極めて人間的に表はされてゐる。其相異を生ぜしめた原因は即ち自然的特徴にあるのである。即ちギリシャの自然は狹小で、インドの自然は宏大無邊である。夫れ故インドの自然は恐怖驚異の情を喚起し神秘の感を抱かしめる。其れに反しギリシャの自然は斯る感を與へる事は極めて薄弱である。又世界に於て最も大なる唯一神教と稱せられてゐるものは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教であるが、其何れもセム民族に起原してゐる。而してアラビヤの砂漠の自然的空氣の中に養はれた事を思へば、之れ又自然の感化の偉大なる事を敎へられるのである。

(3)社會的影響。宗教の起原を人間の社會心の中に求めるのは近代に於ける一大思潮である。ヂ

ユルケームは宗教の起原を團體によりて形式されたトーテミズムにありとしてゐる。而して彼は宗教意識の特性を信仰と儀式の二方面から考へ、信仰の性質として淨と穢との意識となし、宗教を藝術と區別する爲めに教會といふ社會制度を以て制限してゐる。(「宗教生活の初代形式」三十九—四十七頁)。ユームスの如きも、これまで度々引照した如く宗教の起原を社會意識の中にあるとしてゐる。確かに宗教發達史上社會的影響の著しきものがあつた。特に初代に於ては社會的影響が大であつた。初代に於ては個人が如何に斬新なる思想を提唱しても、若し社會が又は團體がそれを承認せなかつたなら何等の影響を人々に與へる事は出來なかつたのである。社會制度の發達も亦對象觀念の進歩に大なる影響を與へた。自然神教の神觀念に於て最も顯著なる思想はオーソリチーの觀念であるが、此のオーソリチーの觀念は社會制度と密接なる關係を有してゐる。家族神、種族神、國民神などは皆此のオーソリチーの漸次發達したものである。唯一神教の現はれるには政治的組織の影響が著しき事に就いては既に述べて置いた如くである。神が國民のオーソリチーとして仰がれるに至ると其神々の統治下にある社會及び政治狀態の變遷と共に神觀念は變遷するのである。又時代思潮が神觀念に影響を及ぼす事は少々でない。キリストが或る時代は女性的に、或る時代は男性的に表現されるのも、或は又

或る時代は悲觀的に或る時代は樂觀的な容貌に美術家が描寫してゐるが如きは時代思潮が神觀念に影響する事の顯著なる事を示すものである。

(4)經濟的思想の影響。宗教意識は價値意識の上に築かれた事はキングなどの力說してゐる所である。而して彼は宗教的信念及び宗教的實行の一切を經濟思想を以て解釋せんとした。ロバートソン・スミスの如きは古代セム族の宗教的儀式及び實行の多くは食物を獲る活動の發展したものである事を「セム族の宗教」の中に述べてゐる。原始人は種々なる動植物を神靈視したが、其れを神靈視した理由は食物又は保護を受ける爲めであつた。アフリカの土人がナイル河を崇拜したのも矢張り土人の經濟思想からであつた。イスラエルの神ヤーウエは或る時は軍神であり、又或る時代は農業の神であつた。斯くの如く神は人間の要求の變遷と共に變遷した。

要するに崇拜の對象は初代より人間の價値意識の中に生起し、而して經濟思想と共に變遷するものである事は明かなる事實である。

第十章　祈禱の心理

一　序　說

祈禱は宗教といふ觀念の內容に於て對象の觀念と等しく甚だ大切なるものである。コーは「祈禱の歷史と其心理は殆んど宗教の歷史と其心理に等しきものである、何となれば宗教は生活の價値の燒點に關して居り、而して祈禱は其價値の燒點を言葉にいひ表したものであるからである、少くとも思ひ出したものである。」と（「成人の宗教」三〇二頁）

されば祈禱の心理的發達を考究するは宗教心理研究者にとりて最も重要なる事であると同時に最も興味ある事とせなければならぬ。

二　祈禱の發達

祈禱の最も進んだものに於ては神との靈交（コンミュニオンウイズゴット）といふ意味を有してゐるが、其本來の意味に於ては何か自己の要求する所のものを不可思議なる方法によりて求めんとするに外ならぬ。而し

てキリスト教徒は其不幸の極みに於ても「我心の儘をなさんとするに非ずみ心の儘に任せたまへ」(太二十六〇三十九)とイエスがゲッセマネの園に於てなせし祈を標準として祈るのであつて、そこには神に絶對服從の態度が最も顯著に表はれてゐるが、原始的の祈に於ては服從でなく、命令的態度のみが表はれてゐる。野蠻人が己れに對して充分の好意を示さゞる對象を擊つが如きはそれである。此の二種は祈禱の發達の歴史に於ける兩極端を示したものであるが尙其發達の過程を詳細に考究する事は更らに吾人に興味を與へる事と思ふ。

柳原文學士は祈禱の發達を次ぎの如き四段階に見てゐる。

第一、精靈崇拜(アニミズム)時代の祈禱、此の時代の祈禱は呪文(スペル又はチャーム)に似てゐる。

第二、第二段階に進めば祈禱が所謂哀訴又は請願(ペチション)の形を取るに至る。

第三、此段階に進めば所謂請願なるものが道德的に聖化される。

第四、最後に請願の外に神との靈交(コンミュニオン・ウイズゴット)と云ふ新しき意義が加はつて來る。(「神學研究」十ノ三)

祈禱の起原　而して、柳原氏は祈禱の起原は精靈崇拜に源を發してゐるとし、精靈の存在を信ずる前に祈禱が始まつたとは如何にしても考へる事は出來ないといふてゐる。つまり祈禱は其性質上何者か自己の語る所を聞く事の出來る或存在を豫想してゐるものである故、祈禱を捧

げるからには、其れをとりなす對象が、假令茫漠たるものにせよ、何か自分の心靈とよく似た存在者が祈る者の心に意識されてなければならぬといふのである。併し祈禱の最も初發的なものに於ては對象觀念が明かに表はれてゐない。例へばアフリカのカフヒルの酋長が敵に勝たんとする呪の儀式に於て、先づ酋長が身を清め容器と攪亂器とを持ち、其内に藥を入れて「我は我が敵に勝ちつゝあり、我は實に敵に勝てり、敵は我が容器の中にあり、彼は征服されたり、我は彼を蹂躙しつゝあり、我は今敵に勝ちつゝあり、彼は事實我が呪によりて既に殺されたり、我は我が容器の攪亂によりてこれを見たり」といふが如き、又矢張りカフヒルの或る女等が其見失つた牛を探しに行く時

「彼をして來らせよ、彼をして來らせよ、我等は彼を呼べり、
　我等の牝牛、彼をして來らせよ、我等は彼を呼べり。
　彼を我れに來らせよ、さらば彼を來らせよ、
　我等が牝牛、彼を來らせよ、我等は彼を呼べり」。

といふが如き皆一種の呪であつて、其所には對象觀念が出て居らぬ。かゝる例は野蠻人の收護の祝に於ける歌、戰士の歌などに多く見る事が出來る。今日でも種々なる歌にそれが表はれて

ゐる。特に或る地方の子供が土筆（ツクシ）を採る時

「法師誰れの子、杉菜の嫁の子、一本法師出んもの、親子三人子を連れて、出るもんじや、出るもんじや」

と歌ひながらつく〳〵法師を探し歩くのは最も原始的で呪的の意味がある。或は又子供が

「あーめ（雨）あーめやんでくれ、あしたあてんきになつてくれ」

といふが如きものゝ中にも幾分が呪的な意味がある樣に思はれる。兎に角此等は即ち呪文（スペル）といふものである。これらのスペルは子供は何かする時、例へば人形の繪でも書く時獨語に、「今人形を書くのよ」といふてゐる。これは自己の行爲を言葉で叙述してゐるのであるが、又一方より見ればかく叙述するのみでなく、そうする事によりて其行動を有效ならしめる助けとされてゐるのである。斯る極めて簡單なるものから進んで右に擧げた樣な呪文が現はれるのである。マレットによるとスペルは種々なる魔術的行爲に伴ふ叙述に起原してゐるといふてゐる。所でこの呪文が祈禱の起原となつたかどうかといふ事に就いては種々議論のある事であるが、併し吾人は呪文を以て祈禱の起原と見て何の差支もないと思ふ。只問題となる點は呪文が宗教的祈禱に變遷するプロセスが連續的成長的であるか、或は呪文によりて願望を到底滿す事が出來な

いと知つて、呪文を捨て、他の希求的手段の祈禱に移つたかといふ點である。プラットは「呪文はより單なる意志の射出は常に望む所の目的を果する事は出來ぬといふ確信を生ずるに至り、失望の經驗が生じた時、而して又魔術者が其魔術的行爲に使用する器物或はシンボルを人格化するに至りし時、其時命令的は希求的になり、而して呪文は祈禱となる」と（「宗教意識」三百十一頁）。而してプラットは祈禱が呪文から來たといふ事に就いては善い理由があるのではなく、呪文に失望したものが祈禱をなす樣になつたのであるといふてゐる（三百十二頁）。何れにしても吾人は心理的にいふなら、呪文より祈禱が發達したといふて尠しも差支ないと思ふ。呪文には對象觀念は明かに出てゐない。對象よりも常に欲求する目的物が明かに出てゐる。祈禱の進んだものに於ては、對象觀念が最も明かな場合が多いが、原始的のもの、特に呪文などにはこれが殆んど出てゐないのである。つまり對象は彼等に取りてはどうでもよかつたのである。彼等に取つては自己の欲求が滿されさへすればそれでよかつたのである。ニユカレドニアン族が太陽の熱がモツト增す樣にと、火を盛んに燃やす行事をなす其時「太陽よ、汝がモツト熱く熱せん爲めに、吾此くの如くなす」といふ。これは明かに呪文で、これなどには要求する目的物は明かであるが、それを誰に對して要求してゐるのか明かでない。我國で現今でも行はれてゐ

る雨乞などの如きもさうである。

呪願　右に述べし如く祈禱の起原は呪文にあるものと思はれる。これが稍進んで呪願の如きものとなるのである。呪願には呪文よりも對象觀念が比較的明かになつてゐる。併し祈禱の原始的の形式が全く呪的であつた事は多くの者の認めてゐる處である。ヴントは祈禱の最も原始的のものは呪願（コンジュレーション）であるといふてゐる」（四二七頁英譯）。フアネルは其著「宗教の進化」中に「原始人は成程吾々が祈禱すると同じ方法を以て禱することもあるが、時には彼等の周圍にありと信じて居る精靈に對し呼び掛ける方法たる魔術又は呪文を彼等の神に應用する事を敢てするものである」と。更にタイラー教授も其「原始文化」の中に「原始人の祈禱はいつもメスメリズム的呪念的の調子を帶びてゐる（柳原氏の論文より）。といふてゐる。この呪的の祈は其性質が精靈に對し命令的で又畏壓的である。或る者はこの呪的祈願の方法を精靈に對する催眠術又はメスメリズムであるといふてゐる。或る意味に於て確かにさうであらう。タイラー博士は支那人に就いて述べて曰く「支那人は其偶像を打つたり塵埃の中を曳きずり廻つたりする、併して願掛けが聽かれたならそれを又元の所へ安置して謝罪をする、而して着物を獻じますと誓ふのである」と。日本などでも或る地方では雨乞の時神の宮を舁ぎ廻り、それを池の中に投げ

込み、彼等の願が聽かれるなら、それを再び引き出して元の所へ安置せしめる風習があるといふ。かゝる畏壓的命令的な祈願の仕方は何れの國でも其例が決して少なくない。神靈が若し自己に充分の好意を表はさない場合、その崇拜物を擊つが如きは殆んど彼等の習慣であつた如く見へる。それと云ふのは彼等は祈るべき信仰の對象に餘り注意せないで、祈るべきものに重きを置いて居つたからである。それ故神の意志は伺ふ必要はないと思つて居たものと見へる。されば初代人の祈禱は單に欲望の表現に過ぎなかつたのである。原始人も彼等が信じて居つた神靈に物を捧げた。併しそれはサバチエーがいへる如く我々が神に物を獻げる時の樣な高尚な意味ではなくして神靈に對する一つの賄賂とも見るべきものであつたのである。確かに彼等の祈願の原則とも見るべきものは「我が與ふるは汝をして與へしめん爲なり」であつた。つまりいはゞ商賣的であつた。併したとひ賄賂の如き意味に於てでも、兎に角神靈に或る物を捧げるといふ中には祈禱に一歩進んだ意味が加はつた事を認めるのである。即ち哀願（サップリケーション）的の意味が加はつてゐるのである。併しその中には矢張り未だ命令的畏壓的な意味が未だ全く拔けてない。所で此所に至りて祈禱は幾分か進歩したものと認める事が出來る。

吾人は今日兒童を研究して其生活の中に矢張り同樣な經路のある事を見るのである。子供は

最初極めて利己的であつて、自己の要求を滿す爲めに常に周圍に命令的態度を持つてゐる。何か子供が要求して來た時にそれを拒絶するなら、直ちに泣きながら手を上げて擊つ事が屢々ある。それは野蠻人の祈願と同樣であつて命令的壓迫的強情的である。又兒童の言語の發達から考へても最初は哀願的なものはなく命令的のものである。兒童が「何卒(どうぞ)」といふ言葉を用ふるに至るのは餘程後の事である。斯く考へて見るなら人類の民族的發達と兒童の發達との間には彷彿たるものがある樣に思はれる。

祈禱の原始的形式は呪願であるが、呪的の所は以後發達した祈禱の中にも全く根跡が消滅してゐない、ヴントによると祈願を强くいひ表はす情緒の深い所にそれが殘つてゐるといふてゐる。而してヴントは祈願の言葉を反覆する所にそれが認められるといひ、アベスダやペタの古歌及び聖書の詩篇の中に其例が見へるといふてゐる(四二八頁)。祈禱の反覆といふ事に就いてチベットには面白い風習がある。チベットで最も盛んな宗教はラマ教であるが、その宗教では御經を多く讀むだけがよいといふ事で信者はどうにかして澤山讀み度いと色々工夫をこらしたが、其結果一つの便利な道具を考へ出した。それは所謂祈禱車(プレヤーホイール)といふのである。それは御經の卷物の小さいものを薄い金屬で拵らへた、丈けの低い鑵の樣な筒に入れ、それに心棒を通し

て、其先きに握りよい柄をつけ、筒の中頃に鎖を付け、其端に重もりをつけたものである。それで其柄を持ち、重もりを振り動かし、勢をつけて廻轉させると、筒と共に中の御經がガラガラ廻る。精神を籠めて斯ういふ事をすると、それが御經を幾度も讀んだ事に相當するといふのである。尙チベットでは風車や水車の仕掛で御經を廻轉させるものがあるが、チベットのラマ教信者は眞面目にさうする。それといふのは祈禱を魔術的に考へてゐるからである。

祈に對する應答　對象觀念が未だ明かでない時の呪願の極く初發的のには應答を要求する事はなかつたが、對象觀念が稍々明かになつた時、祈は其構成の上より見て精靈に對する一つの物語(スピーチ)であつた。而して全く二人の者が會話をしてゐるのと區別はなかつた。初め神を人間的に考へたのであるから人と人とが會話する樣に精靈に對して會話をしかけたのである。所で精靈は見る事か出來ず其聲は聞く事は出來ない。併し精靈は人間と同樣に身體を有し感覺を具へてゐるものと想像してゐる。聞く爲めには人と同樣耳があり、嗅ぐ爲めに鼻があり、味ひ食する爲めに口があると想像してゐた。香ばしき犧牲の煙を上げ又種々己れの好むものを供へたのはそれが爲めである。又彼等は斯く精靈に對し種々なる事を話しかけてゐるが、それによりて何か應答を求めるは古今を通じて人の情である。併し精靈は野蠻人が用ふる樣な言葉で應答をし

て吳れない。尤も野蠻人は自己の叫び聲が山に反響するを聞いて靈の應答と考へた事もあつたが、かゝるもので內心の要求は到底滿さるべきでない。そこで其應答とも見るべき種々なる事を想像した。それを想像せしむる材料となるものは自然界、人間界に於ける不可思議なる現象である。病氣、電雷、大風雨、虹の如き、又は饑饉、旱魃の如き、皆神の言葉と見做された。又夢の如きも神意の現はれたものと思はれた。又闇を引きて神意をうかゞふ事もある。キリストの弟子は十二人であつたが、其內一人ユダはキリストを賣り、遂に自ら悔ひて縊死した。それ故其缺を補ふ爲めバルナバとマッテヤの篤信者二人を後補者とし、神の聖旨を知らん爲め闇を引いたが、遂にマッテヤが當選したといふ事である。これも矢張り其一例である（使一〇二十三—二十六）。或は又クリスチャンが眼を閉ぢて聖書を開き、指頭にて或る箇所を押へ、其所が特に神の敎へを現はすものであると思ふのも亦同樣の意味である。

請願　祈禱の初發的のものは右に述べた如く咒願であつた。所が發達の第二段に進めば咒願は請願となる。この時祈禱の對象はこれまでとは異つた人格的なものとなつてゐる。これまでは祈禱の對象は個性を具へない處の精靈であつたが、この時期になると神又は神々である。而してこの神又は神々には明かに個性的色彩が表はれて居り、神は偉大なる人格者となつてゐ

る。神觀念が斯く進んで來たのは、ヴントによれば魔の觀念が英雄の觀念と結合したからである。英雄に對しては畏敬もし信賴もして居つた。それ故この英雄に對して取つてゐた態度を直ちに神に移してとる樣になるのは自然である。斯る所から神に祈禱する態度も形式もこれまでとは全く一變したのである。卽ちこれまでは精靈に對して强請的命令的であつたが斯る態度はこの時期にはなくなつてゐる。それにこの時期になると人間の社會意識も餘程發達を遂げ社交上にも種々複雜なる思想を抱く樣になつてゐる。懇願、阿諛、哀訴等は英雄會領などに對して請願する方法と考へてゐる。これを又直ちに移して神に應用する故、神に對し嘆願、哀訴、阿諛をなして自己の欲求を滿さんとする樣になるのである。ストロングは子供は親に對して何か要求する場合泣聲で哀訴すると同じ方法、又は商賣と同じ方法で祈をするといふてゐる。（三十一頁）

祈禱の目的は彼等の物質的要求を滿さんとし、又人生の危機を免れんとする所に置かれてあつた。それ故食糧に就いては勿論又其食糧を得る事に關し種子播き時收穫又は獵に行く時などには常に宗敎的儀式が行はれた。其の他結婚、出產、元服、死亡などにも宗敎的儀式が行はれた。又病氣、戰爭、猛獸の危害、天候なども彼等の祈禱の主題となつた。

子供でも未開人でも初めはまだ宗教的要求と他の要求とを區別して居らぬ。それ故特に宗教的要求なるものを有つてゐない。彼等は自己の欲する所を何でも要求する、而して或るものを求める爲めには彼等の考へ得る方法は何でも用ゐる。それで祈禱は彼等の要求する一方法に過ぎないのである。若し他の方法で自己の要求を滿し得れば祈禱はしなくてもよいのである。この事實は子供の祈禱の中に見られる。ストロングは次ぎの如き子供の祈を擧げてゐる。

「どうぞ、神樣今從妹のアンをお護り下さい、お母樣がお歸りになつたから。私共は最早やあなたがお護り下さらないでも宜しうございます」(「祈禱の心理」三十一—三十二)。何たる天眞爛漫さよ。所でこれを見ると神は一個の人間と同樣に想像されて、母親の役目と神の役目とが全く同樣に見られてゐる。それ故彼等には宗教的要求なるものが特に區別されてない事がこれで解るのである。請願の方法は前にいひし如く懇願、阿諛、哀訴、交換的である。「若しこの事が出來たなら長い間何も御願ひ致しませぬ」「若しこの事をさして下さつたなら私はあなたにこれ〳〵の事をしてあげます」など、子供等が晩の祈禱會で祈つてゐるのを聞いたとストロングはいふてゐるが、これらは明かに交換的である。又神前に神の好む供物を持ち行きて請願成就を祈るのも交換的である。かゝる交換的な請願は最も幼稚なもので舊約聖書詩篇の中にはかゝ

る請願の不當なる事を既にいふてある。

神の求めたまふ祭物はくだけたる靈魂なり
神よなんぢは碎けたる悔いし心を藐しめたまふまじ(詩五十一〇十七)

所で今日我國にもかゝる請願が隨分行はれてゐる。繪馬を捧げるのも皆この種の請願である。又三味歌に

「向ふ横丁のお稲荷さんへ一錢投げてチョット拜んでしぶ茶を出して、しぶ茶よく〳〵横目で見れば米のだんごか土のだんごか、おだんごだんご」といふのがある、これは最初土を丸めてだんごにし願がけをする。其願がきかれたら米のだんごにして持つて參りますといふのである。今日では水戸邊ではさういふのがある。かゝる方法でなす請願には神の能力に對して懷疑心が伴つてゐる。果して應驗があるといふ確信はない。「それ信仰は望むところを確信し見ぬ物を眞實とする」といふ神に對する絶對の信頼は極めて遼遠である。(ヘブル書十一〇一)

請願には感謝が伴ふ事がしば〳〵である。ヴントは

「請願と感謝とは往々結合して現はれる。請願に於ては神に對する欲求を現はし、感謝にては其欲求の聽かれた事を謝するのである。それ故この二つはしば〳〵結合せられてある。殊に祈

禱祭の發達した形式に於ては感謝と請願とは一つに結合してゐる。祈る者は恵みに對して感謝し、又更に新しき神の助けを求めるのである」。（四二九頁）

といふてゐる。確かに請願と感謝とが結合して祈禱に現はれる事は多くある。詩篇の中にはこの種のものが多く見出される。この感謝の祈禱は請願よりも發達した高き形式である。それは人格的の神を崇拜する時にのみこの感謝の祈禱が現はれるのを以つて見ても解る。即ち感謝は請願よりも一層明かに人格的の存在者に對して起る感情である。

道德的請願　前に述べし如く請願の目的とする所は始めは物質的要求を滿す事及び人生の危機を免れんとする所にあつた。而して極めて個人的であつた。併し次ぎには斯る物質的個人的の請願は道德的社會的になる。而して請願の目的とする所は精神的となる。勿論請願の全部が悉く道德的社會的となり、又精神的となるのでなく、物質的個人的請願も永く殘つてゐるのであるが、道德的精神的のものが民族の文化が進むと共に生じて來るのである。

未開時代に於ては、人々は個人の物質的幸福を常に其念頭に置いてゐる。所が彼等の社會意識の發達すると共に民族全體の物質的幸福を思ふ樣になり、民族全體の爲め祈る樣になる。共同祭禮（グループ・セレモニー）の如きはそれである。例へばアウストラリヤのインチチユーマ祭禮の如きである。イン

チチユーマ祭禮に於ては、とかげのトーテムに屬する者が共同して大きなとかげを粘土で造り其れを碎いて播き散らしたり、又草の果のトーテムに屬する者は共同して其草の果を播き散らすのである。此れは收獲物の增殖を祈る呪的祭禮であるが、此の中には明かに民族全體の幸福を祈る請願が現はれそめた事を認める事が出來ると思ふ。又旱魃の續く時部族全體が集まつて雨乞をなすが如きもそれである。其他成年式の如き、又は植物成長崇拜（ベジテーションカルト）の如きも皆此の意味を有してゐる。斯くの如く民族全體の崇拜儀式が生ずると共に、其祭事を司る祭司の如きものが現はれる。メジシン・マンの如きは原始時代に於ては普通は魔術者であつたが、民族的な祭事が現はれると共に祭司となる。かくして祭司は公認の權威ある地位を占める樣になる。而して崇拜の對象となつてゐる神は、民族の最も權能ある神となる。所で此の民族最高の神に對する祈禱は主として民族全體の幸福安寧の爲めにせられるのであつて、時には個人の幸福といふ方面から見ると反つて迷惑な場合がある。併し個人の幸福は民族全體の幸福の爲め、民族の權威を以て强制を受ける事は少なくない。併しかゝる共同の祭禮は道德的宗教の出發點を作してゐるもので、宗教の發達から見て甚だ重要な現象である。

勿論かゝる共同祭禮の盛んに行はれる時期と雖も、尙個人的慾求を請願する祈禱が消滅した

のではない。併しそは極めて低級な形式となつてゐる。個人的の請願をするのは必ずしも公認の權能ある神でなくてもよい。モット民族の低級な神でもよい。而して個人的慾求を滿す爲めに魔術者の許に行くものもある。併し社會的權威は常に大なるもので公認宗敎即ち民族的又は道德的宗敎が確立するに至ると、個人の慾求を滿す爲めに使用されてゐた低級な神々及び魔術などを全く驅逐せんとする社會力的傾向が現はれる。其れ故公認宗敎と低級な宗敎との間に鬪爭が始まる。イスラエル民族に於てヤーウエ敎は即ち公認宗敎であつたが、長い間其のヤーウエ敎と對立して崇邱禮拜及び魔術の如きものが存して、個人的慾求を滿す手段となつてゐた。併し此れらの個人的慾求を滿す低級な手段は、公認宗敎によりて漸次排斥せられるに至つた。

祈禱の發達は神の觀念の發達と平行して發達するものである。神の觀念は始め單に不可思議なる能力、魔の如きものであつたが、それに社會の發達と共に英雄的要素が加はり神を偉大なる人格的なものと見る樣になる。所が後には單に偉大なる人格者であるのみならず正義の保護者と考へられるに至る。神は萬物の造主であるのみならず、正義の神であるとの考へが明かになる。斯くの如く神を正義の神であると考へる時期は、人類の倫理的觀念が大に發達した時代

で、此の頃になると祈禱は著しく道德的になるのである。以前の如く個人的でなくなり、社會の爲めに熱心なる祈禱が捧げられる樣になる。のみならず自己に仇し、自己を咒ふが如きものに對しても愛心を以て祈る樣になる。未開時代に於ては自己の仇敵を咒ひ、自己を害する者の上に災害の加へられん事を神に請願してゐた。舊約聖書の詩篇中にでさへ、復讎的の祈禱が多く見出されるのである。併し人間の道德意識の發達すると共に、かゝる祈願をなす事は良心の責めを受ける樣になる。子供でも若し倫理的宗敎の感化の下に養育するなら、早くより道德的の祈禱をする樣になる。子供が物質的なものを祈らなくなる理由はストロングによると、斯る物質的祈禱は捧げても無益だと考へたからでなく、羞恥の感を抱くからであるといふてゐる。即ち斯る些々たる事を祈つて神を煩はす事はよくないと考へるからであるといふのである。尙ストロングによると或る女の子が運動の競技に就いて次きの如くいふた。「私は相手のチームが打ち負かされる樣にとは最早決して御願ひ致しません、私は吾々のチームが最善を盡して競技をする樣にとお祈りします」と。更らに其少女は微笑を含んでいふには「私は相手のチームがお祈りをする事を忘れゝばよいと思ふ」と（ストロング四十六四、十七頁）。此れを見ると相手のチームがお祈りをする事を忘れて負けるとよいといふ事が、其子供心の深い底に未だ殘つてゐ

た樣であるが、併し前の部分を見ると、其所には道德意識の著しき覺醒ある事を認める事が出來るのである。

此の種の道德的請願の最も發達したものはキリスト敎に於て其最も著しき例を認めるのである。キリストの山上の垂訓にも

「我は汝等に告ぐ、汝等の仇を愛し、汝等を責むる者のために祈れ、これ天にいます汝等の父の子とならん爲なり」（太五〇四十四）

とある。又キリスト自ら十字架上に於て己れを十字架につけし者の爲め祈つて「父よ彼等を赦し給へ、其爲すところを知らざるが故なり」といふてゐる（路二十三〇三十四）。ステパノも其石にて擊たれ、死に頻して「主よ此の罪を彼等に負はしむる勿れ」といふて祈つた（使七〇六十）。此れらは皆道德的祈禱の最も崇高なるものである。

道德的請願に於て著しき點は其請願の目的が甚だしく精神化されてゐる事である。夫れ故痛悔的祈禱（アンシャンテレヤー）か此の時期に加はつて來る。ヴントは此れを以て祈禱の最後のものであり、且つ最も熟した形式であるといふてゐる。又「此の痛悔祈禱は祈禱の最高形式であつて人格的の神を崇拜する進んだ時代に至つて始めて見出されるものである」といふてゐる（四三一頁）。物質的請

願に於ては病氣とか種々なる天災があれば其れを免かれる事が祈禱の單なる目的であつた。併し道德的祈禱に於ては此れら種々なる災害は民族の怠慢、罪業の結果であると考へ又病氣は罪の結果であると考へ、先づ罪を懺悔し、神の憐れみをうけ罪の赦しを受けねばならぬと思ひ、そこに痛悔的祈禱が起るのである。イスラエルに於ては或る時期を定めて國民の罪を懺悔する式があつた。此の痛悔的祈禱と共に痛悔詩（ペニテンシャルサーム）も現はれる。（ヴントは之れを或る意味に於て痛悔的祈禱の最初の形式（サブホーム）であるといへるといふてゐる。）此の痛悔的祈禱が現はれると共に攝理（プロビデンス）の觀念が生じた。松本博士は病氣平癒の祈禱に關し、次ぎの如くいふてゐる。

「英國のフランシス、ガルトンは病氣平癒の祈禱が無效だといふ事を統計的に研究して面白い報告を出してゐる。無效ならば祈禱は止めたら可からうとも思はるゝのであるが、病氣平癒の祈禱は日本でも、西洋でも、いつの時代でも、なか〳〵盛に行はれてゐる。之れは畢竟祈禱は聽かれるといふ考と祈禱は聽かれなかつたといふ事實との矛盾を更らに他の考へを持ち來りて調和させるからである。即ち病氣の平癒しなかつたのは神佛に深意が存して居るので、其人の死するといふ事が神佛の攝理に協うて居るので、死んだ方が神の榮光の爲めによいのであつたと合點する。若しさう合點が出來れば祈は聽かれなくとも差支はない。何となれば最初病氣の

平癒を祈つたのは平癒する事が神佛の爲めになると考へたからである。斯く考へて來ると平癒を祈つたといふ事と、平癒しなかつたといふ事とが、必しも矛盾せぬ事になる。矛盾をせぬと思へば矢張祈つても差支へない事になる。信徒が祈の聽かれざるにもかゝはらず、祈る事を止めざるは恐らく以上の譯合から來るのであらう」と（「精神的動作」三四二頁一九一一年初版）。此れによつて見ると祈禱の應驗がなかつたといふ事實と祈禱の應驗があつたといふ考との矛盾を調和させる爲めに攝理の觀念が浮んだといふ樣であるが、吾人の考へでは其の矛盾を調和させる爲めに攝理の觀念を持つて來たのでなく、攝理の觀念が發達した爲め、祈禱の應驗無應驗は問題とせなくなつたと見るのである。兎に角攝理の觀念と共に應報の觀念も亦現はれた。攝理の觀念にしても、應報の觀念にしても、初代の神崇拜には未だ現はれてなく、此れらは後に宗教が發達した時の產物である。

今一ッ、此の道德意識の發達と共に現はれて來るものは、神は人間に何が必要であるかを知り、又何が人間に取り幸福であるかを最もよく知り給ふといふ思想である。此の思想が現はれると萬事は神意に任せ「御旨を成させ給へ」といふ絕對服從の態度により祈禱の最高形式が唱へられるに至るのである。

靈交的祈禱　祈禱の最後の最も發達したる形式は靈交的、祈禱即ち祈禱の目的が請願でなく、神との靈交である。固より此の時請願は全く祈禱から取り去られるのではないが、請願は單に祈禱の一部になつたのである。特に自己の慾求を滿す爲めの請願は最も低級なるものとせられる。而して眞の意味に於ける祈禱は自己の爲め、又は他人の爲めに何かを得る手段でなく、人格的神と人格的人間との靈が交る事であるといふ事になる。祈禱には三つの要素即ち祈禱をする靈と神と慾求する物とがあるが、靈交的祈禱に於ては三つでなく二つの要素即ち神と人とがあるのみである。而して此の神と人間の靈とが相交はる事が祈禱の目的となる。夫れ故祈禱の最高のものに於ては、或る點迄生活の崇高なる目的である所の神との一致和合を意識に實現する事であるといへる。

コーは祈禱を「神と人との間に於ける社會的生活（ソーシャル ライフ）」（「成人の宗教」三五八頁）といふてゐる。ストロングなども祈禱の性質を心理學的に解釋して失張り同樣の見地に立つてゐる。曰く

「祈禱は、意識の中に同時に生起する二ッの自我（セルフ）の直接の相互作用である。それは必要、缺乏及び懊惱の結果で、つまり、其れに打ち勝つ前にモット完全な、又モット充分な自我の現在する事を要求するからである」と、（「祈禱の心理」二〇四頁）

コーは又曰く「若し祈禱の理想的生活が、吾々と神との間の社會的關係であるなら、クリスチャンの生活は其全體に於て他に比すべきものなき完全なる祈禱である」と（「成人の宗敎」三五九頁）。確かにクリスチャンの生活はコーのいへる如く完全なる祈禱である。そこには神と人との完全なる一致和合がある。頭と胴體の關係の如く密接不離の一致がある。而かも人は全く神の意志に服從し、「生くるも死するも常に神に屬するもの」と信じ、常に「神によりて生きまた動き又在る」と思つてゐる。而して其なす事は凡て神の事業であると考へてゐる。そこには神と人との協力といふ思想もある。是に於てクリスチャンの生活は此の人間的の神と人格的の人とが全く合致した生活である。此の合致は社會的にも亦大なる意義を齎たらして來る。即ち神は父であり人は其子である。相互は一人の神を父と呼ぶ兄弟である。夫れ故社會的奉仕の思想がこゝに現はれて來るのである。クリスチャンの生涯は己れ獨りが山中に隱れて見えざる實在と靈交すれば足りるのではない。神を愛し神と交らんとせば自然人を愛し人の爲めをはからなくてはならぬ。さればクリスチャンの生涯は神に對し人に對しての奉仕の生涯である。其の最も高き模範はキリストの一生であつた。

而して靈交的祈禱の現はれたものに二種ある。其の一つは神秘家の祈である。他の一つはク

リスチャンの祈である。神秘家の祈に於ては自我を神の中に沒却（コンサムメーション）するのである。此の場合神は非人格的の神である。所がクリスチャンの祈に於ては自我の沒却ではない。寧ろ自我の完成である。尤もさきに述べし如く、クリスチャンの生涯は神に對し絶對の服從をなした生涯である。併し其場合個人の意志を殺す事ではなく、神の大なる意志によりて個人の意志を確立せしめる事である。神秘家の祈禱には社會的の意義はない。寧ろ個人的である。夫れ故クリスチャンの祈の如く社會的奉仕の觀念は起らぬのである。

三　儀式的祈禱

言語的發表　祈禱は言語に發表された宗敎的情操で、此の一旦言語に表はれた祈禱が個人から個人へ、團體から團體へ傳へられて來ると即ち儀式的祈禱となるのである。「のりと」でも、佛敎の種々なる御經でも、キリスト敎の「主の祈」乃至は種々なる成文祈禱でも皆然らである。所で此の儀式的祈禱（リチュアリスチックプレヤー）は其れ自身一種の能力を有するものゝ如く考へられ、其れを用ゐる者の精神的狀態を無視する事になると、其祈禱が如何に發達した形式の祈禱であつても單に魔術的呪文となり、眞の祈禱の意味は失はれてしまふのである。

所で凡て儀式的祈禱には斯る危險が常に伴ふてゐる事は疑ふ事は出來ぬ。斯くいふも儀式的祈禱は此の危險を免かれる事は出來ぬといふのでもなく、又利益が全くないといふのでもない。儀式的祈禱を用ゐる場合、其れを用ゐて祈禱する者は大なる利益を其れによりて得るもので、決して無意味ではない。勿論言語の殆んどない祈禱もあるがそれは神秘的に傾いたもの、又は宗教心の餘りないもの、或は教養の低い者にある。丁度芭蕉が松島の絶景に對した時、又は貞室が吉野の絶勝を眺めた時、一句も出なかつたやうに、神秘の感に滿された時は祈が言語をなさぬ時は往々ある事である。彼のセント・フランシスが沸曉に至るまで「我が神よ我が神よ」といふたのは其の代表的なものである。

言語は甚だ大切なもので我々が物を考へるのは主として言語によるのである。而して我々の思想する事に對して何か妨げがあるなら言葉にいひ表はして見るのである。讀書してゐる時周圍が餘り騒がしいと聲を立てゝ讀む。又解し難い文章でもあると其所を特に聲を出して讀んで見る。それで此の發聲的發表は自己の内心に沈默せる宗教的願望の意味を充分に實現するに必要なのである。曾つてパルラマイといふ瞽者がイエスの恤みを求めて來た時イエスは殊更らに其瞽者に向ひ「爾われに何を爲れんと欲ふや」と問ひ、瞽者をして「主よ見ゑなん事を欲ふ」

と答へしめた事がある(馬可傳十〇四六—五二)。此の如く自己の内心にひそんでゐる願望を口にいひ表はす事は心理的に甚だ大切な事である。若し口に其願望をいひ表はす事が出來なかつたなら、祈る事が出來ない事が往々ある。それで若し何か祈の形式でも定つてゐると其れを用ふる事によりて容易に自己の願望を祈にいひ表はす事が出來るのである。イエスが其弟子達に祈の型を與へたのは此の點に於て深い意味があると思ふ。願望が内心に起つてゐても如何に祈るべきかを知らざる時、祈る心は漸次薄らぎて祈の意味は殆んど失はれてしまふ事になるのである。尤も祈が單に言葉に留まる時は祈の意味は全部失はれるのであるが、併し其意味を全く失つた祈に於ても、尙心理的にも又宗教的にも或る價値を殘してゐるのである。佛教などでは譯の解らぬ經文を讀む。又キリスト教でも舊教などでは會衆には少しも解らぬラテン語の讃美歌を歌ひ祈禱をなす。それには祈禱の意味は全くない。併し其意味のない祈禱でもそれをさゝげてゐる間は自分が今祈禱をしてゐるといふ事を知つてゐる。其間は心を高く天に向け、種々の妄想から離れてゐる。即ち精神を集中する事に於て大なる意味があると思ふ。それ故儀式的祈禱は祈禱をする者に取りて大なる助けとなる事は明かである。

祈禱に伴ふ身體の姿勢　跪づくとか、或は眼を閉ぢるなどの如き身體の姿勢が祈禱に伴ふの

にあるが、此れらの姿勢は凡て宗教的態度を心に生ぜしめる爲めに甚だ必要なるものである。斯る姿勢は一方より見れば確かに注意の集中をなすに大なる利益がある。而して此れらの姿勢で多くのものは人が勝手に選んだものではなく、又心ならず選んだものでもなく、自然に現はれたものである。　ひ換へるなら人間の本性から直接に發達したもので、始めは全く本能的の發表であつたのである。夫れ故何人にも祈禱の時に眼を閉ぢ周圍の凡て見ゆる刺激を遠ざける事が如何にも有效に感じられる。跪づくといふ事は 慄 遲（ヒユーミリチー） 又は マクドーガル の呼んだ自己卑下の本能の自然の發表である。故に神の前に出で心に慄遲なる態度を生ぜしむる爲めには甚だ助けとなるのである。

此れは又聯想の方から考へても大なる利益がある。跪く事や、目を閉ぢる事や、又は手を胸に取りて握りしめなどすると幼少なる子供でも斯る態度によりて敬虔感情や宗教的畏敬が聯想的に生ずるのである。かくするは自然であるが、其れが又暗示となりて宗教感情が惹起される事になる。されば前に述べし如く祈の言葉を讀むのも、又かゝる身體的姿勢をなすのも等しく祈る者に大なる益をなすものであるといはねばならぬ。

宗教感情の表出　以上は身體的姿勢の效果に就いていつたのであるが、かゝる身體的姿勢は

つまり宗教的感情の表出運動に外ならぬ。そも〳〵宗教的感情の外部に表はれるには二つの方面がある。一つは言語的表出で野蠻未開時代には之を韻律的に發表し詩歌を形造るのである。此れが發達したものは讃美頌詠の如きものである。祈禱そのものも言語的表出である。他の一つは身體的表出である。天を仰ぐ事や、合掌する事や、又跪づく事などは皆それである。心理學上から表出運動の發達を見るなら身體的表出が言語的表出よりも早く表はれる。身體的表出でも最も早く表はれるものは身振りで、古代の舞踏などはそれである。彼等は自己の內心の宗教感情を充分外部に表はす事が出來ないで身體を以て表はしたのである。言語の發達から考へても最も原始的のものは身振語といふのである。

斯くの如く宗教感情は自然言語に表はれ、又態度に表はれるのであるが、更らに內的感情と調子を一つにせん爲めに適當なる境遇を求める。さわがしき所は不適當とせられ、常に閑靜なる所が選ばれる。イエスは夜靜かに山の中へ這つて祈つたといふ。只閑靜なる所のみでなく感情を助けて充分發達せしめる爲めに種々なる具體的對象物又は器物、裝飾物などを要求する。寺に佛像其他種々なる像を置いたり、キリスト教の教會に十字架や、又はセントの像、聖母マリヤの像を置くが如き皆內的感情を誘起せしめんが爲めである。或は人家を離れた靜かなる處

に神社又は教會を建つる事を望み、其神社又は教會の周圍に樹木を茂らしめる如き皆内的宗教感情と其調子を一にせんとするからである。

何故に祈禱をするか　祈禱は宗教心の呼吸とも見るべきもので全く天性自然の發露である。ゼームスも祈禱は人間の天性より出づるものであるといふ事を說いて次ぎの如くいふてゐる。

「科學的識見の著しく進歩した今日祈禱の效果を論議するもの甚だ多く、一方には祈禱をする事の當然なる事を論ずるものあれば、他方には此れが無用を喋々するものあり。然れども彼等の中人間は何故に祈禱をするかを說明するもの甚だ少し。其理由は他にあらず、是吾人の天性にして禁ずべからざる事是なり。是故に將來科學は如何許り此れに反對することあらんも世のあらん限り人間は祈禱する事を止めざるべし」と（「心理學」第二卷三一六頁。）

然り祈禱は吾人の天性より出ずるものにして自然の要求である。然らば何故人は祈禱をするかといふ問題に對しては既に答へられた。然しゼームスがいへる如く現今祈禱の效果を論議するもの多く、一方に其無效をいふものあり、他方に於ては之れをなす事の當然なる事を主張するものとある。其れは科學的知識の進歩の影響といふよりも寧ろ近世生活の影響であらう。コーも其著「成人の宗教」の中に此の事を論じて居る。

それで吾人は現代人特に現代の子供や青年が何故に祈禱をするかといふ事を考へたいのである。

此れに就いてプラットはその原因を擧げて教育であるといふてゐる。即ち子供は祈る事を教へられ、又祈の例を示された故、服從によりて其祈をうけ、永い間に其れに習慣付けられるのである。夫れ故或るものは身體的の習慣によりて生涯其祈を保持するが、大多數の者は青年期に達した時全然其教へられた祈を放棄してしまふか、又は單に習慣にのみよらず此れが自分に取りて助けとなるものであると信じ、又祈をせずには居られぬといふ所からするのである。それで祈禱者の祈禱は成人に達した時二種になる。一つは習慣的祈禱即ち「云ふ」だけの祈禱で他の一つは眞の祈禱である。此の二ッの内何れが最も多いかといふに、プラットは前者でなく後者であるといふ事を彼が實際に調査していふてゐる。大多數の者の祈禱は「私は祈らずにゐられないから祈る」といふのと、「神が聽かれるから祈ると」といふのとであるといふてゐる。（「宗教意識」三一八頁）

更らに祈禱をせなくなつた原因に就きプラットは三つの原因を擧げてゐる。(1)不健康、衰弱（エキスハウスチョン）(2)罪の感(3)意氣沮喪及び懷疑即ちそれである。

此の(3)は一般に青年期に於ける重なる原因であるとしてゐる。而して彼が得た回答の三分の一は祈禱が不要であるとの考へが生涯にあつて、其れは十三歳から二十一歳までにあつた事を示してゐるといふてゐる。此の懐疑の原因は青年期に起る一般の形で、神の存在又は神の性質祈禱の正當なる事に就いての懐疑である。此の懐疑はどこから起るかといふと子供時代に神の性質及び祈禱の目的に就いて教へられた事に關係してゐるとしてゐる。

次ぎに罪の感であるが此れは實罪(アクチュアルシン)でなくギルトの感である。此の感からして青年男女は自ら自暴自棄して神の前に出でる事を餘りに汚らはしく考へるのである。懐疑思想と罪の感は青年期に於ける祈禱心に妨げとなる主なるものである。成人に於ては疲勞、衰弱、及び心身の不健康である。

「私は健康の時最も善き祈をいたしました。」

「永い間甚だしい病苦をなめ身體も衰弱しましたが其れが爲め熱心な祈は出來なくなりました。最も大きな苦しみには私は受動的であります。」

「夜甚だ疲れた時熱心に祈る事が困難でした。但しそれは形式上の事と見へました。」

「充分健康な時祈る事を好ましく感じましたから感謝に充されました。私は神樣が凡てよさ

ものを與へ給ふから只感謝しなければなりません」。

此れらを考へるなら多くの人は疲勞した時、又は病氣の時は祈る事が少なく、幸福で健康の時は神の愛を感ずるのであるから祈る事が多く出來るものゝ樣に思はれる。

或る人は不健康な時に最も多く祈る。併しその時の祈は只僅かなるゼスト(切)に過ぎない。

「私は私の不健康な時により多く祈ると思ひます。併し恐らくは一つの唸り祈禱(グロー・ニングプレヤー)でありませう。

成年や青年が何故に祈をするかといふに卽ち要求をもつてゐるからである。それ故彼等は其の必要なるものを得る爲めに祈りが助けになると考へるか、或は又彼等は其必要なるものを何か祈禱の形式にいひ表はすより外に仕方がないといふ單純な理由によるかである。それ故請願禱は原始的の祈禱の形式であるが、いつまでも重要なる地位を占めてゐるものである。ブラットが調べた結果によると祈禱の性質に就いて六十五の答案の內で四十二は主として請願禱を含んでゐる。二十三のみの請願が二次的のものである事を示してゐる。

請願の內容に就いて考へて見るに物質的の惠よりも精神的の惠を求めてゐる。併し何か危期に遭逢した時には物質的な惠を要してゐる。普通の時には個人でなく一般的で且つ精神的であ

る。

宗教心理學（終り）

大正十年五月十七日印行
大正十年五月二十日發行

【定價金四圓八拾錢】

著者　伊藤堅逸
發行者　河本俊三　東京市麹町區隼町二十番地
印刷者　奥村紫樓　東京市麹町區隼町二十番地
印刷所　洛陽堂印刷所　東京市麹町區麹町二丁目九番地

宗教心理學
奥付

不許複製

發行所　洛陽堂　東京市麹町區半町二十番地
電話九段九六六番
五一一番
振替東京二〇九一四番

洛陽堂版哲學及家庭書類

書名	著者	定價	送料
生命論	永井潛	六、〇〇	一、二七
生物學と哲學の境	同	六、〇〇	一、二七
生物學上より觀たる心	本多良靜	二、五〇	一、〇八
生命神秘論	小酒井光次	三、五〇	一、一八
增補遺傳之研究	渡邊喜三	三、五〇	一、一八
進化論者ダーキン	岩崎重三	三、〇〇	一、一〇
滅び行く宇宙及人類	兒玉昌	二、八〇	一、一二
世界自然科學史	ギユンター著 黑田啓次譯	三、〇〇	一、一八
面白い科學の話	若林欽	二、〇〇	一、一〇
宗教と人生	帆足理一郎	二、五〇	一、一二
哲理と人生	同	二、〇〇	一、一〇
水の自然と人生	關衛	三、〇〇	一、一二
天候と人生	同	二、一〇	一、一二

津田左右吉著（各巻重版）

▼貴族文學の時代
▼武士文學の時代
▼平民文學の時代

▼定價 五、〇〇
▼定價 五、五〇
▼定價 六、〇〇

文學に現はれたる

我が國民思想の研究

國民の實生活を基礎とし文化史を背景として歷代の文學を微細に研究し、其文學によつて國民の心生活と其の變遷發達の徑路とをあらゆる方面から考察したものであります。從て本書は國民思想史の最初の試であると共に、普通のものとは全く取扱方と着眼點とを異にした新い文學史であり、同時に國民生活の內面から見た文化史であります。文學上の乾枯びた知識で强て構造した死んだ概念の行列に過ぎない從來の國民思想論とは全く違ひ、生きた精神生きた情懷を現實生活其のものに於て看取したのでありますから、其所說は多くの點に於て通俗の見解とは正反對になつてゐるので、此意味で大膽な偶像破壞を行つたものであります。武士道も儒敎も藝術も或は又所謂國民精神も盡く價値を顚倒させられました。因襲思想に囚はれてゐる者は本書を讀で驚倒します。しかし何れも細心なる學術的研究の結果であつて、不羈自由なる思想の根柢には正確なる事實と嚴密なる論理とがあります。そして豐富な材料と鋭敏な批評眼と淸新な筆致とにより國民生活と其思想との關係を心理的に觀察し解剖し且つ描寫してゆく處に本書獨特の方法があり、其所說が自ら現下の大問題たる國民思想根本的改造に對する新方向の暗示となる處に本書の生命があります。

中山昌樹譯（各巻重版

全譯
詳註

ダンテ神曲

▼地獄篇
▼煉獄篇
▼天國篇

▼菊判天金三百五十頁挿畫十餘枚
▼定價 各參圓五十錢 稅十八錢

地獄篇に於て人類罪惡の奥底を窮め、煉獄篇に於て人間の意思威力を盡くせしダンテは、天國篇に於て靈魂の壯美なる凱歌を奏す。一切の英雄と聖徒は群がり出でて彼を迎へ、遂に神の幻影に接するに至りて止む。ダンテの藝術と智力と意志は茲に其極みを盡くして古今一切の作品の上に君臨す。今や譯者多年の努力により神曲三篇一萬四千二百三十三行其のまゝの原詩全譯始めて完成し我民族の偉大なる獲得なりと信す。藝術哲學宗教政治に携はる者は素より、凡そ人として眞に生きんと欲する者は悉く來たりて靈感の此宇宙的神泉に水汲まざるべからず。

▼アケンピス著
中山昌樹譯

基督に倣ひて（新版）

▼定價三、〇〇

伊藤堅逸著

兒童宗教教育の基礎

▼菊判布製函入四百五十頁
▼定價參圓八拾錢 稅十八錢

教育終局の目的は信念篤き人物を造るにあり。信念の涵養は之を成人に施すよりも受容力に富める兒童期に於てするを最有效なりとす。此意味に於て兒童の宗教々育は人類教化の根本なるなり。兒童宗教教育の至緊なる此の知きに拘らず從來我國に斯種の著の少なかりしは歎ずべし。著者茲に感ずる所あり宗派に偏せず教理に囚はれず飽まで兒童心理てふ公平の立場に立ち兒童心理を分解して苟も宗教々育の基礎となるべきは之を闡明して餘蘊なし。されば本書は兒童の一般並に宗教々育に關係ある士の一人として讀まざるべからざる眞著なりとす。

▼關寛之著 兒童學に基づける

宗教教育及日曜學校

▼定價五、五〇

高島平三郎著（四版）

▼菊判天金布製函入五百頁
▼定價四圓五拾錢稅廿七錢

應用心理十四講

科學を實生活の基礎としやうとしてゐるのは大戰より敎へられた改造世界の大勢である。殊に精神科學としての心理學は、勞働生產界に於ける能率增進及び人心統御、醫治界に於ける精神療法、軍事界に於ける個人の能力の利用等廣く社會百般の方面に盛に應用されるに至つた。科學と人生との調和を天職として夕に名聲高き著者は一般世人の知識程度を標準として日常生活に如何に心理學を應用すべきかに就き本書を大成した。されば本書は敎育家、宗敎家、軍人、官吏、實業家、職工監督、婦人及主婦等苟くも科學的經濟的に生活し且つ人を對手とする者の必ず一讀すべき我國唯一の名著である。

▼高島平三郎著　敎育に應用したる　兒童研究（拾版）▼定價五、〇〇

324
644

終